甲府市文化財調査報告９

史跡 武田氏館跡Ⅴ

― 県道甲府山梨線整備事業に伴う発掘調査報告書 ―

2000

山梨県甲府土木事務所
甲府市教育委員会

序

今日、「まちづくり」ということばに象徴されますように、地方都市には豊かで強い個性が求められております。そうした中、地域の歴史や景観、伝統文化、自然が資源として見直され、これらをキーワードとしたまちづくりが各地で展開されるようになって参りました。このことは、歴史や伝統文化が果たす役割が、地域においていかに重要であるかを雄弁に物語っており、その保護・保存が現代に生きる者の重大な責務であることを改めて実感させてくれます。

本書は、平成9年度・10年度の2か年にわたって実施された県道甲府山梨線整備事業に伴う発掘調査報告書であります。調査場所は武田氏館跡の前面にあたり、国史跡の指定区域に位置することから、計画段階から山梨県甲府土木事務所と文化庁・県教育委員会・市教育委員会が慎重に検討を重ね、史跡武田氏館跡整備活用委員会・同調査団会議での協議を踏まえて、ようやく発掘調査とこれに続く整備事業に着手することができました。

この道路は、周辺住民にとっては唯一の幹線道路であり、また、武田神社へ向かう多くの参詣客・観光客が利用しておりますが、史跡保護との調和を図るため長期にわたる発掘調査が必要となりました。この間、ご協力をいただきました皆様方に、先ずもってお礼申し上げる次第であります。

おかげさまで、県道の直下に戦国時代の遺構が良好に残されている状況が把握され、遺構の保存処置に万全を期すことができました。今後は、現在策定中の武田氏館跡整備基本構想・基本計画の中にその成果を取り入れ、武田氏館跡を核としたまちづくりに活かして参りたいと考えております。

本報告書が学術研究深化への一助になるとともに、教育資料へも活用され、郷土の歴史と文化を再認識する機会となれば、この上ない喜びであります。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行まで多大なる御理解と御協力をいただきました甲府土木事務所、及び御指導・御鞭撻を賜りました関係各位に深甚なる感謝を申し上げますとともに、引き続きのお力添えをお願い申し上げます。

平成12年2月

甲府市教育委員会
教育長　金丸　晃

例　言

1．本書は山梨県甲府市古府中町・屋形三丁目・大手三丁目に所在する国指定史跡武田氏館跡の発掘調査報告書である。
2．本調査は、県道甲府山梨線整備事業に伴う発掘調査であり、甲府土木事務所の委託を受け、甲府市教育委員会が調査を実施した。調査経費は甲府土木事務所が負担した。
3．調査は、県道南北部分（平成９年度・武田氏館跡第54次調査）を平塚洋一が担当し、県道東西部分（平成10年度・同第55次調査）を平塚洋一・伊藤正彦が担当した。
4．本書の編集・執筆は、市瀬文彬（文化芸術課長）を責任者とし、伊藤正彦が行った。
5．本書の挿図は、笠井由美・鈴木由香・内藤真千子・林久美子・藤井武美・栗田かず子山崎雅恵・早川さやか・伊藤正彦が作成した。
6．本書に係わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。
7．発掘調査及び報告書作成に際して、次の方々からご指導ご協力を賜った。厚く御礼を申し上げる次第である。

伊藤正義	磯貝正義	清雲俊元	小野正敏	萩原三雄	笹本正治
八巻與志夫	鈴木　誠	杉原初男	北垣聰一郎	原　　真	畑　大介
小野正文	藤澤良祐	森原明廣			

凡　例

1．遺構・遺物番号は、各調査年次ごとに通し番号とした。ただし遺構番号は、今回の報告に際し、付け直してある。
2．遺構名は、各遺構の性格・形状・検出状況等に応じて各調査現場において付したが、将来、史跡整備に伴う調査によって全体が把握された場合、変更が生じる可能性がある。
3．全体図、遺構・遺物実測図の縮尺は、図面上に表示した。
4．遺構断面図における水平数値は、海抜高度を示し、単位はｍである。
5．報告書中の方位はすべて磁北を示している。
6．実測図中のスクリーントーンは、各挿図ごとに指示した。

平成９年度（第54次調査）発掘調査参加者

雨宮英郎	池谷富士子	小沢菊太郎
茅嶋一男	倉田勝子	小池孝男
小宮通子	三枝袈裟男	佐田金子
清水公子	武井美知子	長澤晴雄
望月利子	渡辺　茂	

平成10年度（第55次調査）発掘調査参加者

雨宮英郎	池谷富士子	岡　悦子
小沢四郎	金井いく代	川口格一
岸本美苗	小池孝男	小宮通子
三枝袈裟男	坂本しのぶ	佐田　昇
清水公子	武井美知子	中村孝一
長澤晴雄	根岸利昭	能美　浩
花曲敬子	保坂邦雄	渡辺　茂
渡辺百合子		

目　次

序
例　言
凡　例
目　次

第１章　調査の経緯と概要
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……1
　第３節　調査の概要……3

第２章　遺跡概況
　第１節　歴史的環境……4
　第２節　調査地の概要……5
　第３節　過去の発掘調査成果……7

第３章　検出遺構・遺物
　第１節　第54次調査（県道南北通り）
　　(1)　溝　跡……9
　　(2)　井戸跡……12
　　(3)　集石墓坑……12
　　(4)　土　坑……12
　　(5)　ピット……13
　　(6)　遺　物……14
　　付　遺物観察表……26
　第２節　第55次調査（県道東西通り）
　　(1)　水　路……28
　　(2)　土壇・堀……29
　　(3)　石　列……31
　　(4)　その他の遺構……33
　　(5)　遺　物……36
　　付　遺物観察表……76

第４章　調査の課題と成果
　第１節　地籍図との照合・検討……80
　第２節　発掘調査の成果……84

挿図目次

図1　県道整備イメージスケッチ……1
図2　調査範囲図……2
図3　第55次調査区……3
図4　武田氏館跡発掘調査地点……4
図5　中世集落・寺院分布概念図……5
図6　武田氏館跡周辺地形図（明治42年）……6
図7　武田氏館跡周辺地形図（大正10年）……7
図8　武田氏館跡周辺地形図（昭和54年）……7
図9　1号～5号溝平面図……10
図10　6号溝平面図……11
図11　8号・9号溝平面図……15
図12　10号～13号溝平面図……16
図13　集石墓坑・井戸跡平面図……17
図14　1号～5号土坑平・断面図……18
図15　ピット平・断面図(1)……19
図16　ピット平・断面図(2)……20
図17　ピット平・断面図(3)……21
図18　第54次調査出土遺物(1)……24
図19　第54次調査出土遺物(2)……25
図20　第54次調査出土遺物(3)……25
図21　4号・5号集石平・断面図……34
図22　1・2区全体図（1号・2号水路、1号土塁、盛土層1）…37～38
図23　2・3区全体図（2号・3号水路、1号土塁）……39
図24　3区全体図（1号石列、1号土塁、3号水路）……40
図25　4・5区全体図（4号水路）……41～42
図26　7・8区全体図（2号土塁）……43～44
図27　9区全体図（3号土塁、1号堀）……45～46
図28　9・11区全体図（4号土塁、1号堀）……47～48
図29　10区全体図（2号石列）……49～50
図30　12区全体図（1号集石）……51～52
図31　13区全体図（3号・4号石列、5号水路、埋土層1）…53～54
図32　13区全体図（6号水路、5号石列、道路状遺構）……55～56
図33　14区全体図（5号土塁、2号集石、埋土層2）……57～58
図34　14区全体図（6号石列）……59～60
図35　15区全体図（3号集石）……61～62
図36　15区全体図（4号・5号集石、盛土層2）……63～64
図37　15区全体図（7号・8号石列、盛土層3、埋土層3）…65～66
図38　17区全体図（6号土塁、7号水路、9号石列）……67～68
図39　18区全体図（盛土層4）……69～70
図40　第55次調査出土遺物(1)……71
図41　第55次調査出土遺物(2)……72
図42　第55次調査出土遺物(3)……73
図43　第55次調査出土遺物(4)……74
図44　第55次調査出土遺物(5)……75
図45　現況・地籍図照合図……81～82
図46　武田氏館跡地籍図（字梅翁・大手下）…83
図47　遺構軸……85
図48　復元想定図(1)……86
図49　復元想定図(2)……87

表目次

表1　ピット一覧……22～23
表2　第54次調査出土遺物一覧……26～27
表3　第55次調査出土遺物一覧……76～79
表4　検出遺構方位軸……85

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

平成７年３月下旬、甲府土木事務所より県道甲府山梨線（通称武田通り及び武田神社前東西通り）の歩道・車道の整備、電線等の地中埋設工事、ベンチ・街路灯の設置、街路樹の植栽等の修景工事を内容とする道路整備計画案が提示された。現在、この道路は周辺住民にとっては生活道路であり、観光客には史跡武田氏館跡へのアクセス道路として活用される重要な幹線道路である。この道路整備計画に関わる部分は史跡武田氏館跡保存管理計画でＡ～Ｃ地区に区割りされた地点、すなわち梅翁曲輪及び家臣団屋敷と推定される地域に含まれる。特に保存管理基準ではＡ・Ｂ地区について道路の新設、及び既存のものの拡幅は認められておらず、改修・舗装についても事前の発掘調査と検出された遺構の適切な保存措置が条件とされている。そのため、文化庁・県教委・市関係部局及び甲府土木事務所等と協議を繰り返すとともに、武田氏館跡整備活用委員会・同調査団会議に諮り討議することになった。

約４年にわたる協議によって、次のことが確認された。①遺構の保存を前提とした上で、歩道整備に重点を置いた道路整備計画を承認すること。②将来の史跡公園整備を見据えて、今回は暫定的な道路整備へと計画修正すること。③電線等の地中埋設及び側溝敷設など、掘削を伴う部分については原因者の経費負担で発掘調査を実施すること。④発掘調査は甲府市教育委員会が主体となり、平成９年度に南北通り部分（通称武田通り・史跡武田氏館跡第54次調査）、10年度に武田神社前東西通り部分（史跡武田氏館跡第55次調査）の順で調査すること。

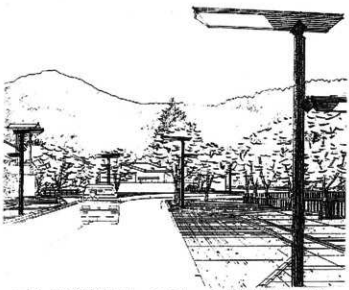


図１　県道整備イメージスケッチ（協議資料より）

第２節　調査の方法と経過

調査範囲は電線等の地中埋設及び側溝敷設など掘削を伴う部分、すなわち道路の両側、幅2.5～３ｍが対象となった（図２）。現在、県道周辺には住宅・店舗が立ち並び、都市化が著しい。調査に際しては歩行者・車両の安全を図り、更には宅地への出入り、県道からの住宅街への進入路確保に努める必要があった。道路使用許可の関係上、両側交互通行を確保しなければならず、道路の両側を同時に調査することは不可能であった。そのため調査地区として、道路片側のみを10～20ｍ程度に適宜区切り、調査を進めなければならず、特に住宅の前面を調査することになる住民とは個々に調査開始時期・期間・範囲について話し合い、了解のもと調査を進めた。調査は、狭長で細切れ状態の範囲ごとに進められ、写真撮影・記録図面作成の後、埋め戻し、新たな調査区の掘り下げを行う、という繰り返しであった。多くの制約により調査範囲中、県道から住宅街への進入路部分は調査することができなかった。更に南北通り（通称武田通り）に面し、かつて梅翁曲輪の堀が存在した地

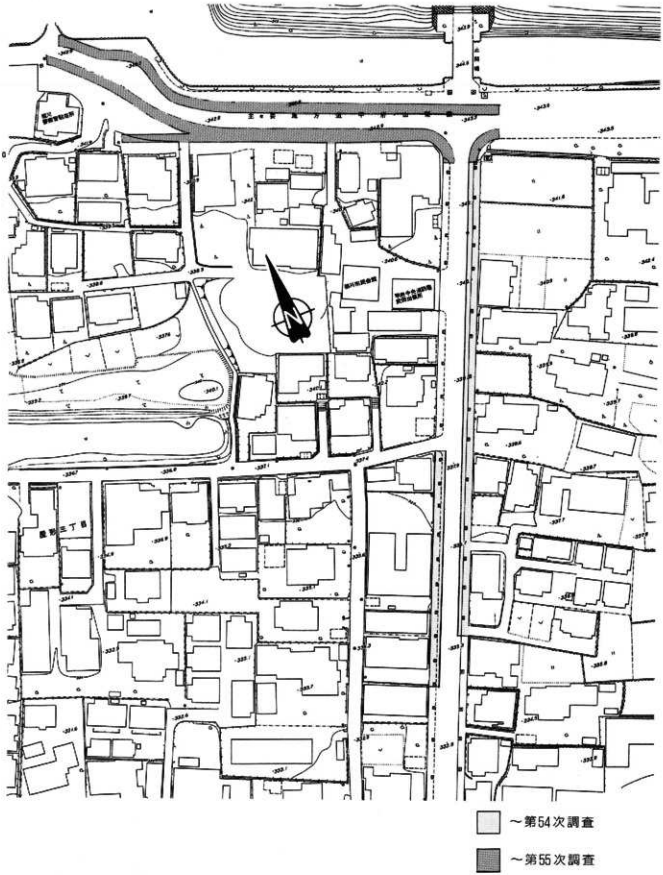


図2 調査範囲図（S＝1:1,200）

点は、昭和30年代に埋め立てられていたため、試掘調査を実施し、掘削が及ぶ範囲は依然として、埋土に相当することが確認できたため調査範囲から除外した。

平成９年度、第54次調査は県道南北通り（通称武田通り）約150ｍの範囲を調査対象とした。平成９年８月25日から９月３日まで試掘調査を実施し、遺構の広がり、前述した梅翁曲輪の堀の埋め立てを確認した。本調査は10月14日より開始し、12月24日まで実施した。調査面積は約660㎡である。平成10年度、第55次調査は武田神社前東西通り約130ｍの範囲を調査対象とした。調査は８月５日より開始し、翌平成11年３月22日まで実施した。調査面積は約945㎡である。

第３節　調査の概要

発掘調査では当初の想像を上まわる成果が得られた。すでに県道工事に際して、遺構の破壊、あるいは部分的な削平などを受けているものと考えていたが、思いのほか良好に遺構が残っていることが確認できた。ただ都市化に伴う水道・都市ガス管の埋設は、県道の南北・東西通り、ほぼすべての調査区において確認された。

平成９年度、第54次調査の県道南北通り部分は地名・古絵図等からは家臣団屋敷が広がる空間と想定されていた。調査は県道西側部分から開始し、その後、東側部分へと移った。調査により井戸跡１基・集石墓坑１基・溝跡12条・ピット81基等が確認された。予想していたような屋敷割・建物配置が知れる直接的な資料は得られなかったものの、現在の街路軸線とは大きく異なる溝跡が検出された。戦国期城下町の形成・町割プラン施行との関係を窺う上で興味ある資料となろう。

平成10年度、第55次調査の武田神社前東西通り部分は堀を挟んだ館の前面にあたり、武田氏滅亡後には梅翁曲輪が増設され、館内に取り込まれた地点に相当する。調査は南側部分から遠宜、１区～12区として開始し、その後、北側部分（13区～18区）へと移った（図３）。調査により水路跡・土塁跡・堀跡・石列等とともに広範囲に及ぶ造成の痕跡が確認された。

なお、埋め戻しに際し、検出された遺構は将来の史跡整備・活用を考慮して山砂・土嚢により養生処置を施し、埋め戻してある。

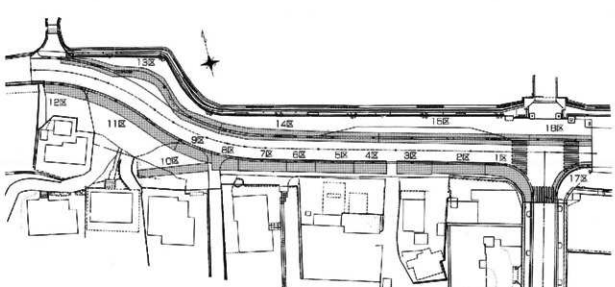


図３　第55次調査区

第2章　遺跡概況

第1節　歴史的環境

甲府市街の北部、上積翠寺町から流れ出す相川によって形成された相川扇状地の開析部に武田氏館跡は位置する。館の東方山麓から半島状に突き出した尾根を「躑躅が崎」と呼び、これに接して造営されたことから躑躅が崎館とも呼ばれる。近年、地中レーダー探査によりこの出崎から武田氏館跡に至る半島状に連なった尾根の存在が推測されており(『史跡武田氏館跡Ⅲ』)、こうした旧地形を利用した館の占地・造営が推定される。相川扇状地は北(積翠寺丸山)・東(愛宕山)・西(湯村山)の三方を山で囲まれ、扇状地の西縁は相川が流下して崖を形成し、東方山麓沿いには藤川が流れ扇状地面を深く浸食している。武田氏館跡は三方を山に囲まれ、更にその東西を流下する相川・藤川の存在により自然の要害地形を作りだしていた。

武田氏館の造営以前、館周辺の歴史はいまだ判然としない。特に考古学の成果に負うところが大きい平安時代以前の様相は、現在までの断片的な試掘調査の成果と僅かに遺跡の分布から推測するのみである。試掘調査に際して、縄文土器の出土も見られるが、いずれも流れ込みと考えられ、明確な足跡として遺構が確認されるのは奈良・平安時代からである。武田氏館跡第21次調査に際し、奈良～平安時代の土師器・須恵器を伴う溝跡を検出している(図4)。奈良・平安時代の遺跡分布は扇状地外縁、相川・藤川の流域に集中し、数地点のみの限られた分布である。また城館等武田氏関連を除く中世遺跡の分布についても、同様に、数地点の分布が確認されるのみである。いずれも扇状地外縁を流下する河川の流域に集中し、扇央部一帯には遺跡分布が確認できないのが現状である。

文献上では、平安末～鎌倉時代にかけて、甲斐に土着以後、現在の甲府市内に根拠を置いて活動する武田氏一族が確認できる。現市内中心部には、一条郷に根拠を置いた一条忠頼、市内東部では板垣郷に拠った板垣兼信、市内西部から北部にかけては塩部庄・小松庄に拠った武田有義が知られる。南北朝～室町時代においても、法泉寺(武田信武創建)・恵運院(武田信縄再興)・興因寺(武田氏再興)など、現在、武田氏館跡周辺の山裾に点在する寺院の創建・再興に際しては武田氏との関係が伝えられている。

図4　武田氏館跡発掘調査地点(『甲府市史』史料編第1巻より)

館造営当時、すでに周辺には史料上確認できる集落として小松・塚原がある。甲府市小松町諏訪神社旧蔵の文明18年(1486)２月21日付け棟札銘には「小松庄」と見え、更に天正11年(1583)正月14日の徳川家康印判状写には「小松内積翠寺」とある。「小松」の地は、狭義には現小松町周辺に比定されるが、広義には相川中流域から上流の現上積翠寺町までを含んだ汎称として用いられていたことがすでに明らかにされている。他に、年代は下るが『高白斎記』天文22年(1553)３月６日条に、小松・塚原の他、和田・岩窪・駒井(積翠寺)郷に対して人足押立公事を免じる印判が下された記述が見える。いずれも史料上確認できる集落は、扇状地外縁の山麓部に集中するとともに、河川の流域に発達している。

武田氏館跡周辺の地には、すでに平安時代末から武田氏との繋がりがうかがわれ、永正16年(1519)、信虎により館が造営された地は「小松庄」に含まれる地であったのかも知れない。

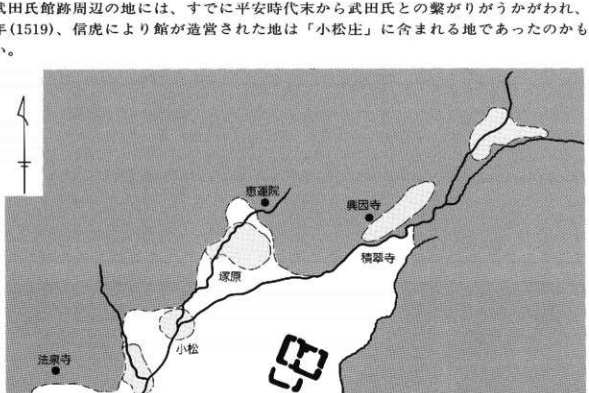


図５　中世集落・寺院分布概念図 (明治42年の地形図をもとに概念図化した。)

第２節　調査地の概要

今回の２次にわたる調査地は南北約150ｍ、東西約130ｍの広範囲に及び、梅翁曲輪・家臣団屋敷地などの外郭部に相当する。

梅翁曲輪は主郭部・西曲輪の南に位置し、東西２町、南北１町の規模を有する。各種古絵図には「楳王」「梅王」とも表記されている。「甲州古城勝頼以前図」(恵林寺蔵)には「平岩七之介築候添曲輪」の注記があり、天正10年(1582)６月以降、甲斐国を領有した徳川家康によって増設されたことが判明する。江戸時代、柳沢氏の甲斐領有期(1704～24)には、下級家臣団の組屋敷がこの曲輪内にも置かれていた。『甲斐国志』はこの曲輪の場所を武田

氏時代の「歳前の庁所」といい、すでに武田氏館跡全体が畑地であると記述する。

現在、東・西・南側を土塁と堀で囲繞し、南側では堀幅約15ｍ、土塁幅約15～21ｍを測る。出入り口部は南・西南隅の二か所に存在した。南側の中央部には土橋が残り、今でも幅１ｍ程の通路として使用されている。この部分の土塁幅は約21ｍを測り、他と比べ幅広くなっている。西南隅は架橋であったのだろうか、対応する曲輪側に土塁はなく、一段低くなって虎口空間を作り出している。

また、主郭部と西曲輪の塁線が直線とならず、ずれを持っていることから、結果として、梅翁曲輪と西曲輪の間には広い空間が形成され、この空間に馬出土塁が構築された。各種古絵図により、細部の形状・規模は異なるが、いずれも角馬出として描かれている。宅地化に伴い、梅翁曲輪内部は住宅地となり、土橋から東側の堀部分は完全に埋められ、現在では南・西側に残る堀と土塁から旧状を窺い知るだけとなっている。

明治42年、陸地測量部作成の地形図(図６)では、武田氏館跡周辺には村々が点在する散村的な景観が広がっている。館を起点として、扇央部は空白地として描かれており、一方、扇状地外縁は耕作地として開発されている様子が読み取れる。集落の分布も相川・藤川流域の山麓部に集中し、扇央部には峰本・塔岩の集落が僅かに確認されるのみである。その他、この地形図には館を中心に南北５条の街路が明瞭に描かれており、西曲輪南虎口前の馬出土塁、梅翁曲輪東側の土塁と堀などもまだ読み取ることができる。

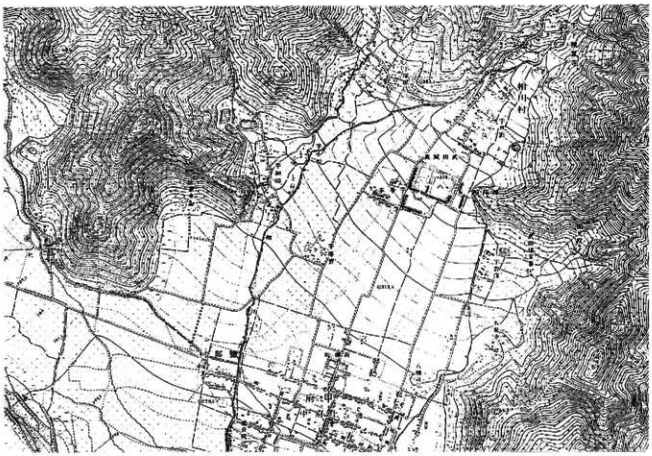


図６　武田氏館跡周辺地形図（明治42年 S＝1：25,000）

大正10年作成の甲府全図(図７)では、武田氏館の城下には県立師範学校・高等工業学校が建ち、更には南北街路を大きく無視して甲府四十九連隊兵舎が見られ、市街地が徐々に館周辺にまで広がっていく様相を示している。また、図６では空白地として描かれていた

扇央部は耕地化している状況が読み取れる。おそらく武田氏館跡の北西の地において大正6年、溜め池(竜ケ池)が築造されたことが契機となったのであろう。

昭和54年作成の地形図(図8)では、直線化された道路が館跡にまで達している。西曲輪南虎口前の馬出土塁・梅翁曲輪東側の土塁と堀などは、もはや確認できない。それとともに史跡の南側では、扇状地いっぱいに宅地が広がり、著しく都市化が進行している。

第3節　過去の発掘調査成果

武田氏館跡周辺では、平成11年3月末までに60次にわたる調査を実施した。多くは個人住宅建設に伴う現状変更に際して、実施されてきたものである。第25次調査まで、その成果の一端はすでに『史跡武田氏館跡Ⅰ』(1985)・『甲府市史史料編第1巻』(1989)等にまとめられている(図4)。

ここでは第25次調査までの成果をもとに、

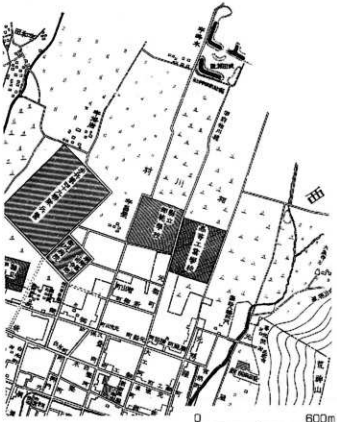


図7　武田氏館跡周辺地形図（大正10年）

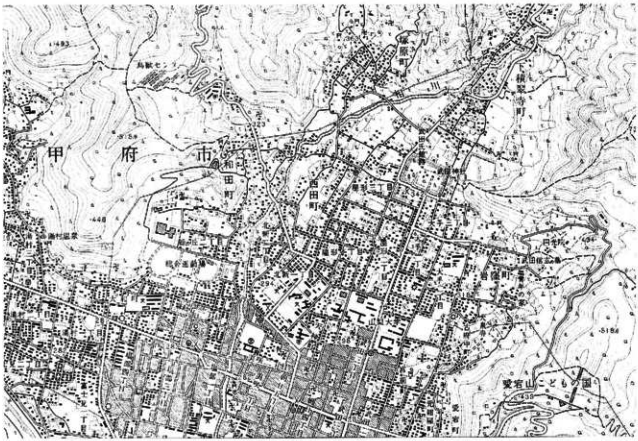


図8　武田氏館跡周辺地形図（昭和54年　S＝1：25,000）

主として梅翁曲輪内の調査成果について確認しておく。過去、７回の調査が実施され、重複関係を有する遺構、あるいは数時期の変遷が確認された遺構もある。

第７次調査

調査地点は梅翁曲輪南側土塁上に相当する。土塁構築以前の生活面及び土塁の拡張が認められた。土塁は約1.5ｍの高さで、８層に及ぶ粘土層が盛られている。土塁基底部からは埋葬人骨が検出され、土塁構築以前すなわち梅翁曲輪造成以前の武田氏時代の遺構とされる。更に、検出された土塁には２時期の変遷が確認された。当初の土塁は内部に礫を充填するが上のみで構築されており、その後、約１ｍ北側に拡張して土塁表面に６～７段の野面積の石積を施している。天正10年(1582)の武田氏滅亡以後に構築された梅翁曲輪においてさえも修築の手が加わっていることが確認された。この調査によって梅翁曲輪が構築された地点では３時期の変遷が把握された。第１期～梅翁曲輪造成以前の武田氏時代、第２期～梅翁曲輪構築時、第３期～梅翁曲輪修築時となろうか。

第11次調査

調査地点は梅翁曲輪のほぼ中央部に相当する。長さ約12ｍにおよぶ石組水路とともに上幅2.8ｍ、底面幅1.1ｍ、深さ1.4ｍの規模を測る溝跡が検出された。重複関係にあり、溝を埋め戻した後、石組水路が構築されている。出土遺物から各遺構の時期を確定するには至らないが、２時期の変遷が認められている。

第13次調査

調査地点は梅翁曲輪西側土塁上に相当する。土塁構築状況及び土塁構築以前の生活面が認められた。確認された土塁の高さは約2.5ｍで、14層に及ぶ盛土がされている。土塁基底下からは２個の礎石が検出され、梅翁曲輪造成以前の武田氏時代の遺構が確認された。

以上、特に数時期の変遷が確認された調査を取り上げた。いずれも水路・土塁・溝等の遺構を検出し、それらに伴い遺物も出土している。他に礎石を何地点かで確認しているため門・建物跡などを想定できるが、残念ながら曲輪内の空間的な建物配置まで知れる資料は得られていない。部分的な発掘調査ではあるが、梅翁曲輪造成以前、武田氏時代に位置づけられる遺構が存在すること、梅翁曲輪構築後においても修築がされていることが確認されている。

第３章　検出遺構・遺物

第１節　第54次調査（県道南北通り）

第54次調査地からは溝跡・井戸跡・集石墓坑・土坑・ピットなど多くの遺構が確認された。以下、溝跡から順次報告する。なお、検出した遺構名称は調査時にＳＤ－１～13、ＳＥ－１、ＳＫ１～５としていたものを、報告に際しては１～13号溝、井戸跡、１～５号土坑と変更し、遺構番号については調査時の番号をそのまま踏襲している。

(1) 溝　跡

調査では1～13号溝（７号溝は欠番）まで溝跡12条を検出した。以下、番号順に報告する。

１号溝（図９）

西側調査区から検出された。東西方向に延び、Ｎ－49°－Ｗの軸となる。ガス管埋設にともなう撹乱が見られる。幅0.84～1.02ｍ、深さ0.38ｍを測り、長さ2.68ｍを確認した。覆土は３層に分けられ、溝底には黄褐色砂層の堆積が見られた。２号溝と重複するが、時間的な前後関係は把握できない。出土遺物はかわらけ片が４点出土するが図化には至らなかった。

２号溝（図９）

西側調査区から検出された。南北方向に延び、Ｎ－29°－Ｅの軸となる。西側にはガス管埋設に伴う撹乱が見られるが、幅0.32～0.42ｍを測り、長さ7.62ｍを確認した。東側には一部分であったが側石らしき小礫が1.40ｍ程確認できた。１・４号溝と重複し、ピット１～６が近接する。１・４号溝との時間的な前後関係は定かに成し得なかった。出土遺物はない。

３号溝（図９）

西側調査区から検出された。東西方向に延び、Ｎ－56°－Ｗの軸となる。ガス管埋設に伴う撹乱が見られる。幅0.28ｍを測り、長さ1.94ｍを確認した。ピット７が近接する。出土遺物は確認できなかった。

４号溝（図９）

西側調査区から検出された。南北方向に延び、Ｎ－41°－Ｅの軸となる。幅0.12～0.30ｍを測り、長さ2.00ｍを確認した。２号溝と重複するが、時間的な前後関係は不明である。出土遺物はかわらけ片が１点出土するが図化には至らなかった。

５号溝（図９）

西側調査区から検出された。南北方向に延び、Ｎ－33°－Ｅの軸となる。西側にはガス管埋設に伴う撹乱が見られる。幅0.40～0.80ｍを測り、長さ11.74ｍを確認した。溝の両壁には20～30cm程度の礫を使用して側石を配置してあったようだが、すでに片側のみ、あるいは両側とも確認できない部分がある。出土遺物は同一個体となる陶器片が９点、かわらけ片が２点出土するがいずれも実測までには至らなかった。

６号溝（図10）

西側調査区の最も北側から検出され、３・４号土坑間にあたかも両者を連結するかのように確認された。東西方向に延び、Ｎ－56°－Ｗの軸となる。幅0.34ｍを測り、長さ1.62ｍを確認した。出土遺物は確認できなかった。

８号溝（図11）

東側調査区から検出された。南北方向に延び、Ｎ－63°－Ｅの軸となる。東側にはガス管埋設に伴う撹乱が見られる。幅0.50ｍ、深さ0.10ｍ程を測り、長さ3.94ｍを確認した。出土遺物は確認できなかった。

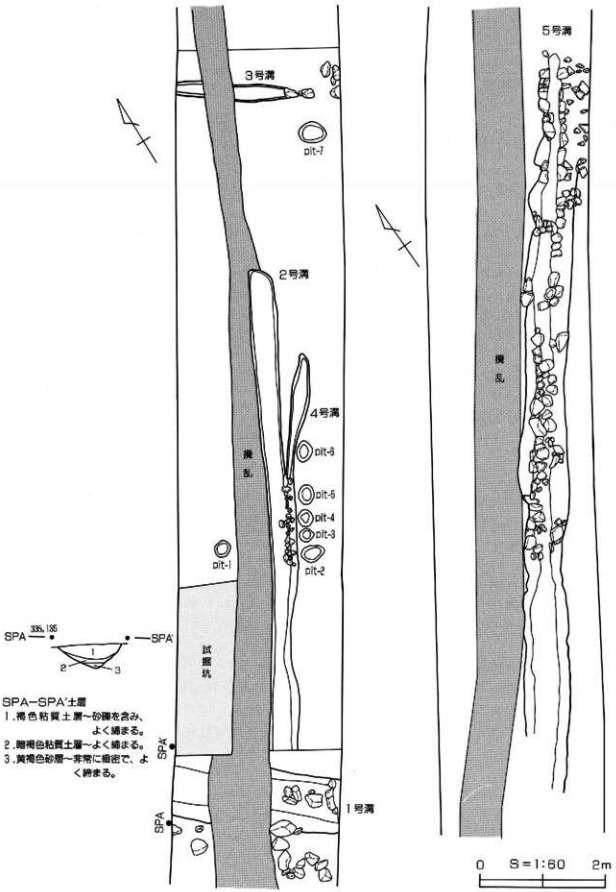

3号溝
pit-7
2号溝
4号溝
pit-6
pit-5
pit-4
pit-3
pit-2
pit-1
攪乱
試掘坑
1号溝
SPA
SPA'
335.135
1
2
3
SPA-SPA'土層
1.褐色粘質土層～砂礫を含み、よく締まる。
2.暗褐色粘質土層～よく締まる。
3.黄褐色砂層～非常に緻密で、よく締まる。
5号溝
攪乱
0
S=1:60
2m

図9　1号～5号溝平面図

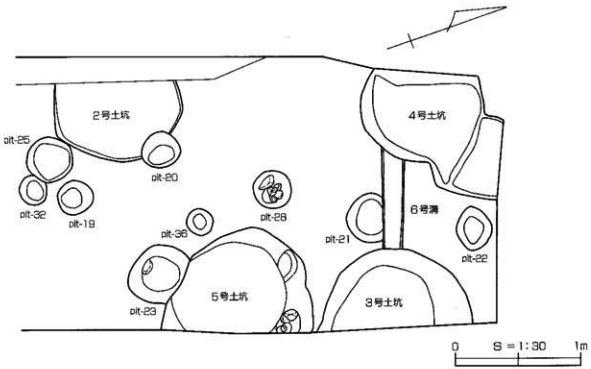


図10　6号溝平面図

9号溝（図11）

東側調査区から検出された。南北方向に延び、N－48°－Eの軸となる。東側にはガス管埋設に伴う撹乱が見られる。土層堆積より、素掘りの溝から側面に石を並べた石組の溝へ2時期の変遷が確認されている。第1期の素掘りの溝は深さ0.69m、幅は溝底で0.80m、上端では確認できた範囲で1.80m程を測り、断面箱堀状を呈する。第2期の石組溝では、幅を1.20m程減じ、深さ0.41mを測る。長さは確認できた範囲で5.68m程を確認した。出土遺物には小片となったかわらけと鍋形となる土器（図18－19、以下18-19とする）、及び瀬戸美濃灰釉皿の底部片（19-1）がある。灰釉皿は底部内面にやや中心からずれて印花文が押され、断面逆三角形をした付高台は低く小さいものとなる。大窯1～2期段階に位置づけられよう。

10号溝（図12）

東側調査区から検出された。東西方向に延び、N－85°－Eの軸となる。幅0.32m、長さは確認できた範囲で1.10mを測る。11号溝と近接するが、重複関係にあるか定かではない。出土遺物は確認できなかった。

11号溝（図12）

東側調査区から検出された。南北方向に延び、N－37°－Eの軸となる。幅0.22～0.38m、長さは確認できた範囲で3.22mを測る。10・12号溝と近接して検出された。出土遺物は確認できなかった。

12号溝（図12）

東側調査区から検出された。東西方向に延び、N－56°－Wの軸となる。東側にはガス管埋設にともなう撹乱が見られる。幅0.80～1.34m、長さは確認できた範囲で2.12mを測る。溝中には礫が多く見られた。出土遺物は確認できなかった。

13号溝（図12）

東側調査区から検出された。東西方向に延び、N－36°－Wの軸となる。東側にはガス管

埋設にともなう撹乱が見られる。幅0.54～0.68m、長さは確認できた範囲で1.30mを測る。ピット80・81と近接する。出土遺物は確認できなかった。

(2) 井戸跡（図13）

東側調査区に位置し、1基のみ検出した。完掘まで至らなかったが、径1.00m、深さ1.32mを測る石積の井戸となる。掘り方は、南北方向で2.24m、東西方向1.45mであり、深さ0.50m程掘り込んだ段階で、幅を狭めて更に掘り下げてある。内部からは井戸の廃絶に際し、投げ込まれたらしく大小多くの礫が検出され、それとともに遺物も散見した。出土遺物には瀬戸美濃磁器、口縁部に沈線が3条巡る瀬戸美濃灰釉皿とともに木片が数点出土している。遺構の年代的位置付けは近代以降に位置付けられるであろうか。

(3) 集石墓坑（図13）

東側調査区に位置し、1基のみ検出した。長軸1.09m、短軸0.57mを測り、特に掘り込みは認められない。周囲に礫を方形に配するが、中央部には見られないため、やや窪んだような断面形となる。出土遺物にはかわらけが3点(18-4～6)・銭貨6枚(20-3～8)とともに歯？(20-9)が認められた。出土したかわらけはいずれも内外面ロクロ成形され、底部には回転糸切り痕が残る。銭貨は1枚のみ判読できなかったが、すべて渡来銭であろう。

(4) 土坑（図14）

調査では土坑5基を検出した。すべて東側調査区からの検出であった。以下、番号順に報告する。

1号土坑

西側調査区、最も南側に位置する。西側はガス管埋設により撹乱を受けている。径0.88m、深さ1.92mを測り、平面略円形を呈する。確認面より深さ0.50～1.00mに礫が集中して検出された。出土遺物には須恵器片5点(18-22～26)・銭貨(寛永通宝)1枚(20-1)が出土した。出土須恵器には外面に叩き目が、内面には青海波文が認められ、すべて甕の胴部片となる。おそらく同一個体となるものであろう。近世期に位置付けられる遺構となろう。

2号土坑

西側調査区、最も北側に位置する。西側は一部調査区外に広がる。径1.01m、深さ0.10mを測る。平面略円形、断面皿状となる。ピット20と重複するが、時間的前後関係は定かではない。遺物はかわらけ片が2点出土するが、細片であったため図化には至らなかった。

3号土坑

西側調査区、最も北側に位置する。5号土坑と近接し、東側はガス管埋設により撹乱を受けている。径1.18m、深さ0.38mを測る。平面略円形、断面鍋底状となろう。出土遺物にはかわらけ片(18-1)がある。内外面ロクロ成形された、口径10cm程度を測る小形のかわらけとなる。

4号土坑

西側調査区、最も北側に位置する。3・5号土坑と近接する。掘り込みも浅く、出土遺物もなく遺構として認定できるか覚束ないものである。長軸1.01m、短軸0.76m、深さ0.08mを測る。平面不整円形、断面皿状となる。出土遺物は検出されなかった。

5号土坑

西側調査区、最も北側に位置する。3号土坑と近接し、ピット23と重複する。東側はガス管埋設により撹乱を受けている。径1.24m、深さ0.42mを測る。平面略円形、断面鍋底状となろう。遺物はかわらけ片が4点出土し、2点を図化した。18-2は口径8cm程度の小

形なもの、18-3は胎土が黒色を呈し、体部内面には漆(?)が付着する。いずれも内外面ロクロ成形され、底部糸切りされる。

(5) ピット (図15～17)

調査区内においてピットは81基検出された。西側調査区及び東側調査区の北側に比較的分布する様相を見せている。当然ながら掘立柱建物や棚列の一部を成すと考えられるものもあるが、すべてピットとして報告する。また掘り込みが極めて浅いものや遺物が伴わないものも同様にピットとして扱った。なお、紙数の都合ですべてを取り上げ報告することは不可能であったため、表1によりその規模等を示した。ここでは主に遺物が出土したものを取り上げる。

ピット10 (図15)

西側調査区から検出し、最も南側に位置する。ピット14と重複する。長軸0.43m、短軸0.31m、深さ確認面より0.10mを測る。平面楕円形、断面皿状となる。土器片が1点確認されたが、小片だったため図化には至らなかった。

ピット11 (図15)

西側調査区から検出し、南側に位置する。西側はガス管埋設により攪乱を受けている。径0.30m、深さ0.25mを測り、平面略円形、断面U字状となる。土器片が3点確認されたが、小片だったため図化には至らなかった。

ピット31 (図15)

西側調査区から検出し、5号溝東脇に位置する。一部調査区外に広がる。径0.37m、深さ0.30mを測り、平面略円形、断面U字状となるであろうか。4点の土器片とともに、炭化した木片が確認されている。小片だったため、図化には至らなかった。

ピット32 (図15)

西側調査区から検出し、最も北側に位置する。ピット19・25と近接している。径0.24m深さ0.36mを測り、平面略円形、断面U字状となる。出土遺物は須恵器平瓶(18-27)の頸部片が1点確認されたのみであった。

ピット33 (図15)

西側調査区から検出し、最も北側に位置する。ピット24と重複している。径0.24m、深さ0.65mを測り、平面略円形、断面U字状となる。出土遺物は、近代の瀬戸美濃(?)磁器(19-6)が1点確認されたのみであった。畳付き無釉で、底裏に「寅」の銘がある。梅花文を描く碗蓋である。

ピット42 (図16)

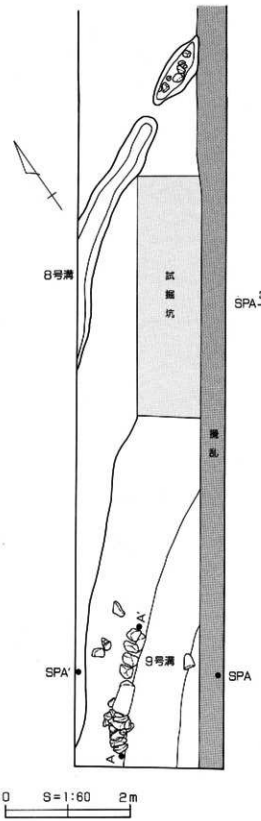
東側調査区から検出し、最も北側に位置する。径0.52m、深さ0.33mを測り、平面円形、断面鍋底状となる。遺物は天日茶碗の体部下半片とかわらけ片がそれぞれ1点出土している。

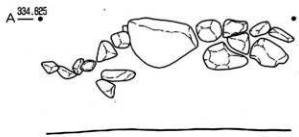
ピット48 (図16)

東側調査区北側に位置する。ピット47・49・50と近接し、一直線に並ぶ。長軸0.38m、短軸0.34m、深さ0.32mを測り、平面略円形、断面U字状となる。出土遺物には細片となったかわらけ片が確認され、2点(18-7・8)を図化した。いずれも内外面ロクロ成形され、底部には回転糸切り痕が残る。

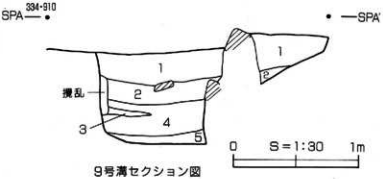
(6) 遺物

遺構に伴わない遺物を取り上げる。図18－９～18はいずれも内外面ロクロ成形され、底部には回転糸切り痕が残るかわらけである。９～11、18はいずれも口径10cm以下となる小形のもので、18は胎土が粗く砂粒の混入が目立つ。10は灯明皿として使用され、底部回転糸切り後ヘラ削りされる。12は体部と底部の境に至り厚みを増し、胎土が粗く砂粒の混入が目立つものである。20は鉢となるか。外面は指頭により整形される。21は火鉢の脚部となる。ヘラナデ後、指ナデにより整形される。図19－2は瀬戸美濃産の鉄釉が施された稜皿となるか。口縁部は外反し、大窯２期段階に位置づけられよう。３・４は青磁碗で、３は口縁部が外反し、15世紀前半に位置づけられる。４は片切彫の鎬蓮文を持つものである。13世紀代に位置づけられよう。５は志戸呂産の大皿であろうか、赤褐色の胎土をなし、鉄釉が施される。17世紀終末から18世紀初頭に位置づけられる。７は広東碗の底部片である。畳付き無釉で、見込みにはコンニャク判五弁花文が押印される。18世紀代に位置づけられる。





9号溝石積側面図



9号溝セクション図

SPA－SPA'土層

1．暗褐色粘土層～炭化物・焼土を多く含む。
　締まりあり。
2．暗褐色粘土層～拳大の礫・遺物を含む。
3．褐色粘土層
4．暗褐色粘土層～炭化物・焼土を少量含む。
　締まりあり。
5．暗褐色粘土層～砂礫を含む。

図11　8号・9号溝平面図

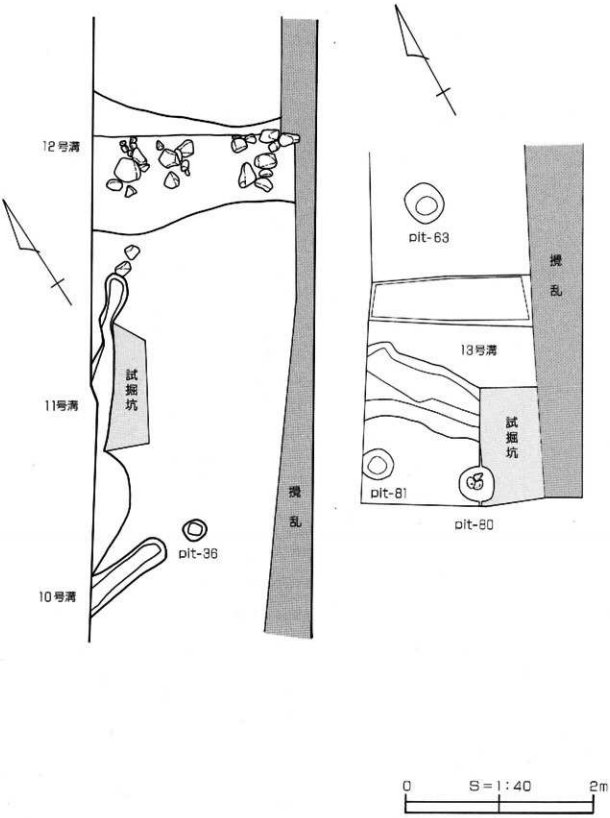


図12　10号～13号溝平面図

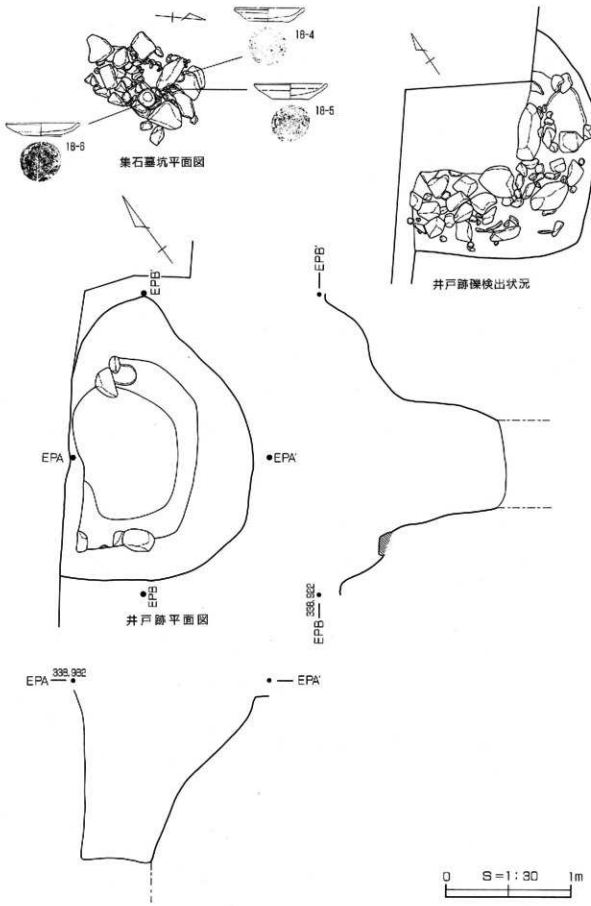


図13 集石墓坑・井戸跡平面図

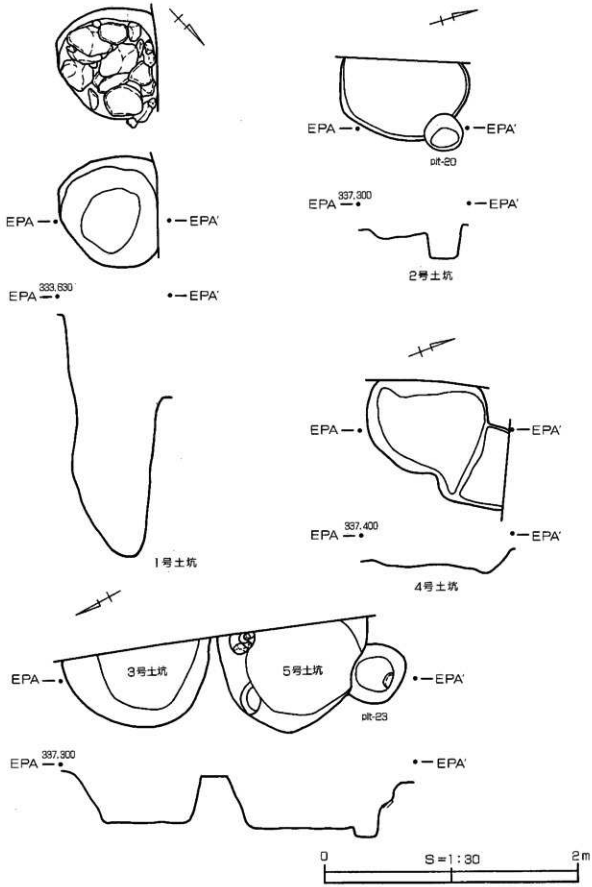


図14　1号～5号土坑平・断面図

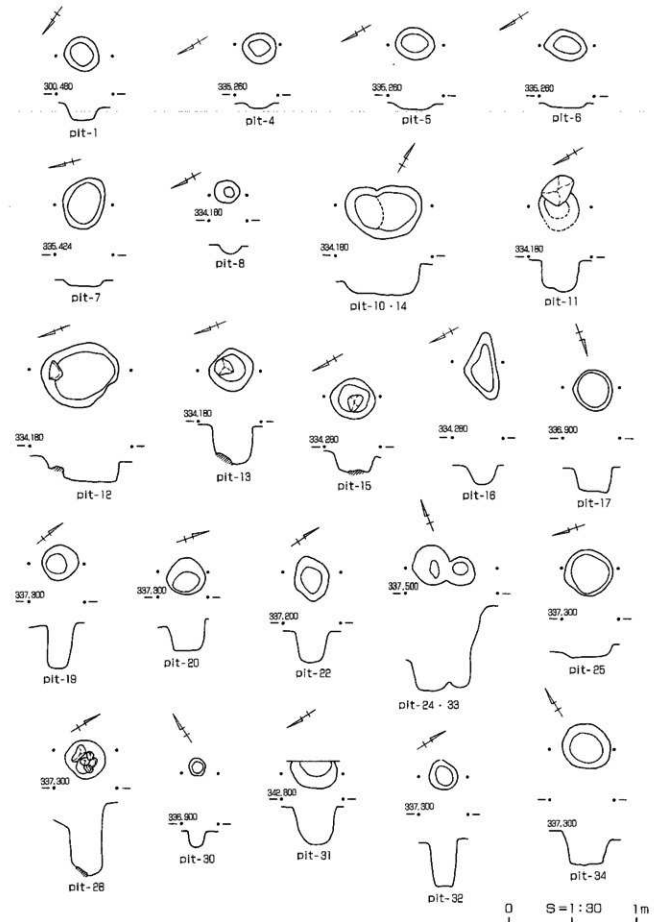


図15 ピット平・断面図(1)

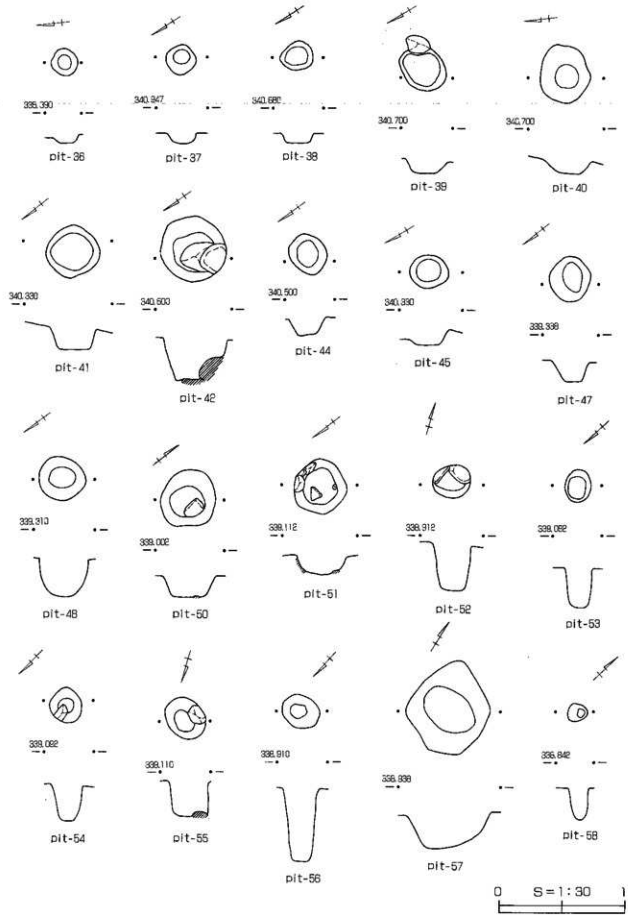


図16 ピット平・断面図(2)

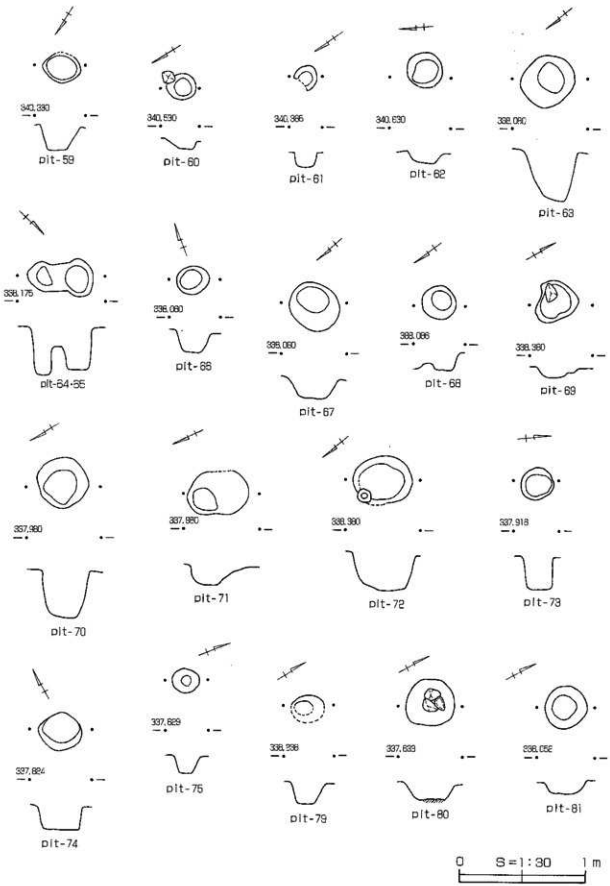


図17 ピット平・断面図 (3)

表1　ピット一覧

単位：cm　（　）は現存値

図版番号	ピット番号	平面形態	断面形態	長軸	短軸	深さ	備　考
図15	1	円形	鍋底状	27	26	13	
〃	4	円形	皿状	26	23	5	
〃	5	楕円形	皿状	31	24	5	
〃	6	楕円形	皿状	33	24	5	
〃	7	楕円形	皿状	40	32	4	
〃	8	円形	U字状	19	18	7	
〃	10	楕円形	皿状	43	31	10	ピット14と重複 土器片少量出土
〃	11	略円形	U字状	30	—	25	土器片少量出土
〃	12	楕円形	鍋底状	60	50	20	
〃	13	楕円形	U字状	35	34	30	
〃	14	楕円形	U字状	43	31	10	ピット10と重複
〃	15	楕円形	鍋底状	34	32	16	
〃	16	不整楕円形	U字状	51	22	14	
〃	17	略円形	鍋底状	32	29	18	焼土塊少量出土
〃	19	略円形	U字状	29	25	36	
〃	20	略円形	鍋底状	31	27	25	
〃	22	不整楕円形	U字状	33	27	25	
〃	24	円形	U字状	31	29	25	ピット33と重複 炭化木片少量出土
〃	25	円形	皿状	37	36	10	
〃	28	円形	U字状	32	30	58	
〃	30	円形	U字状	13	13	13	
〃	31	略円形	U字状	37	(21)	30	土器片・炭化木片少量出土
〃	32	略円形	U字状	24	23	36	須恵器片少量出土
〃	33	略円形	U字状	24	22	65	ピット24と重複 磁器片少量出土
〃	34	円形	鍋底状	37	35	26	
図16	36	円形	皿状	21	21	7	
〃	37	略円形	皿状	24	23	8	
〃	38	略円形	皿状	26	23	9	
〃	39	楕円形	鍋底状	39	31	9	
〃	40	不整円形	鍋底状	44	40	18	
〃	41	略円形	鍋底状	43	40	22	
〃	42	円形	鍋底状	52	52	33	かわらけ片・磁器片・黒曜石少量出土

単位：cm　（　）は現存値

図版番号	ピット番号	平面形態	断面形態	長軸	短軸	深さ	備　考
図16	44	略円形	鍋底状	33	29	14	
〃	45	略円形	鍋底状	31	26	12	
〃	47	略円形	鍋底状	36	33	17	焼土塊少量出土
〃	48	略円形	U字状	38	34	32	かわらけ片・焼土塊少量出土
〃	50	円形	鍋底状	43	41	16	
〃	51	円形	U字状	45	41	16	
〃	52	円形	U字状	28	25	37	
〃	53	楕円形	U字状	36	21	32	
〃	54	円形	U字状	27	25	28	
〃	55	楕円形	鍋底状	45	29	28	
〃	56	楕円形	U字状	30	25	58	
〃	57	不整形	鍋底状	75	65	28	
〃	58	略円形	U字状	15	14	25	
図17	59	楕円形	鍋底状	30	(24)	20	
〃	60	円形	皿状	22	22	10	
〃	61	円形	鍋底状	18	(14)	12	
〃	62	円形	皿状	28	27	10	
〃	63	不整円形	U字状	43	42	42	
〃	64	不整形	U字状	25	21	39	ピット65と重複
〃	65	楕円形	鍋底状	30	26	33	ピット64と重複
〃	66	略円形	鍋底状	26	23	18	
〃	67	略円形	鍋底状	40	36	18	
〃	68	略円形	鍋底状	27	25	14	
〃	69	不整形	皿状	34	29	0.9	
〃	70	不整円形	U字状	42	39	38	
〃	71	長楕円形	鍋底状	48	33	16	
〃	72	楕円形	U字状	47	35	35	
〃	73	円形	鍋底状	26	25	26	
〃	74	不整円形	鍋底状	34	29	20	
〃	75	円形	鍋底状	21	19	14	
〃	79	楕円形	鍋底状	26	—	18	
〃	80	略円形	鍋底状	40	37	14	
〃	81	円形	皿状	34	33	10	

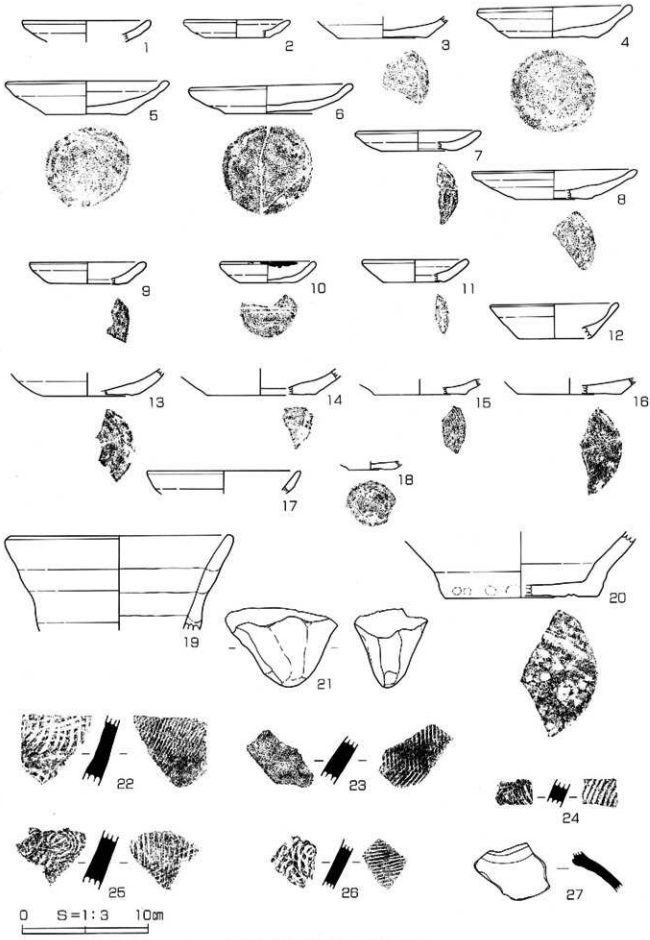


図18 第54次調査出土遺物(1)

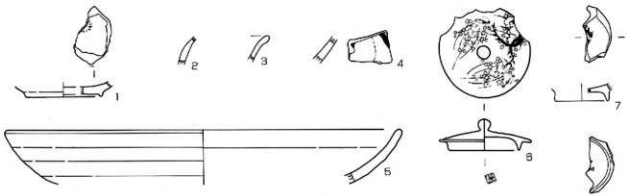


図19 第54次調査出土遺物(2)

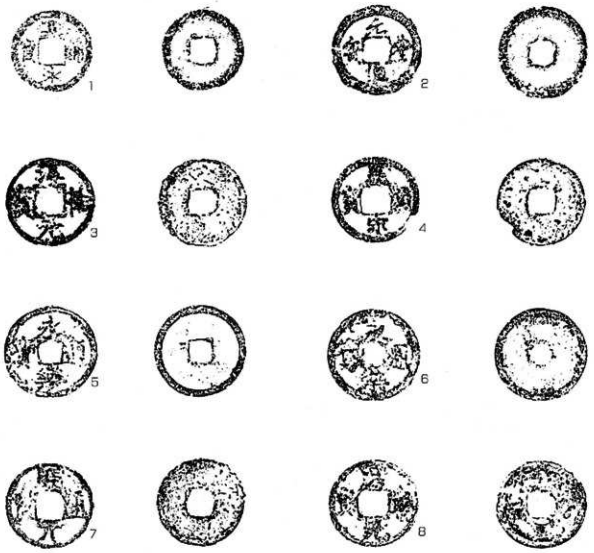


図20 第54次調査出土遺物(3)

表2　〈第54次調査出土遺物一覧〉　法量の（ ）は推定値

図	番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm) 口径・器高・底径	部位	調整	胎土	焼成	色調 内面・外面	備考
18	1	3号土坑	土器	かわらけ	(10.0)・——・——	口縁部	内外面ロクロ成形	やや密 石英・長石 金色雲母	良	明赤褐	
〃	2	5号土坑	土器	かわらけ	(8.0)・(1.8)・(5.0)	口縁～底部片	内外面ロクロ成形	やや密 石英・長石 金色雲母	良	明赤褐	
〃	3	5号土坑	土器	かわらけ	——・——・(7.0)	体部～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り	やや密 金色雲母	良	黒	
〃	4	集石墓	土器	かわらけ	11.6・2.4・6.9	完形	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り	やや密 石英・長石 金色雲母	良	橙（一部灰白混）	
〃	5	集石墓	土器	かわらけ	12.4・2.6・6.4	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り	やや密 石英・長石 金色雲母	良	橙（一部灰混）	
〃	6	集石墓	土器	かわらけ	12.3・2.2・6.8	完形	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り	やや密 石英・長石 金色雲母	良	明褐	
〃	7	ピット48	土器	かわらけ	(9.3)・(1.6)・(6.2)	口縁～底部片	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り後ヘラナデ	やや粗い 石英・長石 金色雲母	良	橙	
〃	8	ピット48	土器	かわらけ	(13.0)・(2.2)・(6.0)	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り	やや粗い 石英・長石	良	橙	
〃	9	3-A区	土器	かわらけ	(9.0)・(1.7)・(6.0)	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り後ヘラケズリ	やや密 石英・長石 金色雲母	良	橙	
〃	10	7-Z区	土器	かわらけ	7.2・1.7・4.4	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り後ヘラケズリ	やや密 石英・長石 金色雲母	良	鈍い橙	炭化物付着
〃	11	7-AA区	土器	かわらけ	(8.0)・(1.8)・(5.0)	口縁～底部片	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り	やや密 金色雲母	良	橙	
〃	12	新V区	土器	かわらけ	(10.0)・(2.6)・(5.8)	口縁～底部片	内外面ロクロ成形	やや密 石英・長石 金色雲母	良	鈍い橙	
〃	13	1-Z区	土器	かわらけ	——・——・(7.0)	体部～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り	やや密 石英・長石 金色雲母	良	橙	
〃	14	3-A区	土器	かわらけ	——・——・(8.4)	体部～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り？	やや密 石英・長石 金色雲母	良	橙	
〃	15	3-C区	土器	かわらけ	——・——・(7.2)	体部～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り	やや密 石英・長石 金色雲母	良	橙	
〃	16	新V区	土器	かわらけ	——・——・8.0	体部～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り	やや密 長石・金色雲母	良	橙	
〃	17	Z区	土器	かわらけ	(12.0)・——・——	口縁～体部	内外面ロクロ成形	やや密 石英・長石 金色雲母	良	内面 鈍い褐 外面 明赤褐	
〃	18	3-C区	土器	かわらけ	——・——・(4.5)	底部	内外面ロクロ成形	やや粗い 石英・長石 金色雲母	良	明赤褐	
〃	19	9号溝	土器	鍋	(17.0)・——・——	口縁～体部	内外面ナデ整形 輪積み痕あり	やや密 石英・長石 金色雲母	良	橙	
〃	20	7-AA区	土器	鉢？	——・——・(12.0)	体部～底部	内外面ナデ整形	やや密 石英・長石 金色雲母	良	鈍い黄褐	
〃	21	6-V区	土器	火鉢	——・——・——	脚部	ナデ整形	やや密 石英・長石 雲母・金色雲母	良	橙	
〃	22	1号土坑	須恵器	甕	——・——・——	胴部	外面 叩き目 内面 青海波文	密	良	暗灰黄	

法量の（ ）は推定値

図	番号	出土位置	種別	器種	法量（cm）口径・器高・底径	部位	調整	胎土	焼成	色調 内面・外面	備考
18	23	1号土坑	須恵器	甕	—・—・—	胴部	外面 叩き目	密	良	黒褐	
〃	24	1号土坑	須恵器	甕	—・—・—	胴部	外面 叩き目 内面 青海波文	密	良	灰黄褐	
〃	25	1号土坑	須恵器	甕	—・—・—	胴部	外面 叩き目 内面 青海波文	密	良	暗灰黄	
〃	26	1号土坑	須恵器	甕	—・—・—	胴部	外面 叩き目 内面 青海波文	密	良	灰	
〃	27	ピット32	須恵器	平瓶？	—・—・—	頸部	内外面 ロクロ整形	密 砂粒子	良	鈍い黄橙	指頭痕？
19	1	9号溝	国産陶器 瀬戸美濃	皿	—・—・(5.8)	底部	灰釉 内面印花文	密	良	釉 オリーブ黄	大窯1～2
〃	2	2-12	国産陶器 瀬戸美濃	稜皿	—・—・—	体部	鉄釉	密	良	釉 暗赤褐	大窯2
〃	3	7-Z区	中国磁器 青磁	碗	—・—・—	口縁部		密	良	釉 灰オリーブ	15C
〃	4	2-15	中国磁器 青磁	碗	—・—・—	体部	片切彫の鎬蓮弁文	密	良	釉 明オリーブ灰	13C
〃	5	VI区	国産陶器 志戸呂？	大皿	(30.1)・—・—	口縁～体部	鉄釉	密	良	釉 暗赤褐	近世 17C終～18C初
〃	6	ピット33	国産磁器 瀬戸美濃？	蓋	5.5・3.5・—	蓋	染付・底裏銘あり	密	良	釉 灰白	近代
〃	7	2-10	国産磁器	碗	—・—・(4.0)	底部	染付 見込コンニャク判五弁花文	密	良	釉 明緑灰	広東碗
20	1	1号土坑	銭貨		幅・穿径・厚さ 2.20・0.62・0.13						「寛永通宝」 重量 1.5g
〃	2	試掘調査	銭貨		幅・穿径・厚さ 2.40・0.62・0.12						「元豊通宝」 重量 2.5g
〃	3	集石墓	銭貨		幅・穿径・厚さ 2.40・0.70・0.15						「淨祐元宝」 重量 2.8g
〃	4	集石墓	銭貨		幅・穿径・厚さ 2.38・0.72・0.11						「皇宋通宝」 重量 1.9g
〃	5	集石墓	銭貨		幅・穿径・厚さ 2.48・0.69・0.17						「永楽通宝」 重量 3.3g
〃	6	集石墓	銭貨		幅・穿径・厚さ 2.50・0.51・0.21						「永楽通宝」 重量 3.9g
〃	7	集石墓	銭貨		幅・穿径・厚さ 2.35・0.69・0.12						「閉元通宝」 重量 1.9g
〃	8	集石墓	銭貨		幅・穿径・厚さ 2.40・0.72・0.15						「○○元宝」 重量 3.3g
〃	9	集石墓	歯								

第２節　第55次調査（県道東西通り）

(1) 水路

１号水路（図22）

調査区南側、１・２区とした地点から検出された。一部撹乱により確認できない部分、あるいは根石のみとなった部分があるが、長さ21ｍにわたり確認された。東西方向、Ｎ－60°－Ｗの軸となる。南北両側を石積とした水路で、幅45cm、深さ20cmを測る。北側石積は３段積みで高さ72cm、南側は２段積みで高さ47cmを測り北側石積が１段高く構築されていた。また水路南側の根石に比べ北側の根石には大きな礫が据えられている。

出土遺物は染付皿の口縁部片(42-8)を図化した。端反皿となり、内外口縁部には界線が見られ、体部外面は唐草文となろうか。他にかわらけ片が出土するが、細片のため図化には至らなかった。

２号水路（図22・23）

調査区南側、２区とした地点から検出された。南北方向、Ｎ－30°－Ｅの軸となる。水道管埋設により撹乱を受けるが、長さ約３ｍを確認した。東西両側を石積とした水路で、幅86cm、深さ74cmを測る。石積は東西両側とも２段積みで高さ60～80cm程となる。西側に比べ大きな礫が使用されているためか、東側石積の方が僅かに高くなる。検出した調査区北壁部分(図22)での水路底と調査区南側での水路底とでは比高差約1.10ｍあり、この水路は大きく段差を生じて流下したようである。おそらく１号水路北側石積が南側より高く構築されていることと密接な関係があろう。２号水路と直交して１号水路が存在する。重複する状況も確認できず、むしろ前述したように１・２号水路には密接な関係があり、接続していたと考えられる。２号水路西側からは１号土塁が確認されている。土層堆積からは２号水路西側石積の際から土塁の立ち上がりが確認されているため、２号水路は１号土塁の裾に位置する側溝として機能していたものであろう。

出土遺物にはかわらけ片(40-1～3)、擂鉢(41-12)、瀬戸美濃灰釉皿(42-19)がある。かわらけはいずれもロクロ成形され、底部に回転糸切り痕が残るものとなろう。擂鉢は灰黄褐色を呈する、いわゆる在地産の素焼きされたものである。灰釉皿は高台部のみとなった底部片である。全面施釉され、付高台となる。

３号水路（図23・24）

調査区南側、３区とした地点から検出された。南北方向、Ｎ－30°－Ｅの軸となる。東側には１号土塁が位置するため、２号水路と対となり土塁の裾に取り付く側溝となろう。長さ約2.80ｍを確認し、東西両側を石積とした水路である。幅78cm、深さ64cmを測り、東側石積は２段積みで高さ55cm、西側は小振りの礫を使用し、４段積み高さ90cmを測る。ここでも２号水路と同様に、土塁側の石積が１段低く構築されている。土層堆積からは、灰色粘質土と砂粒が互層となり、レンズ状の堆積をしつつ埋没した過程が理解できる。更に石積の根石部分に粘質土を貼付することによって、水流により石積基底部が抉り出されない処置を施していたことが知れる。北側には東西方向にわたり１号石列が検出され、石列基底部には灰色土と砂粒の互層が一部に確認されている(図24)。撹乱を受けているため、確認には至っていないが、おそらくこの石列際に沿って３号水路が延び、直角に向きを変え１号土塁の裾を流下する構造となろう。

出土遺物にはかわらけ(40-4～6)、青磁(42-9)、瀬戸美濃陶器(42-24)がある。

４号水路（図25）

調査区南側、４・５区とした地点から検出され、長さ14.45ｍにわたり確認した。東西方

向、N－63°－Wの軸となる。南北両側を石積とした水路で、幅40cm、深さ20cmを測る。北側からの堆積により埋没した状況が容易に理解でき、すでに石積を抜き取られた部分では、据えつけに際して掘り込まれた溝状の痕跡が確認できた。北側石積は２段積みで高さ50cm、南側は１段のみで高さ20～30cmを測り、北側石積が１段高く構築されていた。石積の上部、一・二石程度は掘り崩されているものと考えられる。また水路南側に比べ北側の方が大きな礫を使用している。西側は撹乱を受けているのか、土層堆積も大きく異なる状況であった。遺構は確認できず、水路の掘り方さえ検出できなかった。

出土遺物は内外面とも体部下半には施釉されず、17世紀後半から18世紀前半に位置付けられる瀬戸美濃灰釉鉢(43-6)がある。その他、多くの遺物が出土しているが、大部分が撹乱個所からの出土であり、遺構に伴うものはない。

５号水路（図31）

調査区北側、13区とした地点から検出された。３号石列の南側60cm程に位置する。東西方向へ長さ約３ｍにわたり検出された。西側へも断続的に石列が延びているが、面が揃っておらず、「列」として確認できなかったため対象からはずした。南側石列のみ折れを生じ、幅も一定しないが、両者を一対のものとして捉えた。東側は４号石列によって画されている。南側には小礫が広がり、この水路によって小礫を画している。小礫の広がりは西側にかけて傾斜して堆積しているため、小礫をいったん埋め戻した後、５号水路が構築されたことになる。両遺構には時間差が存在することになる。遺構に伴う出土遺物は確認できなかった。

６号水路（図32）

調査区北側、13区とした地点から位置し、５号石列と直交して検出された。長さ３.45ｍを確認し、東西方向、N－59°－Wの軸となる。南北両側に礫を配した水路で、幅76cm、深さ28cmを測る。一部確認できない部分があったが、北側には面を揃えて小礫を二石積んでおり、南側にはそれより大きな礫を使い、しかも直交する５号石列と大きさの揃う礫を一石配している。北側に道路状遺構が検出されたため、それに伴う道路側溝と解釈できる。出土遺物は確認できなかった。

７号水路（図38）

最も東側に位置する調査区で、17区とした地点から検出された。撹乱により僅かな確認のみとなったが、南北方向、N－29°－Eの軸となる。東西両側に円礫を配した水路で、長さ1.60ｍ、幅20cm、深さ18cmを測る。出土遺物は確認できなかった。

(2) 土塁・堀

１号土塁（図23）

調査区南側、１・２区とした地点から検出された。南北方向にわたり約３ｍを確認したにすぎない。幅5.20ｍを測り、土塁裾部分の東西両側には幅約78～86cm、深さ64～74cmを測る２・３号水路が位置する。すでに上部は削平されており、水路石積以下、基底部まで約１ｍが残存している。土層堆積からは、地山(黄褐色土)上に礫を敷き暗褐色土で覆った後、黒色土・灰黄色砂粒を層厚２～３cm程に叩き締め基底部としている。その後、礫混じりの黄褐色土を約40～60cm水路石積の高さまで盛り上げている。２・３号水路とも石積の際から土塁の立ち上がりが確認されているため、１号土塁とともに一連の工程により構築されたものである。

出土遺物はかわらけ片が確認された。細片であったため１点のみ(40-7)取り上げる。口縁部のみであるが、ロクロ成形された口径10cm程の小形なものである。

2号土塁（図26）

調査区南側、7・8区とした地点から検出された。南北方向、N－29°－Eの軸をもち、約3mを確認したにすぎない。当初、調査区ごとに土塁状の遺構を検出したため、異なる遺構として認識したが、全体図作成後、整理作業の段階で両者を同一遺構とした。ただ依然として不可解な点も存在する。幅は約5.60mと推定した。すでに上部は削平されており、基底部から高さ85cmを確認した。土塁裾部分の東西両側には石積が施され、約20～40cm程度の礫を横長に使い、積み上げている。撹乱により確認できなかったが、検出した西側石積ラインには大きくずれが生じている。あるいはこの部分に「折れ」が設けられていたのかもしれない。東西両側とも石積前面には大量の礫が堆積していた。特に西側では、土層堆積によって石積の基底部から約90cm、礫が堆積していることが判明した。

出土遺物はかわらけ片が多くを占める。その大部分はすでに細片となったものである。遺構に伴うものかやや不安であるが、2点を取り上げる。石積基底部より出土したもので、糸切り痕が残るロクロ成形されたかわらけ底部片(40-8)と、底部を除き施釉された瀬戸美濃産茶入(42-20)がある。

3号土塁（図27）

調査区南側、9区とした地点から検出された。南北方向、N－18°－Eの軸をもち、約3.30mを確認したにすぎない。すでに上部は削平されており、基底部から高さ70cmを確認した。幅2.45mを測り、土塁裾部分の東西両側には石積が施されている。東側に比べ西側石積には大きな礫が使われ、補強のためであろうか、その前面には間層を入れずに、もう一列石積を施している。土層堆積も土塁を境に東西両側では大きく異なっている。西側には小礫を多量に含む暗褐色土が西に傾斜した堆積をしており、一方東側では大量の礫が約75cm堆積していた。さらに、土塁構築以前の遺構も確認されている。ピットとなるのであろうか、焼土・炭化物が混じる暗褐色土の広がりを四か所確認した。土層堆積からはピットが掘り込まれた地山(黄褐色土)上に灰色土を約10cm覆った後、土塁を構築していることが理解できる。出土遺物は常滑甕胴部片(42-26)が1点出土するのみである。

4号土塁（図28）

調査区南側、11区とした地点に位置する。土層堆積による断面確認によって確認した。南北方向、N－22°－Eの軸をもつ。削平されることなく、大量の礫が混じる暗褐色土に覆われて埋没していた。同時に、東側からは1号堀を検出している。土塁敷2.80m、基底部からの高さ1.20m、堀底からは高さ約2.20mを測る。一部西側には、石積が確認されているため、土塁裾に2段程度石積が施されるであろう。土層堆積からは明確に基底部を造り出した痕跡や版築状の痕跡、さらに崩落防止のため土塁表面を覆う土層などは確認されなかった。ただ土塁構築土はいずれも緻密で、よく叩き締められていた。4号土塁西側にも堀状の落ち込みが確認できた。あまりにも深かったため調査を断念したが、堀となり得る可能性のみ指摘しておく。土層堆積では、この落ち込みはいったん埋め戻されたらしく、土塁西側に水平な層が形成されている。4号土塁に先行する土塁が存在(土層堆積図16層以下が相当する)したらしく、それにともなう落ち込みとなろう。検出した4号土塁は西側落ち込みを埋め戻す際、さらに盛り上げられたものらしく、新旧2時期の土塁が確認された。

出土遺物はロクロ成形され、底部糸切りされるかわらけと近世期以降に位置づけられる国産陶磁器が数点見られただけであった。細片であったため図化には至らなかった。

5号土塁（図33）

調査区北側、14区とした地点から検出された。南北方向、N－34°－Eの軸をもち、約2.50mを確認した。北側は撹乱を受けている。すでに上部は削平されており、基底部のみが確認されたにすぎない。幅3.50mを測り、東西両側には石積が施されている。東側は一石

のみ残り高さ40cm、西側は東側より小振りの礫を使い３段積み、高さ66cmを測る。３号土塁同様、西側石積の前面には間層を入れずに、さらにもう一列石積を施している。崩落防止など補強的な意味合いから同様な手法により石積が構築されているのであろう。土塁東側には２号集石が確認された。

出土遺物はかわらけ３点(40-9～11)を図化した。口縁部片のみとなったものもあるが、全てロクロ成形され、底部糸切りされるものとなろう。

６号土塁（図38）

最も東側に位置する、17区とした地点から検出された。撹乱により僅かな範囲から確認するに至った。調査区東壁及び北壁土層堆積には上下を灰色粘質土に挟まれるように南側に盛り上がった土層が確認された。極めて狭い範囲の確認であったため、やや不安を残すが、幅６ｍ程に復元でき、東西方向に延びる土塁として指摘しておく。現在この地点は武田神社参拝者の駐車場として利用されており、約１ｍ一段下がって用水路が東西方向に走り、その南に水田が広がる。土層堆積では土塁として推定した土層は７号水路付近まで広がっており、７号水路を土塁裾に位置する側溝などとして、両者を結びつけて理解できるかもしれない。出土遺物はかわらけ片が数点あるが、細片であったため図化には至らなかった。

１号堀（図28）

調査区南側、９・11区とした地点から検出した。東側には３号土塁が、西側には４号土塁が確認され、両者に挟まれる位置にある。４号土塁基底部からの深さ1.00ｍを測る。土層堆積からはある程度、自然埋没した段階で、３・４号土塁とともに東西両側から小礫を多量に含む暗褐色土によって、一気に埋め立てられた様相が理解できる。特に、西側４号土塁は削平されることなく、埋土により覆いつくされて埋没しているため両者は同時に機能していたと考えられる。西側部分では堀底まで確認したが、東側では堀底の確認に至っていないため、堀幅については不明とせざるを得ない。ただ、前述したように土層堆積からは３号土塁をも覆って、多量の土砂により埋め立てられているため、３号土塁の際まで、約５ｍを堀幅として想定することもできる。

出土遺物はかわらけ片が数点見られただけであった。図化には至らなかったが、いずれも底部を糸切りされ、ロクロ成形されるものである。

(3) 石列

厳密には、石積と石列の両者は区別されるべきものだが、今回は石積とすべきものも全て石列として報告する。

１号石列（図24）

調査区南側、３区とした地点から検出され、東側には１号土塁が、南側には３号水路が位置する。東西方向へ長さ5.80ｍにわたり検出された。Ｎ－61°－Ｗの軸となる。現況では部分的に２段、高さ70cmの石積となる。調査終了後の工事立ち会いに際して、この石列は西側に約２ｍ延長することが確認された。土層堆積からは石列基底部に灰色土と砂粒の互層が一部に確認されている。撹乱を受けているため、確認には至っていないが、この石列の際には水路が付設されていた可能性がある。３号水路と接続して逆Ｌ字状に巡り、流下する構造となろう。

出土遺物として青磁(42-10)及び瀬戸美濃灰釉丸皿(42-16)を取り上げるが、どちらも石列前面から出土しており、埋没過程で混入したものと考えられるため、厳密には遺構に伴わないものであろう。青磁は、方形を呈する底部片で、花瓶類と思われる。灰釉丸皿は、

内面に印花文と刻文が見られ、底部には輪ドチの痕跡がある。全面施釉され、付高台となるもので、大窯２期段階に位置づけられよう。

２号石列（図29）

調査区南側、10区とした地点から検出された。東西方向、Ｎ－70°－Ｗの軸となり、長さ2.60ｍにわたり検出された。南に面を持ち、高さ50cmを測る。大きさが顕著に異なる礫を用いており、部分的に２段の石積となる。調査区内には礫が散在して検出されたが、石を積み「列」として認識できたのはこの部分のみであった。遺構に伴う出土遺物はなかった。

３号石列（図31）

調査区北側、13区とした地点から検出された。調査区北壁に接し、一部のみの確認となった。東西方向へ長さ4.50ｍにわたり検出され、Ｎ－62°－Ｗの軸となる。大きさがほぼ揃った礫を用いているが、特に面を揃えた配列は確認できなかった。現況、この遺構の北側は堀まで僅か２ｍほどの空間しか存在せず、堀へ傾斜しつつ植栽空間として利用されている。堀を画する縁石と推定されるが、明確にはできなかった。遺構に伴う出土遺物は確認できなかった。

４号石列（図31）

調査区北側、13区とした地点から検出された。５号水路の東を画している。南北方向、Ｎ－33°－Ｅの軸となり、長さ約2.70ｍにわたり検出された。基底部まで掘り下げていないが、高さ30cm、２段の石積を確認した。東に面を揃え、折れをなしている。横長に礫を用い、裏込め石等は確認できなかった。上層堆積からは西側に広がる小礫を掘り込み、更には、石列の際から小礫を覆う暗褐色粘質土が堆積する。時間差が存在するのは明らかで、小礫を掘り込んで４号石列を構築し、整地したことになる。遺構に伴う出土遺物は確認できなかった。

５号石列（図32）

調査区北側、13区とした地点から検出された。南北方向、Ｎ－32°－Ｅの軸となり、長さ約3.80ｍ、６号水路と直交して検出された。東に面を揃え、直交する６号水路と大きさの揃う礫を一石配している。調査では一段のみ、高さ26cmを測り、裏込め石等は確認できなかった。遺構に伴う出土遺物は確認できなかった。

６号石列（図34）

調査区北側、14区とした地点から検出された。南北方向、Ｎ－26°－Ｅの軸となり、長さ約1.40ｍにわたり確認した。北側はすでに撹乱を受けていた。東に面を揃え、２段積み高さ20cmを測る。石列直上に道路砕石が認められるため、すでに上部は削平されていよう。約80cm離れた東側にも、東に面を揃えた石列が確認されている。僅か二石の確認であったため、遺構として認定できるか定かではない。どちらも裏込め石等は確認できなかった。なお、これら石列の東側には小礫とともに、巨礫が集中する箇所があった。それぞれ遺構として位置付けられようが、石列との関係の有無を含め、具体的な様相は判然としなかった。遺構に伴う出土遺物は確認できなかった。

７・８号石列（図37）

調査区北側、15区とした地点に位置する。70cm程の距離をおいて西側に７号石列が、東側に８号石列が並列して検出された。どちらも南北方向、Ｎ－29°－Ｅの軸となる。一部確認できない部分はあるが、長さ約３ｍにわたり確認した。部分的に20～30cm程の礫があり、その周囲に小礫が集中する。東側８号石列の方にやや多く礫が集中する。上層堆積からは約60cmに及ぶ盛土層の上に構築され、しかも、石列直上には道路砕石が認められる。層位的には、最終期に属す遺構となろうが、両石列の関係、その具体的な様相は判然としなかった。遺構に伴う出土遺物は確認できなかった。

9号石列（図38）

最も東側に位置する調査区で、17区とした地点から検出された。僅かな確認のみとなったが、折れを生じ、N－44°－Eの軸となる。南北方向、長さ約2mにわたり検出した。北側に面を持ち、高さ56cm、2段積みとなる。円礫を用い、落とし積みにより構築されている。県道拡幅以前に機能していた用水路と考えられ、すでに水路底にはコンクリートが敷かれ、一部石積の目地にもコンクリートが詰め込まれていた。

(4) その他の遺構

①道路状遺構（図32）

調査区北側、13区とした地点から検出された。6号水路北側に並列し、土層堆積から、東西方向に長さ約4.50mを確認した。6号水路石積の際から北側にかけて明茶褐色砂質土が堆積しており、調査に際して極めて特異な土層であったこと、及び水路石積の際から確認できたことなどから道路状遺構として認定した。土層の広がりから道路幅を約2.30mと推定する。6号水路と対応し、道路北側を画する遺構、あるいは特に踏み固められた痕跡は確認できなかった。出土遺物は確認できなかった。

②集石遺構

今回、集石遺構としたものには、単に礫が集中しているもの、敷石と捉えられるもの、あるいは建物礎石と考えられるものなど様々に位置付けられる。個々に定義付けを行い、遺構名称を変える必要があるが、ここでは便宜上、一括して「集石」とした。

1号集石（図30）

調査区北側、12区とした地点から検出された。西曲輪虎口前に位置する調査区である。大小、様々な大きさの礫を用い、散在しているといった様相を示している。調査区東側には確認できず、礫の分布にある一定の広がりが窺える。一部掘り下げを行い土層堆積を確認した。層厚30cm程を測り、南から北方向にかけて傾斜して堆積する土層が確認できた。周辺地形は北から南にかけて傾斜しており、今回の調査でも自然地形に沿って、南側に層厚を増す土層堆積は各所で確認している。あるいは埋め立てによって生じた痕跡と捉えられるかも知れない。出土遺物にはかわらけ及び近世陶磁器がある。細片のため図化には至らなかった。

2号集石（図33）

調査区北側、14区とした地点から確認された。5号土塁東側から検出され、約5mの広がりを持つ。土塁東側石積の基底部から小礫が敷きつめられていた。土層堆積からはこれら敷石を均一な層厚で覆う混礫黄褐色土が確認でき、しかも、土塁石積の高さに一致して堆積している。混礫黄褐色土(10層)の広がりと小礫の広がりは一致せず、混礫黄褐色土は更に東側へ広範囲に堆積している。調査当時、礫が露出して機能するものと考えたが、土層の堆積状況からは、礫を敷き、その後、混礫黄褐色土で覆った一連の作業が行われ、集石を意図的に地中に埋没させたと解釈することもできる。何れにしても5号土塁石積に規制されているのは明らかであり、土塁と密接に関係する遺構となろう。

3号集石（図35）

調査区北側、15区とした地点からは東西約6mの範囲に集中して礫が確認された。道路砕石直下から大小様々な礫が確認され、一部掘り下げ調査を行ったが、依然として礫が集中する状況であった。埋土層として捉えることも可能であるが、集石として報告する。

4号集石（図21・36）

調査区北側、14区とした地点から確認された。5号集石と約5ｍの距離を持って検出した。東西65cm、南北40cm程の方形の範囲に、拳大から径40～50cm程の礫が集中する。集石直上は道路砕石となるため、掘り込み等は確認できなかった。また調査は平面確認のみとし、断ち割り調査を実施していないため、掘り方を含め下部遺構についても不明である。土層堆積から約50cmに及ぶ盛土層の上に構築されていることが確認された。

5号集石（図21・36）

調査区北側、14区とした地点から確認された。4号集石の東に位置する。東西70cm、南北1.00ｍ程の範囲に、20～40cm程の礫が集中する。集石の高さを揃え、整然と方形に集中していた。集石直上は道路砕石となるため、掘り込み等は確認できなかった。4号集石同様、平面確認のみとし、断ち割り調査を実施していない。土層堆積から盛土層の上に構築されていることが確認された。

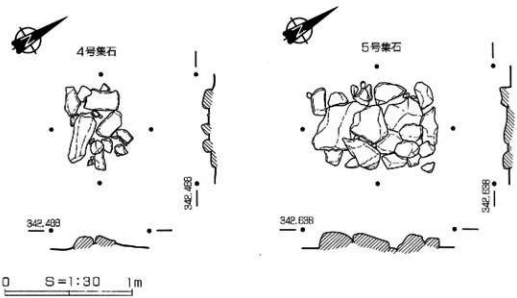


図21　4号・5号集石平・断面図

③盛土・埋土層

調査の過程において、数か所で明らかな盛土及び埋土層の痕跡を確認した。盛土層については土塁など遺構との識別が判然としない部分もあったが、特に、面的に広範囲に及ぶものを盛土層として取り上げる。埋土層については、当然のことながら堀等の遺構を埋め戻した痕跡となるが、掘り下げ調査を実施していないため単に可能性の指摘にとどまる。なお、2号土塁から4号土塁間、約20ｍも埋土層として確認できるが、すでに個々の遺構説明に際し、述べているためここでは特に取り上げなかった。

盛土層1（図22）

南側調査区、2区北壁からその痕跡を確認した。部分的ではあるが、土層堆積に粘質土と砂粒とが互層になる箇所を確認できる。1号水路北側石積が南側より高く構築されていること、更に2号水路が大きく段差を生じて流下する構造と推測できることなどから。1号水路北側石積を境に北側を一段高く盛土していると考えた。また、西側3区から検出された1号石列が地表下30cm程の浅い箇所に位置することも考慮すれば、1号水路及び1号石列を境として北側には東西方向約30ｍの範囲に盛土が及んでいると推定される。2区北

壁土層堆積からは、東側に10・12～15層など互層が確認できない部分があり、これを先行する盛土層、あるいは土景等の遺構として解釈することもできる。出土遺物をも含めて検討すべきであり、今回は可能性のみ指摘しておく。

盛土層２（図36）

北側調査区、15区では地表下約30～40cmから混礫黄褐色粘質土による盛土層が確認された。表土剥ぎに際し、道路砕石直下から検出された極めて特徴的な土層であった。土層堆積から４号集石西側約６ｍの地点を起点とし、東側へ約18ｍの範囲に広がり、北から南、西から東へ層厚を増しつつ堆積していることが確認できる。特に起点とした地点にはピット状の落ち込み（４層）が確認でき、それを境に堆積しているようである。更に、その下には先行する盛土層らしき５～７層が認められた。確認された５～７層が遺構となるのか、また時期差が存在するのか明確にし得なかった。

盛土層３（図37）

北側調査区15区では、もう一か所７・８号石列が検出された西側にも明確な盛土層が確認されている。積み上げ単位として14層、11～13層、10層と３段階程度を復元できる。西側に堆積する６～９層が盛土層２に相当する。盛土層２・３として、個々に報告するが、両者に時期差が存在するのか明確にはできない。ただ、土層堆積からは同じ高さまで盛土され、平坦面を造り出していることは確認できる。単に両者を、積み上げ単位、あるいは積み上げ工区として把握し、一連の作業工程として把握することも可能である。

盛土層４（図39）

最も東側、18区から検出された。すでに道路舗装工事によって西側への広がりは明確になし得なかったが、東西方向２ｍ、南北方向１ｍにわたり灰色粘質土と砂質土が互層となる部分が確認された。版築状につき固められ、非常に固く締まった土層となっていた。単に、盛土層とするより、遺構の基底部として把握した方が良いであろうか。なお、掘り下げ調査により、下層からは礫が集中して検出している。礫間から遺物の出土が見られるため、遺構として捉えられようが、その具体相は判然としなかった。

埋土層１（図31）

調査区北側、13区とした地点から検出された。遺構確認に際して、４号石列の東側には、面的に散在する一群の礫が確認できた。掘り下げ調査を実施し、地表下約１ｍから集中する礫を検出した。土層堆積の灰色土中から検出され、その上層には層厚約10cmを測る暗灰色土を覆い平坦面を造り出している。特に集中する礫間には土砂の混入が見られず、無造作に投げ込まれたような様相であった。部分的な確認であったため、その範囲、及び西側に位置する４号石列との重複関係も明確ではない。

埋土層２（図33）

遺構確認に際して、北側13区から検出した５号土塁西側には面的に散在する礫の広がりが一定の範囲で確認できた。一部掘り下げ調査を実施し、東から西、北から南へ堆積する土層が確認できた。また、同じく北から南へ傾斜して堆積する小礫も確認できた。堀状の遺構を埋め戻した痕跡と考えられ、おおよそであるが北側の落ち込みラインを推定することが可能となる。

埋土層３（図37）

北側15区、盛土層３が確認された下層には集中する礫が確認できた。埋土層として報告するが、集中する礫には、面が揃い列として認識できる箇所もある。土層堆積からは落ち込みラインが確認でき、15層を境にいったん平坦面を造り出していることが確認できる。その後、盛土層２（６～９層が相当）・盛土層３（10～14層に相当）が確認でき、15層を境に時期差が存在しているようである。

(5) 遺物 (図40～44)

ここでは遺構に伴わない遺物を主として取り上げる。調査では中世から近代までの遺物が見られた。その大部分は土器・陶磁器であるが、金属器・石製品も見られた。

かわらけ (図40－1～図41－11)

いずれも内外面ロクロ成形され、底部には回転糸切り痕が残るかわらけである。大部分が細片となり、胎土が粗く砂粒の混入が目立つものである。復元データであるが、口径5cm～16cm、器高2cm程の法量となり、口径8～9cm及び10～12cmに集中するようである。多くが底部から直線的に外傾、もしくはやや内湾しながら立ち上がる器形となり、口縁端部が肥厚し、丸みを持つものと薄手でやや尖り気味となるものがある。図40－22は内面見込みと体部の境が不明瞭となり、図40－25は体部が湾曲し耳皿を思わせる器形となる。1点のみであったが、図41－10は灯明皿としての使用が確認される。

その他土器類 (図41－12～図42－7)

かわらけ以外、その他土器類をまとめた。擂鉢・火鉢・内耳土鍋・土釜等が出土する。擂鉢は図41－15に擂り目が確認できる以外、図41－12・14には確認できなかった。図41－18の内耳鍋は、すでに器高を減じ、平底の焙烙形態となったものである。外面に煤が付着し、内外面には指頭痕が残る。図42－1は口縁部に菊の印刻が施される火鉢、図42－2は土釜と推定され、肩部に耳状の把手が付く。把手内側には擦痕が観察される。

中国製磁器 (図42－8～11)

8は1号水路出土の染付皿、9は3号水路より出土した青磁壺胴部片、10は1号石列際より出土した青磁片、11は碁笥底となる白磁皿の底部片である。

国産陶器 (図42－12～28)

図42－12～24は瀬戸美濃産の施釉陶器、25～28は常滑甕となる。12は鉄釉が施された天目茶碗で、体部下半は露胎となっている。古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期段階に位置づけられよう。13～15は灰釉端反皿となる。17・19は灰釉皿の高台部である。いずれも全面施釉され、17は断面方形、19は断面逆三角形の高台となる。18は鉄釉が施された平碗で、断面方形の高台が付く。大窯1期段階に位置づけられよう。21・22は口縁部形態は不明であるが、錆釉が施される擂鉢となる。23は四耳壺の胴部片であろうか。古瀬戸前期に位置づけられる。24は瓶子の胴下半部となるか。外面鉄釉が、内面には錆釉が施釉される。古瀬戸中期Ⅰ～Ⅱ期段階に位置づけられよう。25～28の常滑甕は27が肩部片となる以外、胴部片となる。

近世陶磁器 (図43－1～8)

1は肥前系染付磁器、広東碗の碗蓋となろう。18世紀前半に属す。2は型紙摺による碗蓋である。18世紀後半に属す。3は型打成形による菊皿である。畳付き無釉で、高台内には圏線が見られる。17世紀代に位置づけられる。4は長石釉と鉄釉が掛け分けられる碗である。17世紀中頃に位置づけられる瀬戸美濃陶器である。5は肥前系染付磁器の碗底部片である。畳付き無釉で、見込みにはコンニャク判五弁花文が押印される。18世紀前半に位置づけられる。被熱を受けているか、気泡が全体に見られる。6は瀬戸美濃系の鉢となろう。灰釉が施され、17世紀後半から18世紀前半に位置づけられる。7は17世紀代に位置づけられる香炉であろう。8は17世紀後半に位置づけられる瀬戸美濃系の小鉢となろう。

土製品 (図43－9・10)

9は手づくね土器となろうか、内外面に指頭痕が残る。10は2mm程の孔が穿たれた円盤状の土製品である。時期・用途ともに不明である。

その他、金属製品(図43－11～20)、石製品(図43－21・22、図44－1～3)がある。

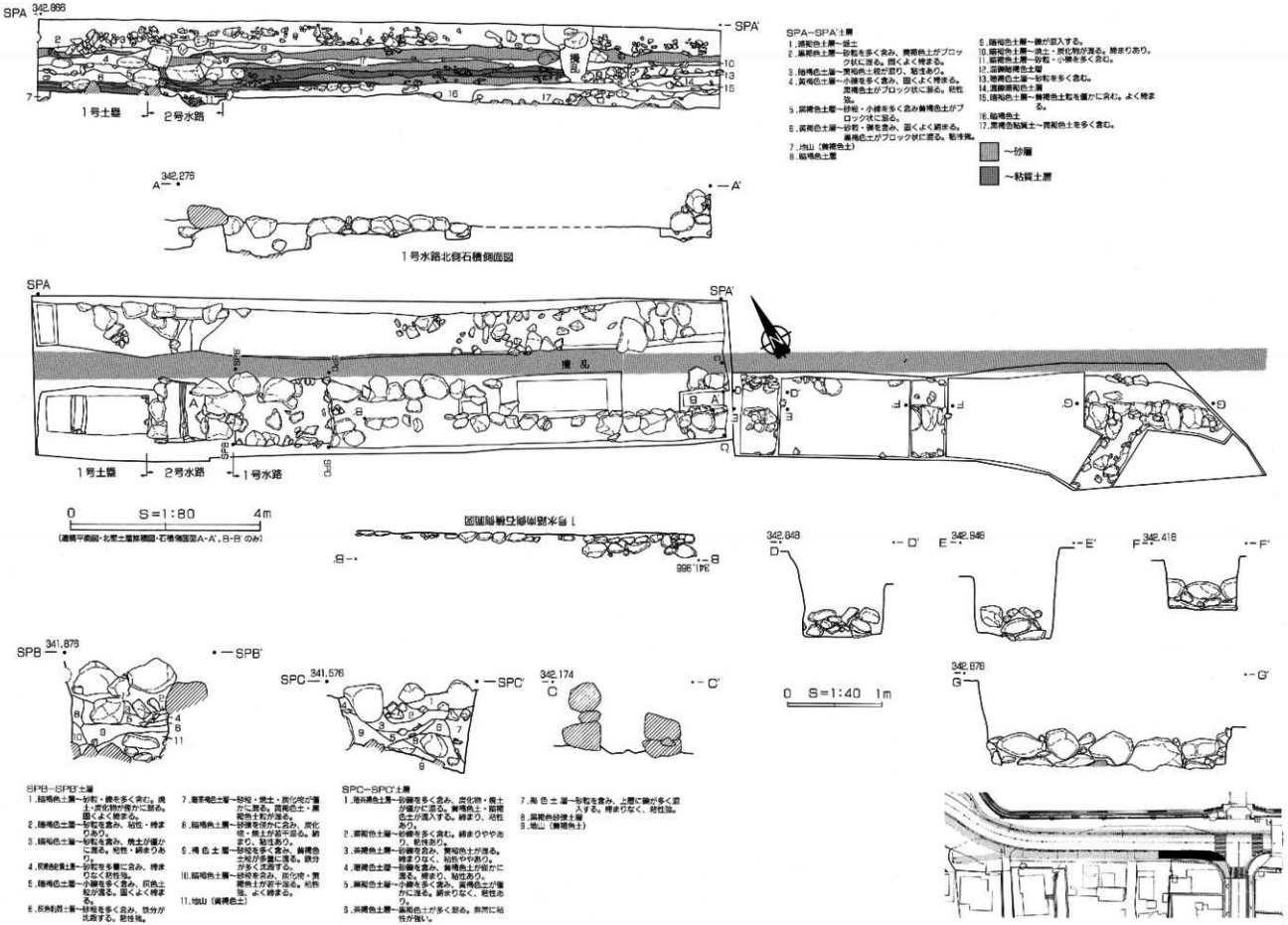


図22　1・2区 全 体 図（1号・2号水路、1号土壇、盛土層1）

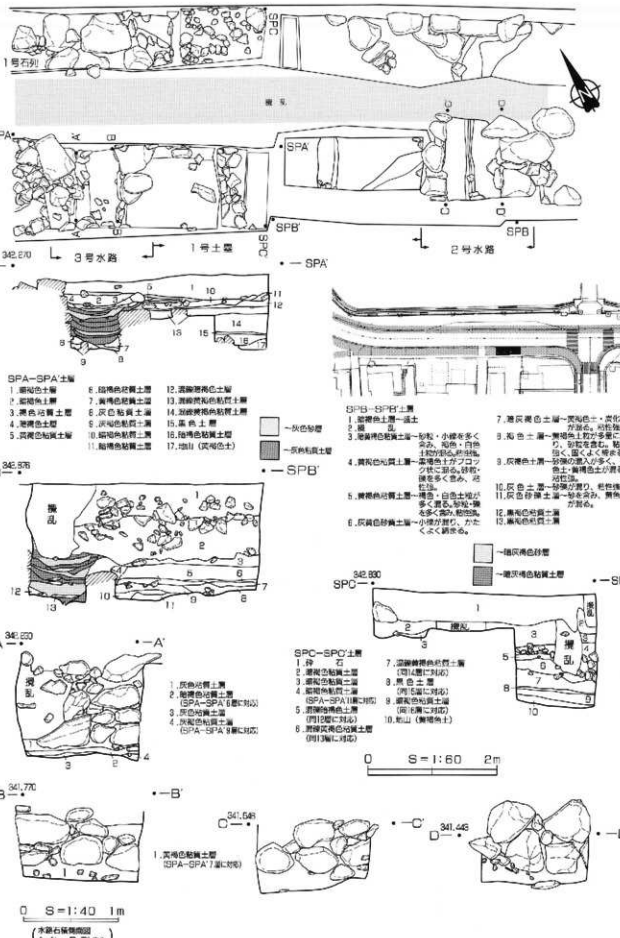
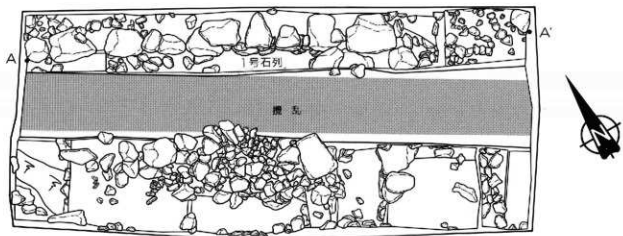
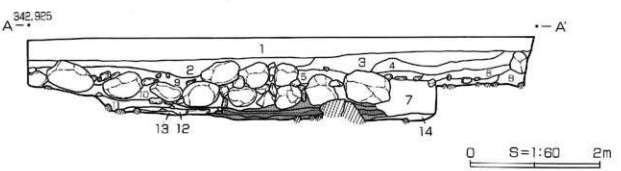


図23 2・3 区 全 体 図（2号・3号水路、1号土壇）





1.表　土　層～アスファルト・道路砕石・茶褐色土・砕石
2.茶褐色土層～小礫を含み、褐色土・黄褐色土粒が混る。非常に緻密で、固くよく締まる。
3.混礫暗褐色土層～4～6cm程の小礫が多量に混り、褐色土・黄褐色土粒が混る。固くよく締まる。
4.混礫暗褐色土層～3層とよく似るが、黄褐色土がブロック状に多く混る。
5.混礫褐色土層～3、4層より小礫を多く含む。黄褐色土がブロック状に混り固くよく締まる。
6.暗褐色粘質土層～小礫が多く混り、褐色・黄褐色土粒が混る。固くよく締まる。
7.混礫暗褐色土層～小礫を多量に含み、黄褐色土がブロック状に混る。3、4層に比べ緻密で、固くよく締まる。粘性あり。
8.暗褐色粘質土層～小礫を若干含み、褐色・黄褐色土粒が僅かに混る。非常に緻密で、粘性強い。
9.混礫茶褐色土層～小礫を多量に含み、褐色土・黄褐色土粒が混る。固くよく締まり、粘性強い。
10.褐色粘質土層～小礫を多く含み、炭土粒が僅かに混る。非常に緻密で、固くよく締まる。粘性強い。部分的に砂粒が混る。
11.混礫暗褐色粘質土層～小礫を多く含み、黄褐色土・灰黄色土粒が混る。緻密でよく締まる。
12.灰黄色粘質土層～小礫を多く含み、炭化物・黄褐色土粒が混る。しまりややあり。
13.褐色粘質土層～小礫を多く含み、僅かに焼土粒が混る。非常に緻密で、しまりあり。
14.混礫黄褐色粘質土層～拳大程の礫が多く混入し、灰色・暗褐色粘質土がブロック状に混る。よく締まり、粘性強。

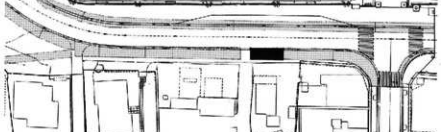


図24　3区全体図（1号石列、1号土塁、3号水路）

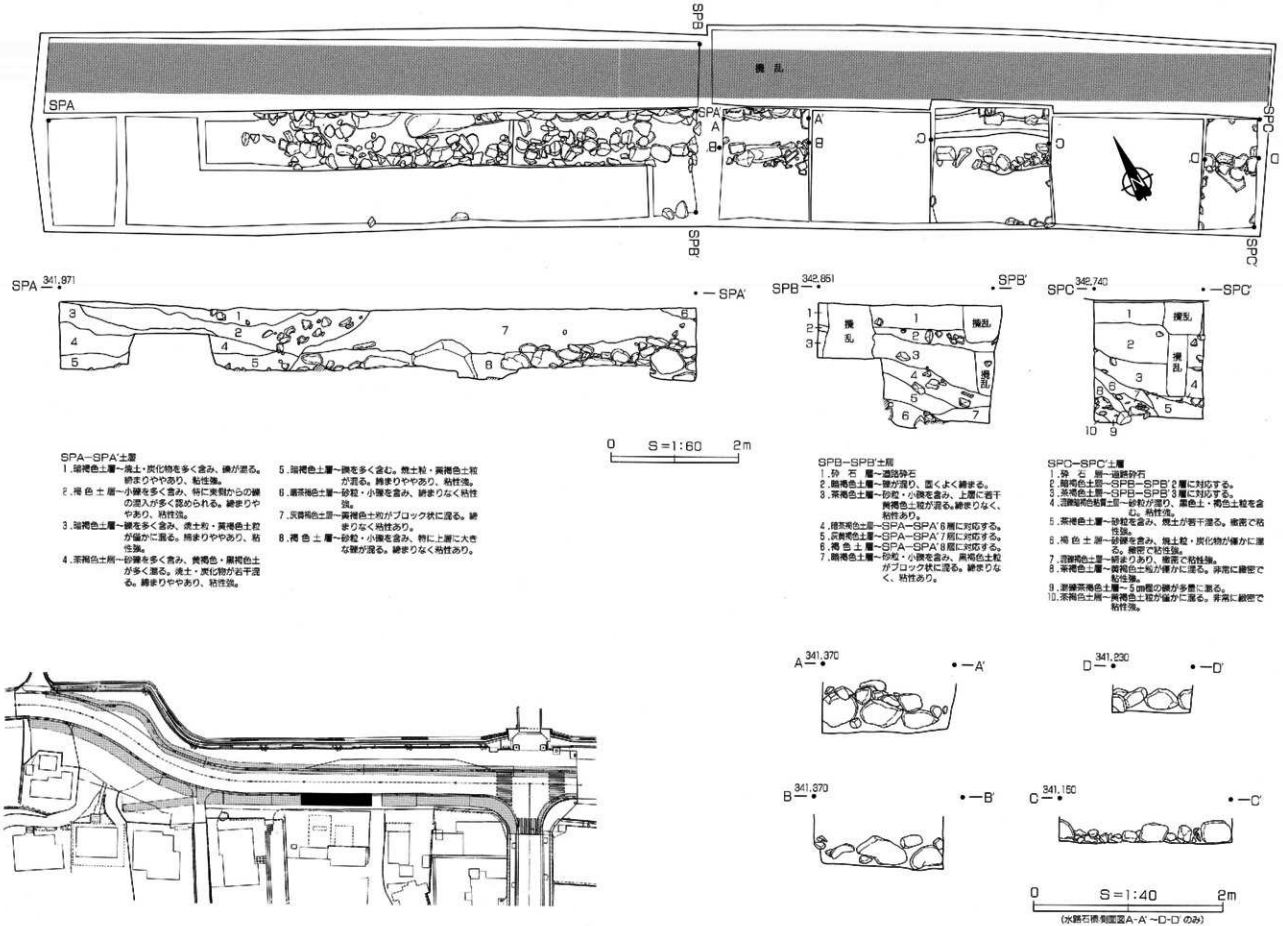


図25 4・5区全体図(4号水路)

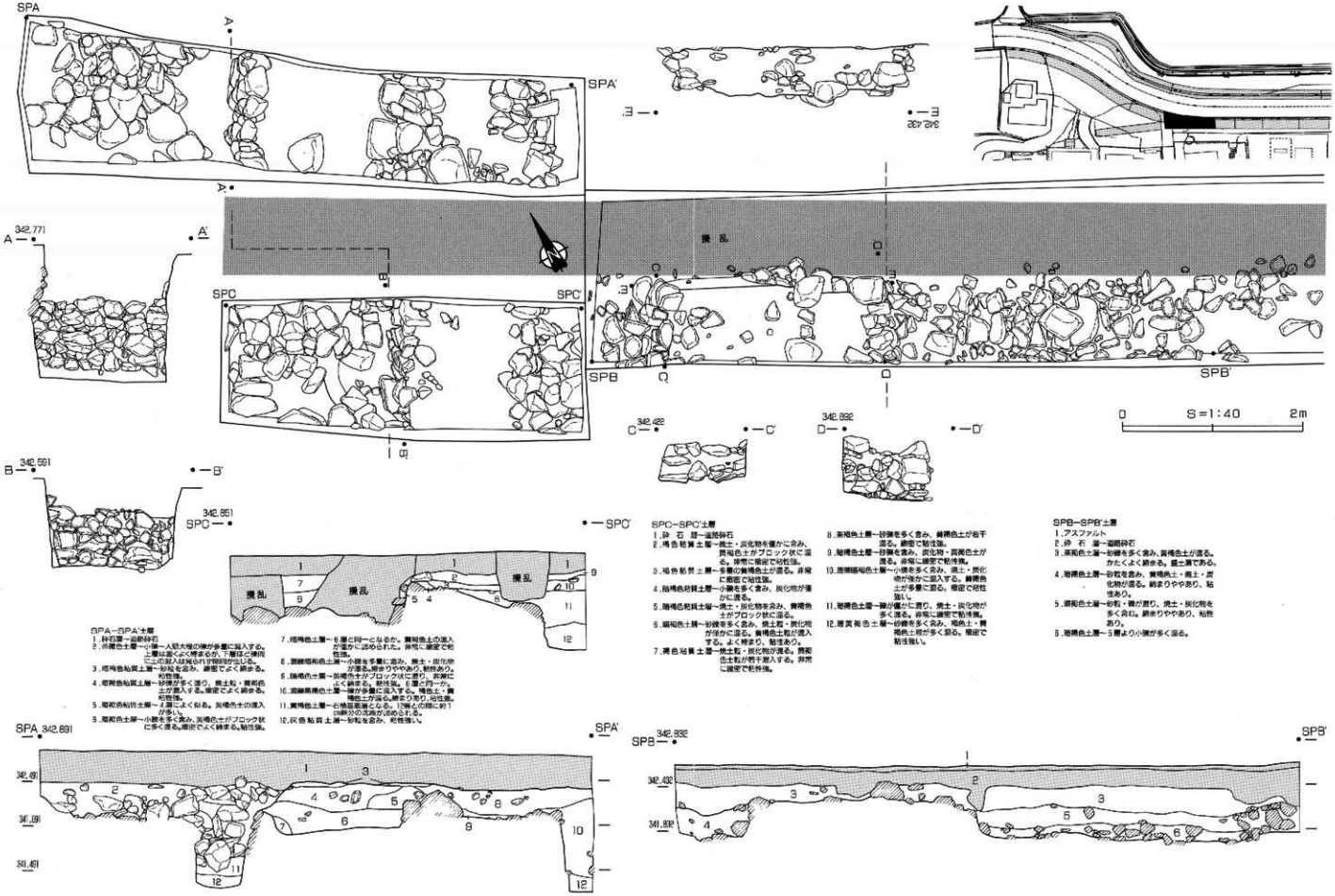


図26 7・8区全体図（2号土壇）

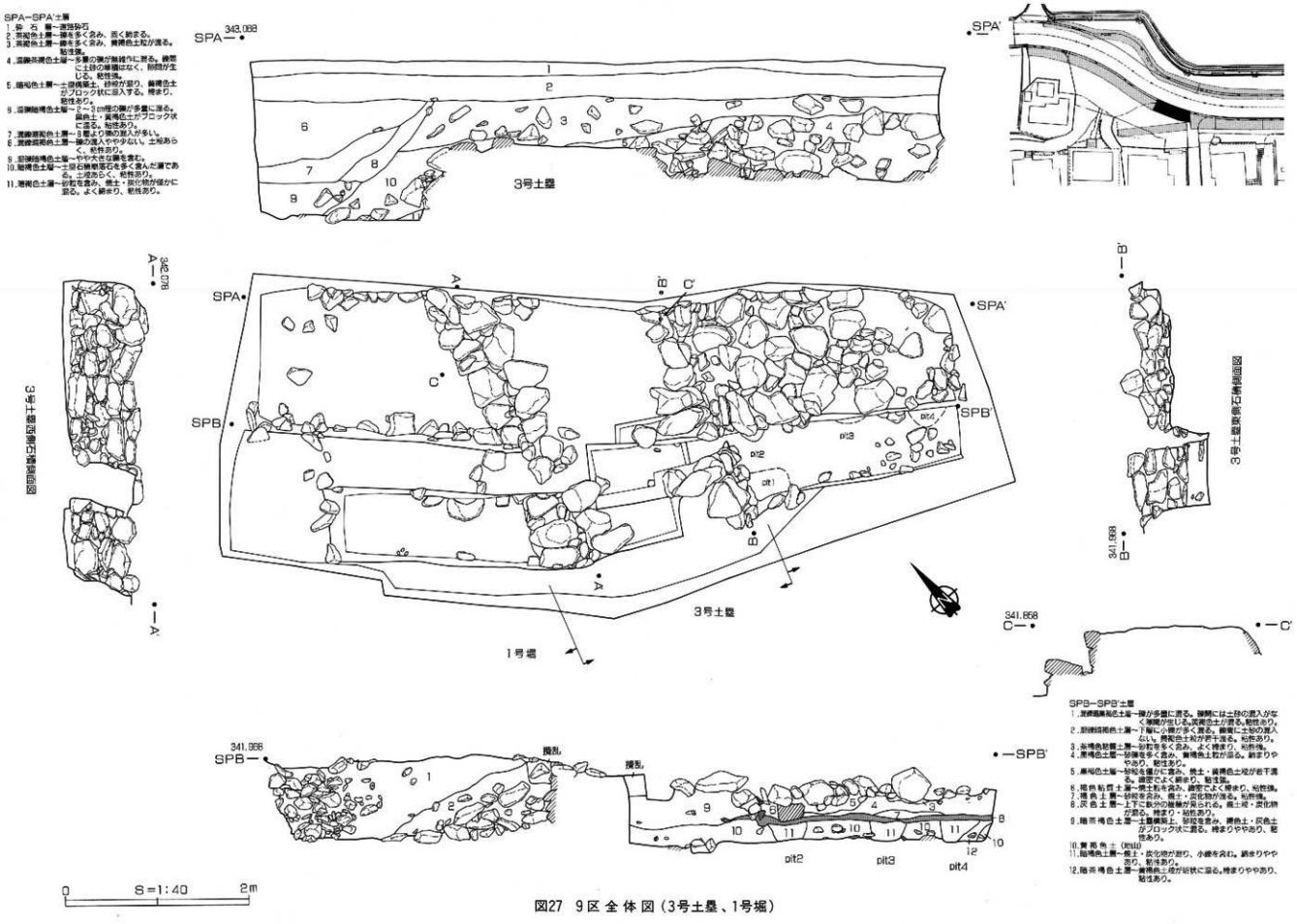
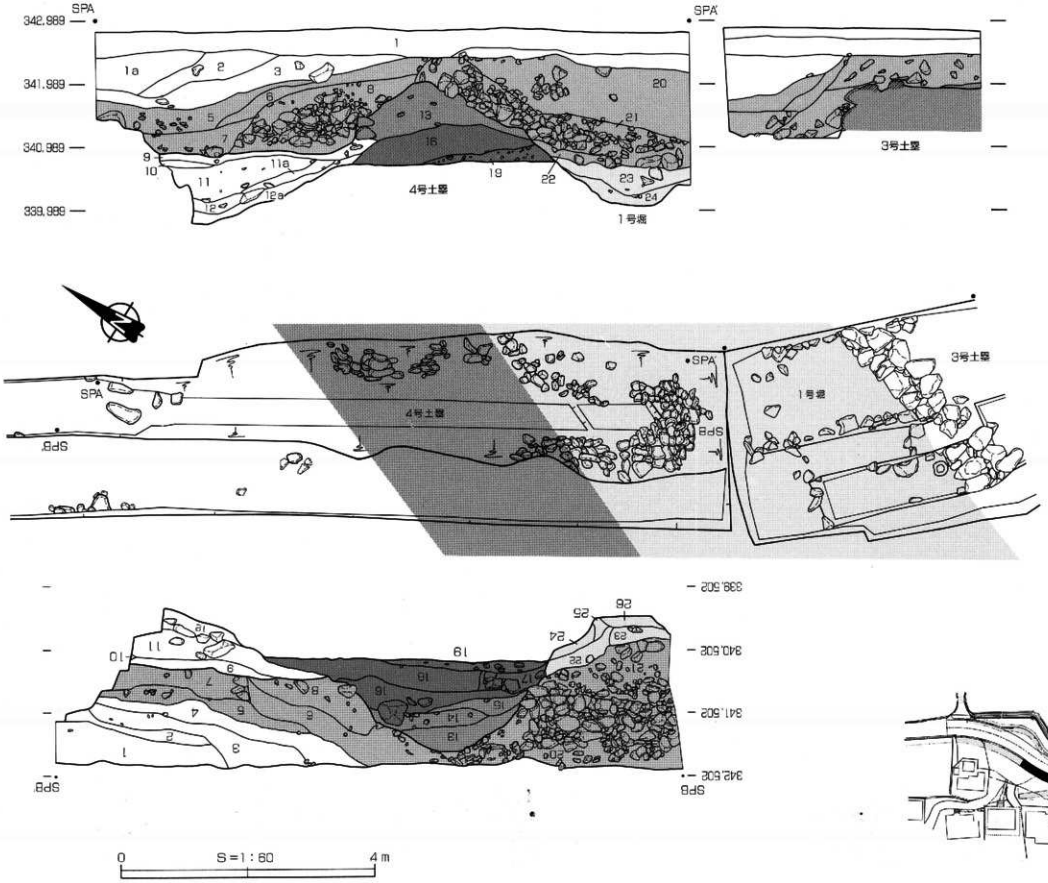


図27　9区全体図（3号土壙、1号堀）



1.砕　石　層～道路砕石
1a.茶褐色土層～小礫を含み、黄褐色土・黒褐色土が混る。よく締まり緻密、粘性あり。
2.茶褐色土層～小礫を含み、炭化物が混る。締まりあり、粘性あり。
3.茶褐色土層～2層より礫の混入が多い。
4.暗褐色土層～礫の混入が多く、炭化物が僅かに混る。灰色粘質土がブロック状に混る。締まり、粘性あり。
5.混礫黒褐色土層～2～3cm程の礫を多量に含み、黄褐色土がブロック状に混る。締まり、粘性あり。
6.混礫黄褐色土層～2～3cm程の礫を多量に含み、下層に黒褐色土の混入が多く認められる。締まり、粘性あり。
7.混礫黄褐色土層～6層より大形の礫が多く混入する。
8.混礫暗褐色土層～炭化物・黄褐色土が混り、下層には大形の礫が混入する。締まり、粘性あり。
9.暗褐色土層～多量の炭化物が下層に堆積する。焼土が若干混入し、灰色粘質土がブロック状に混る。粘性強。
10.茶褐色土層～砂礫を僅かに含み、褐色土・黄褐色土がブロック状に混る。締まりややあり、粘性強。
11.暗褐色粘質土層～炭化物を僅かに含み、礫が混入する。締まりあり、粘性強。
11a.暗褐色土層～砂粒を含み粘性強。11層より締まりあり。
12.灰色粘質土層～砂粒を含み、炭化物が僅かに混る。下層との境に鉄分が沈殿する。粘性あり。
12a.黒褐色土層～砂粒を多く含み、締まりややあり、粘性強。
13.暗褐色土層～小礫を多く含み、黄褐色土・黒色土が混る。よく締まり緻密、粘性あり。
14.混礫暗褐色土層～焼土・炭化物が僅かに混り、黄褐色土・黒色土がブロック状に混る。締まり、粘性あり。
15.褐色土層～黄褐色土・黒褐色土がブロック状に混り、緻密でよく締まる。粘性強。
16.暗褐色土層～焼土・炭化物を多く含み、褐色土・黒褐色土が僅かに混る。よく締まり緻密、粘性強。
17.暗褐色土層～焼土・炭化物が僅かに混り、黄褐色土・黒褐色土がブロック状に混る。よく締まり緻密、粘性強。
18.茶褐色土層～砂粒を含み、黒褐色土・灰色土・黄褐色土がブロック状に混る。よく締まり緻密、粘性強。
19.混礫茶褐色土層～焼土・炭化物が僅かに混り、黄褐色土・黒褐色土がブロック状に混る。しまり、粘性あり。
20.混礫褐色土層～礫が多く混入するが、礫間に土砂の堆積は見られず隙間が生じる。
21.混礫暗褐色土層～20層と比べ混入する礫は小さく、量も少ない。下層ほど粘性が強い。
22.茶褐色土層～多量の炭化物を含み、灰色土がブロック状に混る。しまりなく、粘性あり。
23.灰色粘質土層～炭化物を若干含み、褐色土がブロック状に混る。しまりなく、粘性あり。
24.暗茶褐色土層～砂粒を僅かに含み、灰色土・黒色土が混る。しまりややあり、粘性あり。
25.茶褐色土層～砂粒が多く混り、灰色土を含む。締まりあり、粘性強。
26.暗灰色土層～砂粒を多く含み、褐色土が混る。締まりややあり、粘性強。

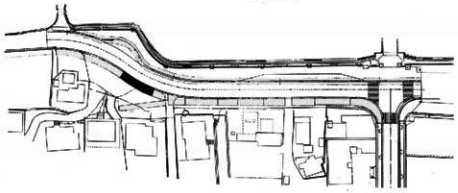
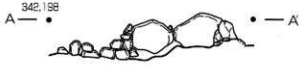
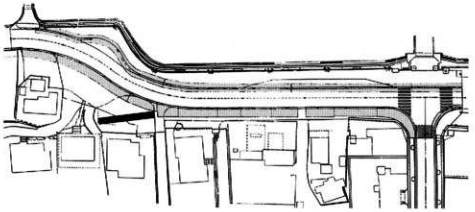
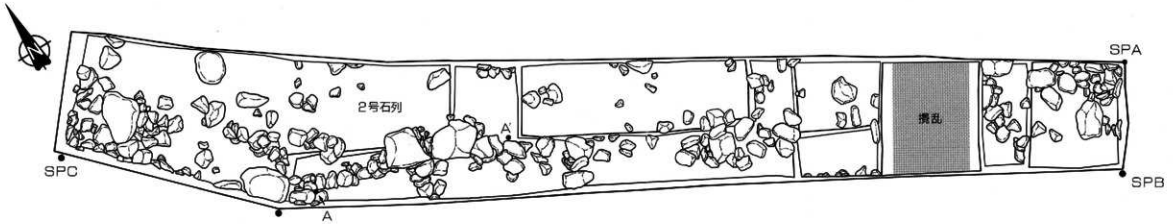


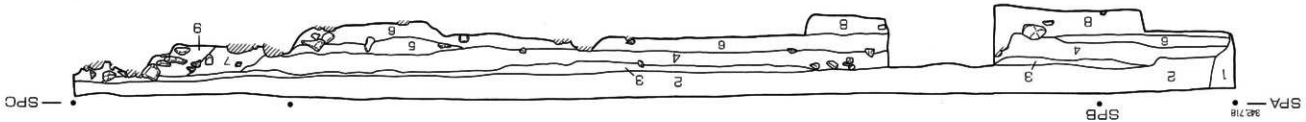
図28　9・11区全体図(4号土壘、1号堀)

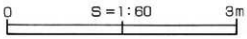


2号石列側面図









1.撹　　乱
2.表　土　層～アスファルト、道路砕石。
3.灰色粘質土層～小礫を多く含み、黒色土・褐色土が混る。鉄分の沈殿が部分的に敷見する。固くよく締まり、粘性あり、旧耕作土か。
4.褐色土層～小礫を多く含み、焼土粒・炭化物が混る。灰色土・黄褐色土粒が混入する。
5.明褐色土層～小礫を多く含み、黄褐色土が混る。締まりやや あり、粘性あり。
6.暗褐色土層～小礫をやや含み、焼土粒・炭化物が混る。緻密でよく締まる。粘性あり。
7.撹　　乱
8.混礫暗褐色粘質土層～5cm程の小礫を多量に含み、褐色土・黄褐色土がブロック状に混る。緻密でよく締まり、粘性強。
9.混礫明褐色土層～小礫を多く含み、焼土粒が僅かに混る。黒色土・暗褐色土粒が混り、固くよく締まる。

図29　10区全体図（2号石列）

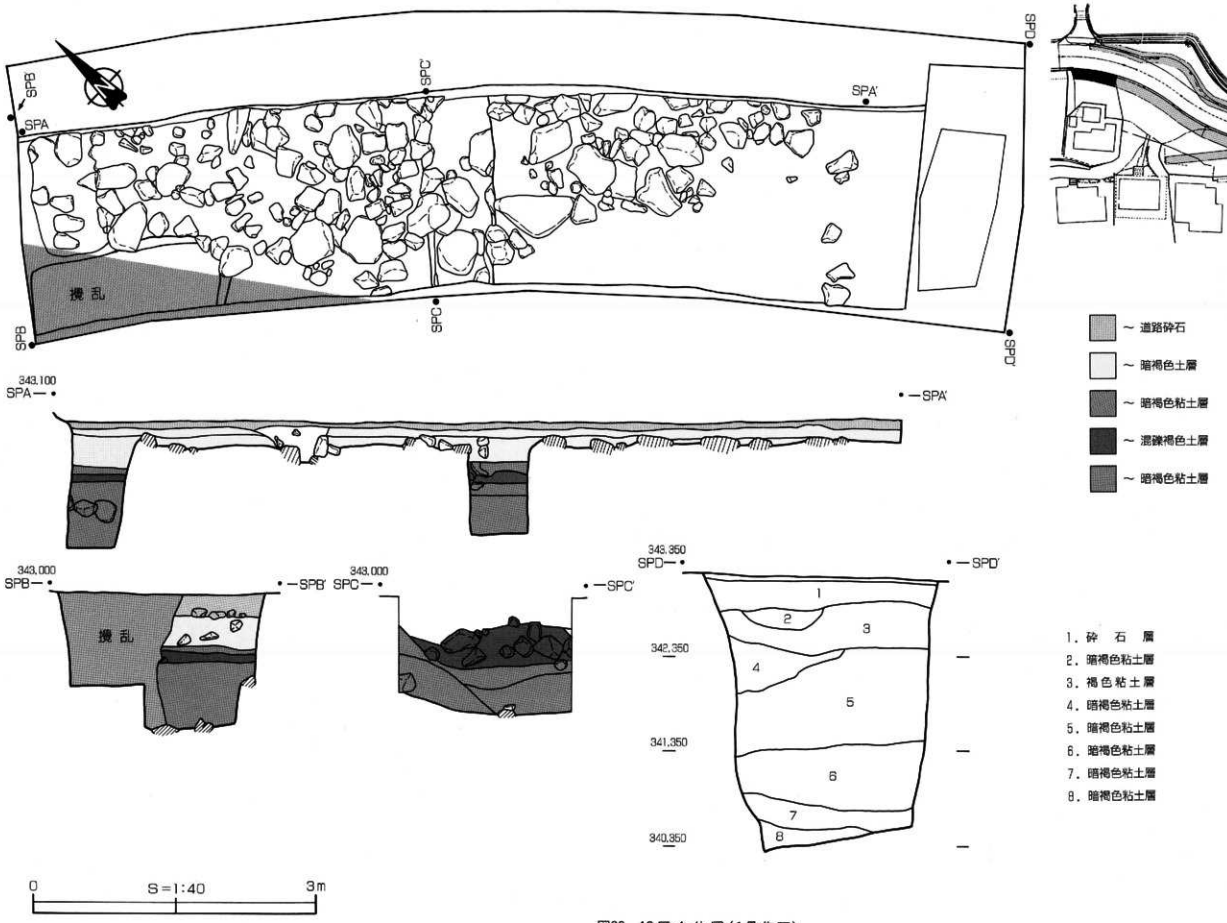


図30　12区全体図(1号集石)

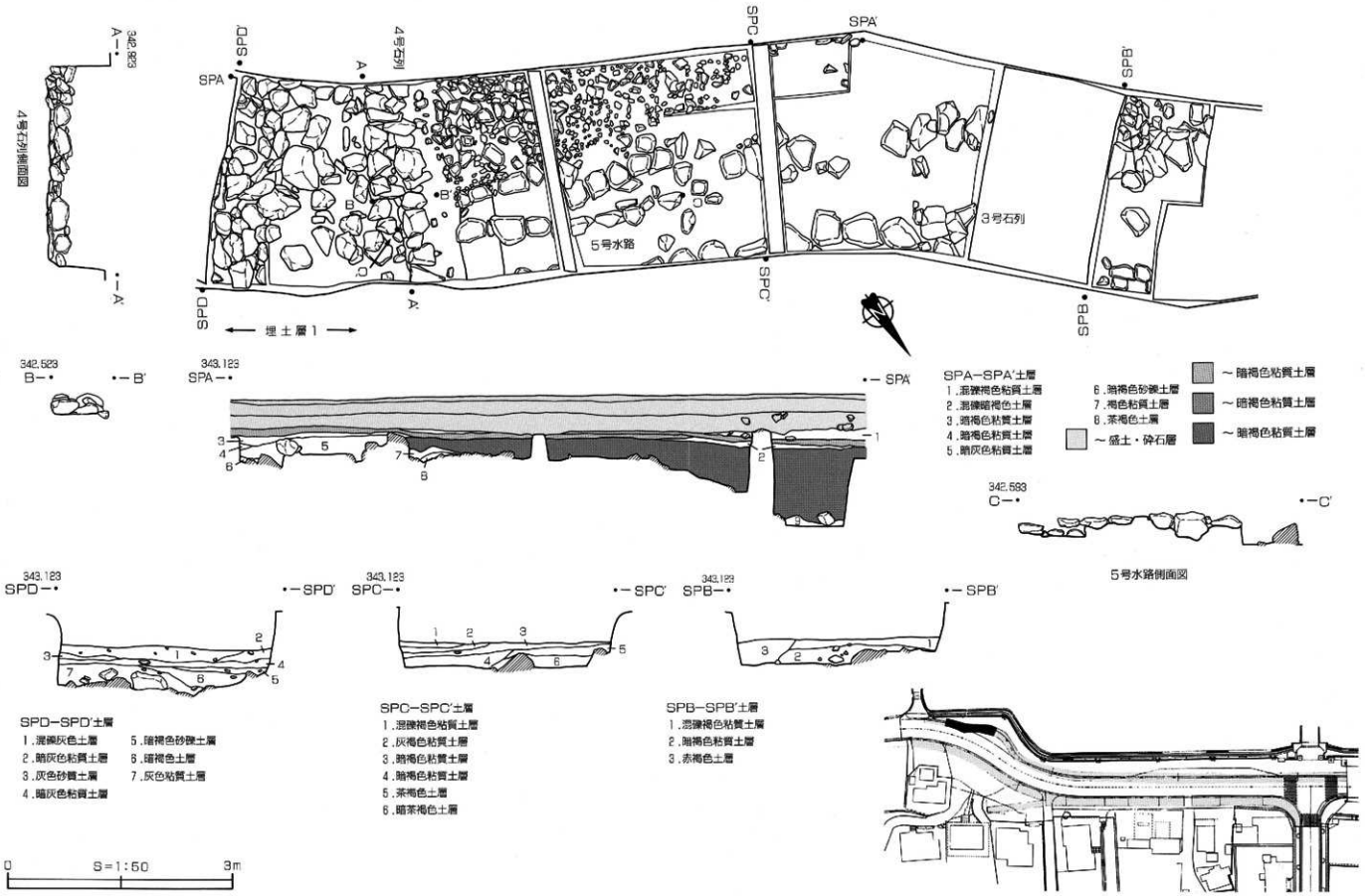


図31　13区全体図（3号・4号石列、5号水路、埋土層1）

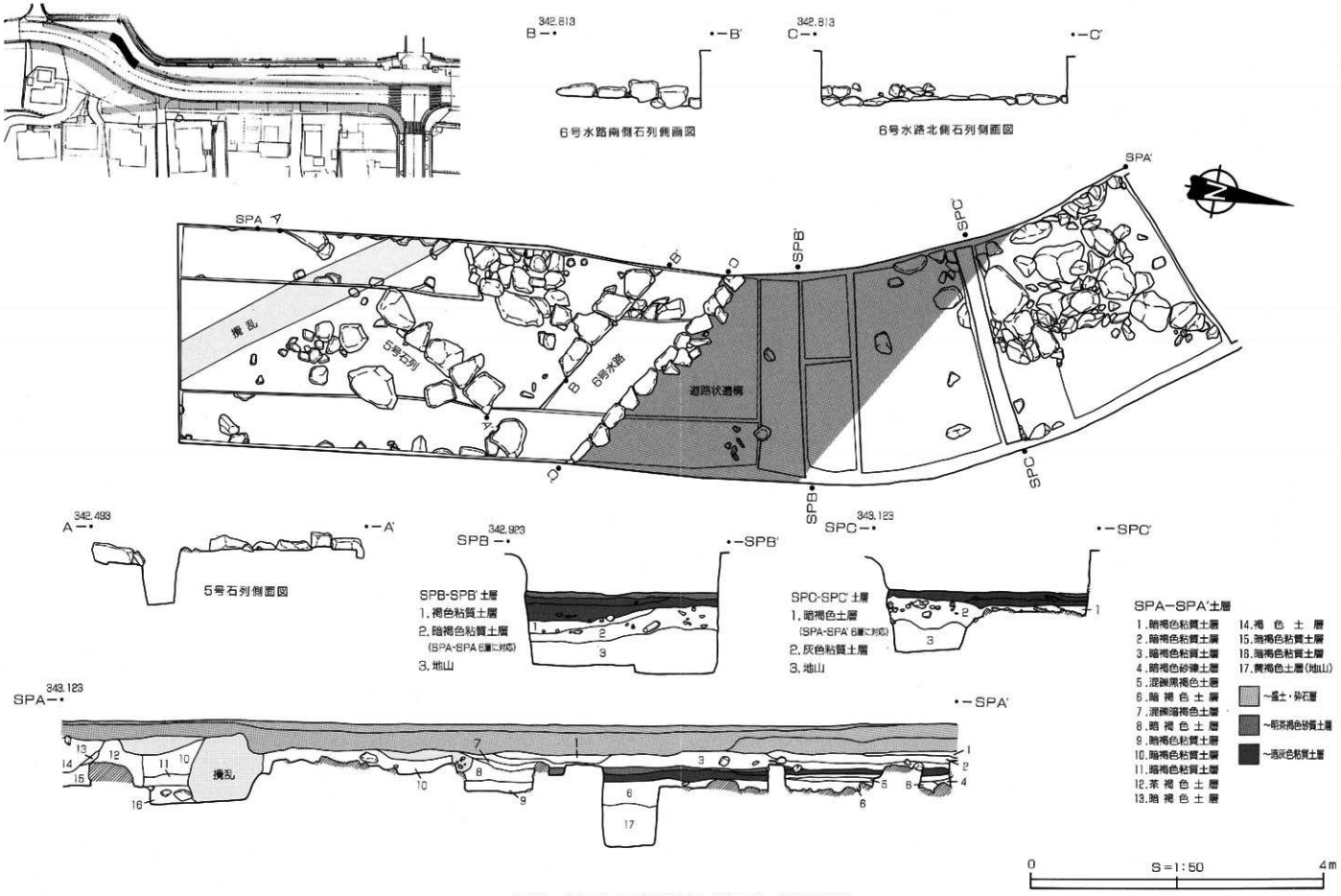


図32　13区全体図(6号水路、5号石列、道路状遺構)

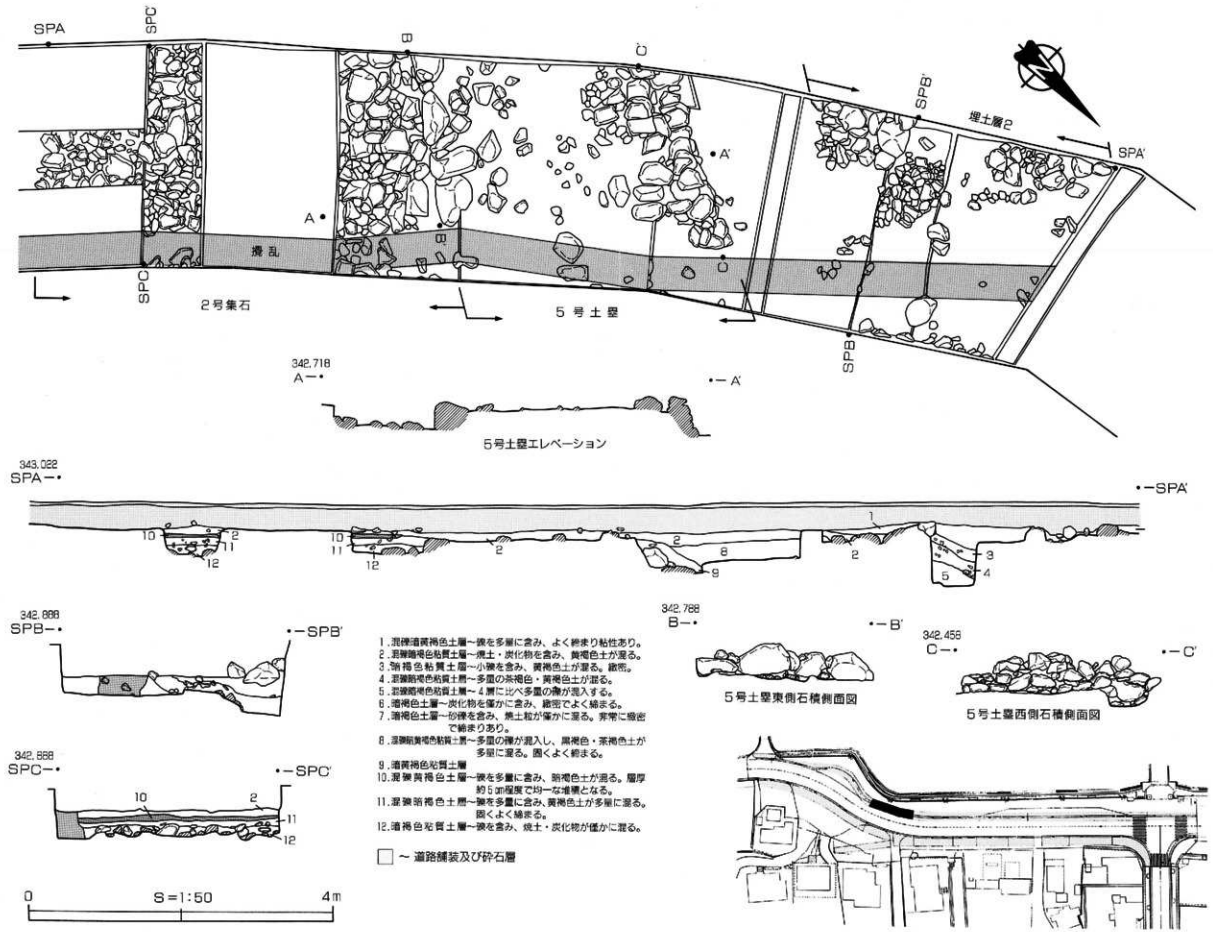
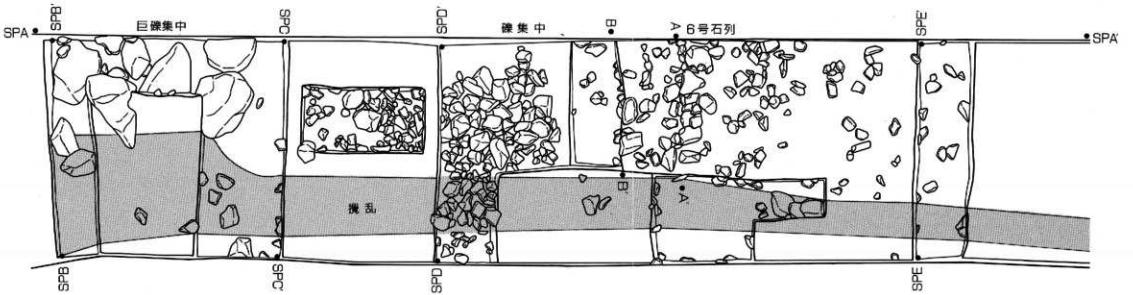
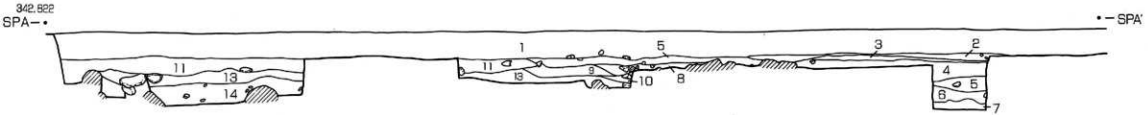
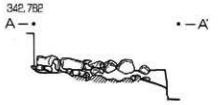


図33　14区全体図（5号土壙、2号集石、埋土層2）

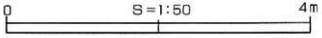






6号石列側面図

1.砕石層
2.混礫暗褐色粘質土層
3.混礫黄褐色土層
4.暗黄褐色粘質土層～砂礫を含み、焼土・炭化物が混る。灰色・褐色土が混る。緻密でよく締まる。
5.混礫暗褐色土層～礫を多量に含み、黄褐色土が多量に混る。固くよく締まる。
6.暗褐色粘質土層～小礫を含み、焼土・炭化物が混る。茶褐色土が混入する。緻密でよく締まる。
7.暗黄褐色粘質土層～小礫を含み、焼土・炭化物が僅かに混る。緻密でよく締まる。
8.混礫暗褐色粘質土層～拳大程の礫を多く含み、黄褐色土が混る。
9.暗灰褐色土層～小礫を多量に含み、焼土・炭化物が混る。褐色土、灰色土が混入する。
10.灰褐色粘質土層～焼土・炭化物が混る。緻密で非常によく締まる。
11.茶褐色土層～灰色・黄褐色土が混り、固くよく締まる。
12.暗褐色土層～焼土・炭化物が僅かに混り、固くよく締まる。
13.暗褐色粘質土層～礫を多量に含み、焼土が僅かに混る。
14.混礫暗褐色土層～多量の礫が混り、焼土・炭化物が混る。



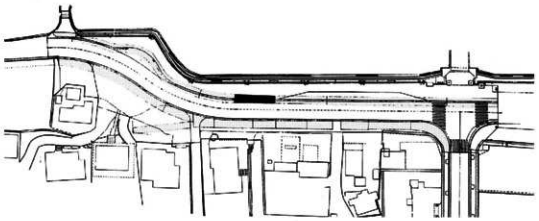


図34　14区全体図（6号石列）

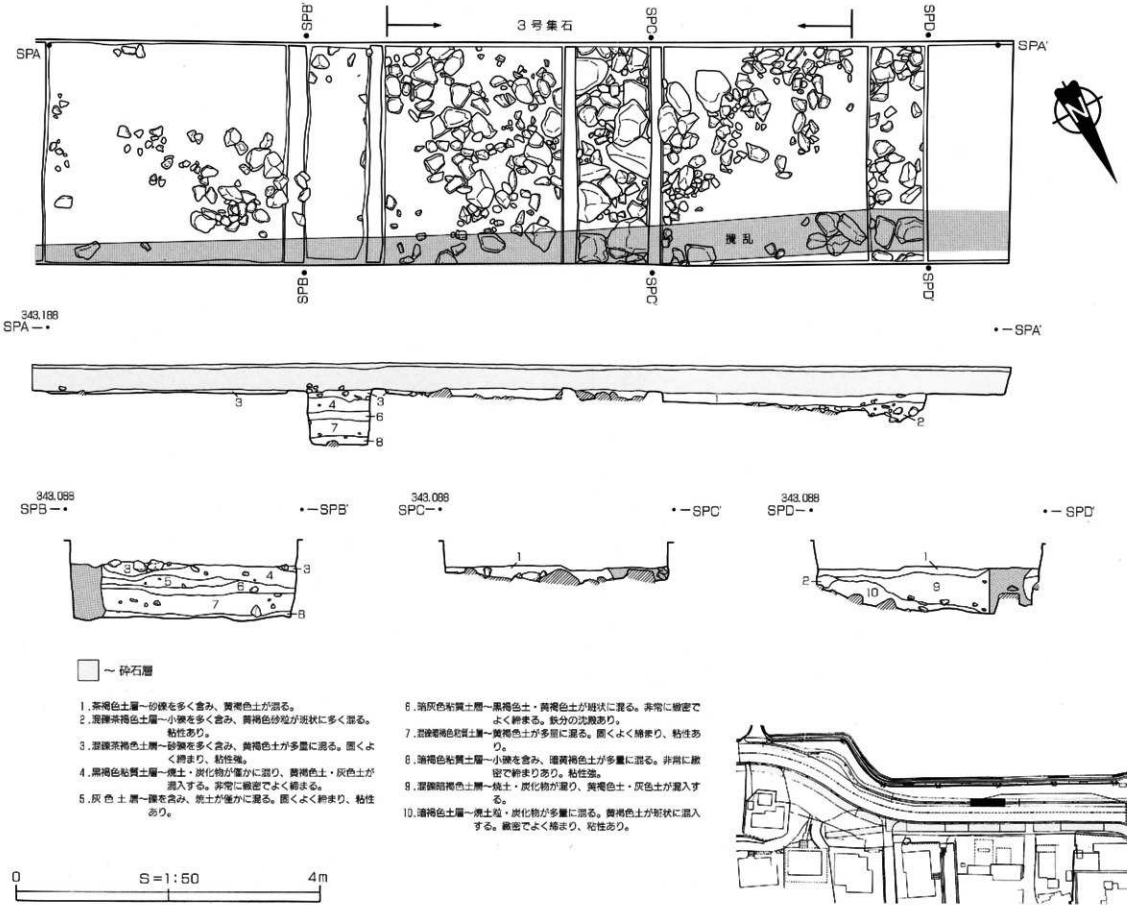


図35 15区全体図（3号集石）

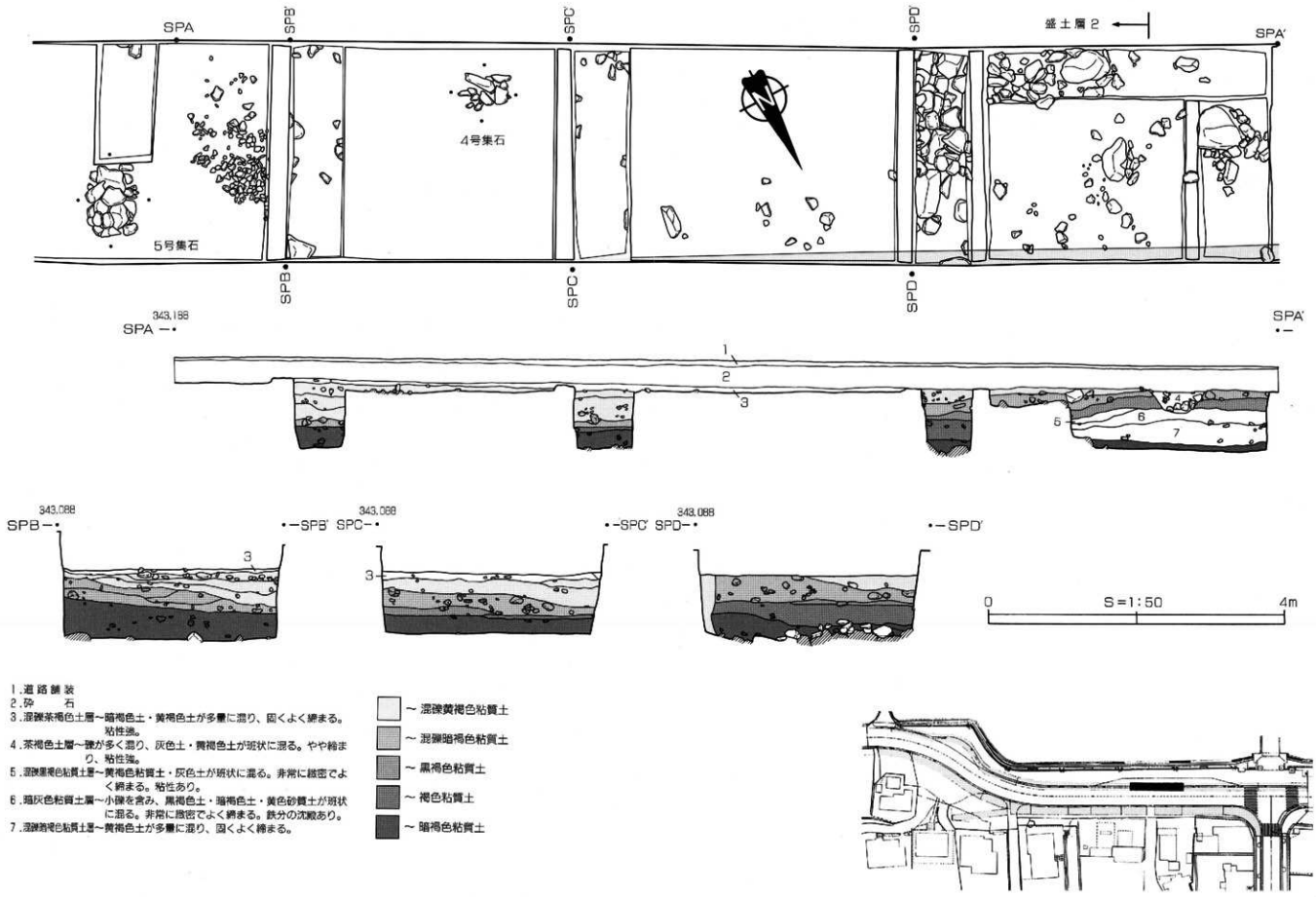
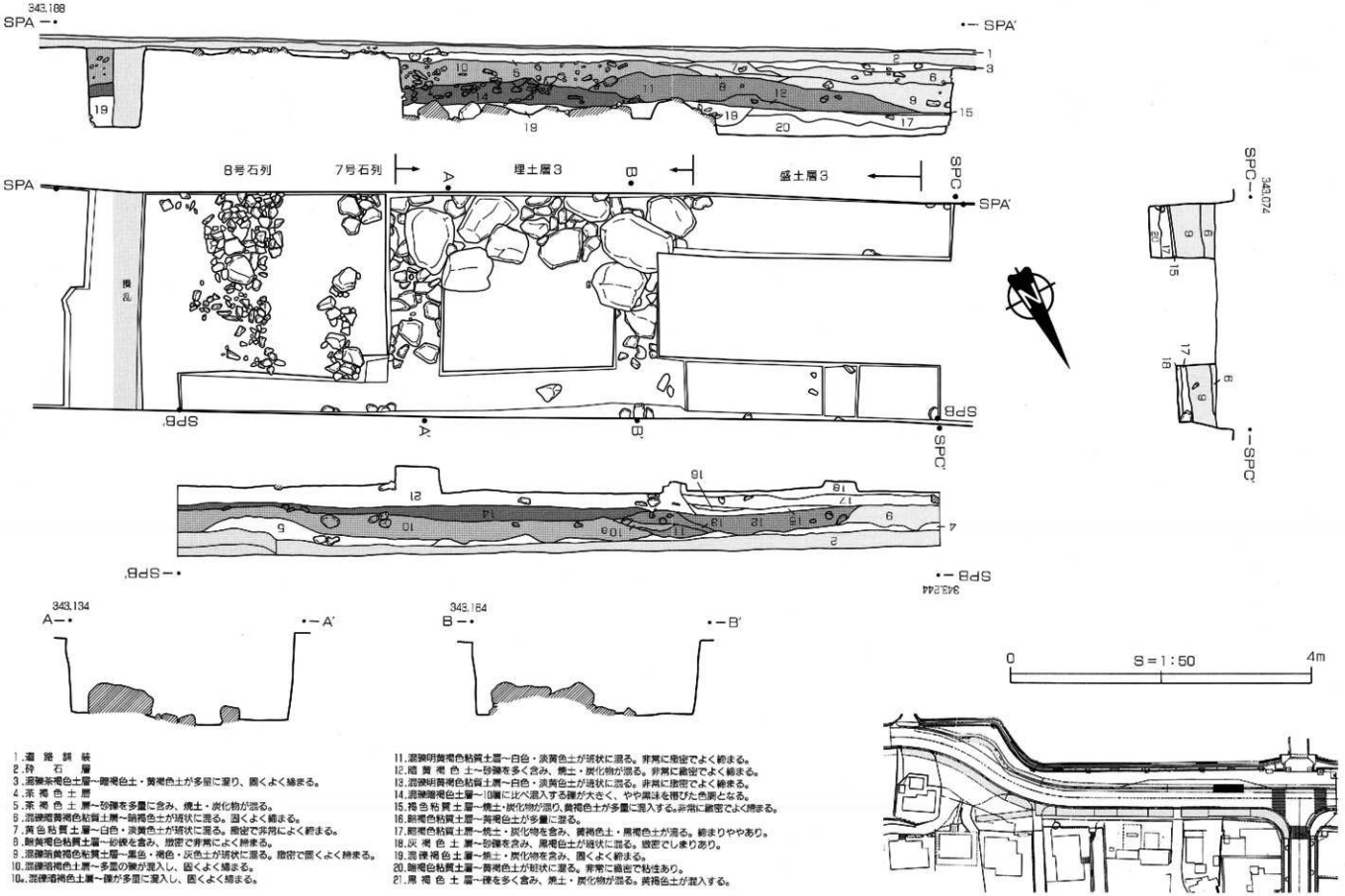
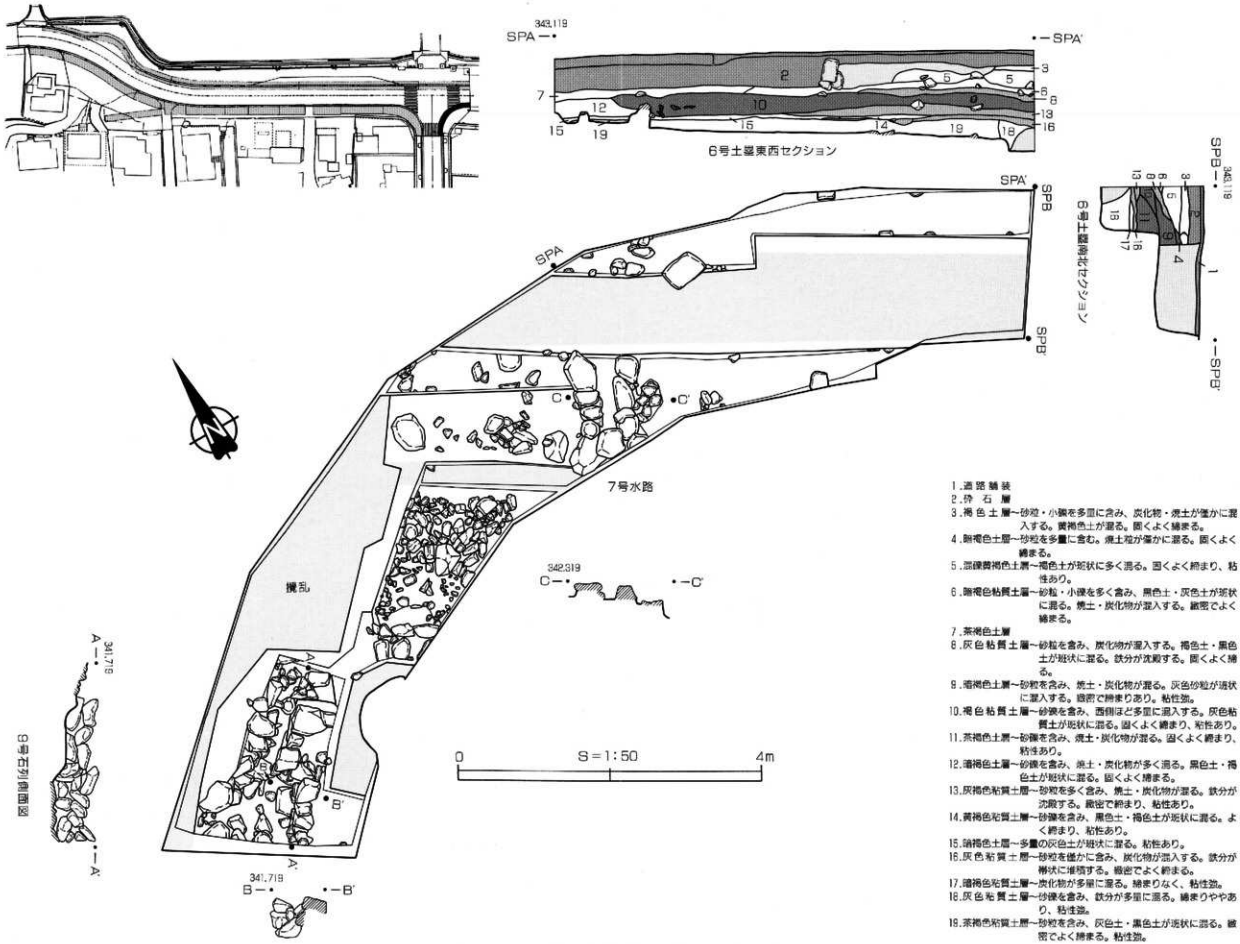


図36　15区全体図(4号・5号集石、盛土層2)



1.道 路 舗 装
2.砕 石 層
3.混褐茶褐色土層～暗褐色土・黄褐色土が多量に混り、固くよく締まる。
4.茶 褐 色 土 層
5.茶 褐 色 土 層～砂礫を多量に含み、焼土・炭化物が混る。
6.混褐暗黄褐色粘質土層～暗褐色土が斑状に混る。固くよく締まる。
7.黄 色 粘 質 土 層～白色・淡黄色土が斑状に混る。緻密で非常によく締まる。
8.暗黄褐色粘質土層～砂礫を含み、緻密で非常によく締まる。
9.混褐暗黄褐色粘質土層～黒色・褐色・灰色土が斑状に混る。緻密で固くよく締まる。
10.混褐暗褐色土層～多量の礫が混入し、固くよく締まる。
10a.混褐暗褐色土層～礫が多量に混入し、固くよく締まる。
11.混褐明黄褐色粘質土層～白色・淡黄色土が斑状に混る。非常に緻密でよく締まる。
12.暗 黄 褐 色 土～砂礫を多く含み、焼土・炭化物が混る。非常に緻密でよく締まる。
13.混褐明黄褐色粘質土層～白色・淡黄色土が斑状に混る。非常に緻密でよく締まる。
14.混褐暗褐色土層～11層に比べ混入する礫が大きく、やや黒味を帯びた色調となる。
15.暗色粘質土層～焼土・炭化物が混り、黄褐色土が多量に混入する。非常に緻密でよく締まる。
16.明褐色粘質土層～黄褐色土が多量に混る。
17.暗褐色粘質土層～焼土・炭化物を含み、黄褐色土・黒褐色土が混る。締まりやや有り。
18.灰 褐 色 土 層～砂礫を含み、黒褐色土が斑状に混る。緻密でしまり有り。
19.混褐褐色土層～焼土・炭化物を含み、固くよく締まる。
20.暗褐色粘質土層～黄褐色土が斑状に混る。非常に緻密で粘性あり。
21.黒 褐 色 土 層～礫を多く含み、焼土・炭化物が混る。黄褐色土が混入する。

図37　15区全体図（7号・8号石列、盛土層3、埋土層3）



1.道路舗装
2.砕石層
3.褐色土層～砂粒・小礫を多量に含み、炭化粒・焼土が僅かに混入する。黄褐色土が混る。固くよく締まる。
4.暗褐色土層～砂粒を多量に含む。焼土粒が僅かに混る。固くよく締まる。
5.濁褐黄褐色土層～褐色土が斑状に多く混る。固くよく締まり、粘性あり。
6.暗褐色粘質土層～砂粒・小礫を多く含み、黒色土・灰色土が斑状に混る。焼土・炭化物が混入する。緻密でよく締まる。
7.茶褐色土層
8.灰色粘質土層～砂粒を含み、炭化物が混入する。褐色土・黒色土が斑状に混る。鉄分が沈殿する。固くよく締る。
9.暗褐色土層～砂粒を含み、焼土・炭化物が混る。灰色砂粒が斑状に混入する。緻密で締まりあり。粘性弱。
10.褐色粘質土層～砂粒を含み、酉個ほど多量に混入する。灰色粘質土が斑状に混る。固くよく締まり、粘性あり。
11.茶褐色土層～砂礫を含み、焼土・炭化物が混る。固くよく締まり、粘性あり。
12.暗褐色土層～砂礫を含み、焼土・炭化粒が多く混る。黒色土・褐色土が斑状に混る。固くよく締まる。
13.灰褐色粘質土層～砂粒を多く含み、焼土・炭化物が混る。鉄分が沈殿する。緻密で締まり、粘性あり。
14.黄褐色粘質土層～砂礫を含み、黒色土・褐色土が斑状に混る。よく締まり、粘性あり。
15.暗褐色土層～多量の灰白土が斑状に混る。粘性あり。
16.灰色粘質土層～砂粒を僅かに含み、炭化物が混入する。鉄分が帯状に堆積する。緻密でよく締まる。
17.暗褐色粘質土層～炭化物が多量に混る。締まりなく、粘性弱。
18.灰色粘質土層～砂礫を含み、鉄分が多量に混る。締まりややあり、粘性弱。
19.茶褐色粘質土層～砂粒を含み、灰白土・黒色土が斑状に混る。緻密でよく締まる。粘性弱。

図38　17区全体図（6号土壇、7号水路、9号石列）

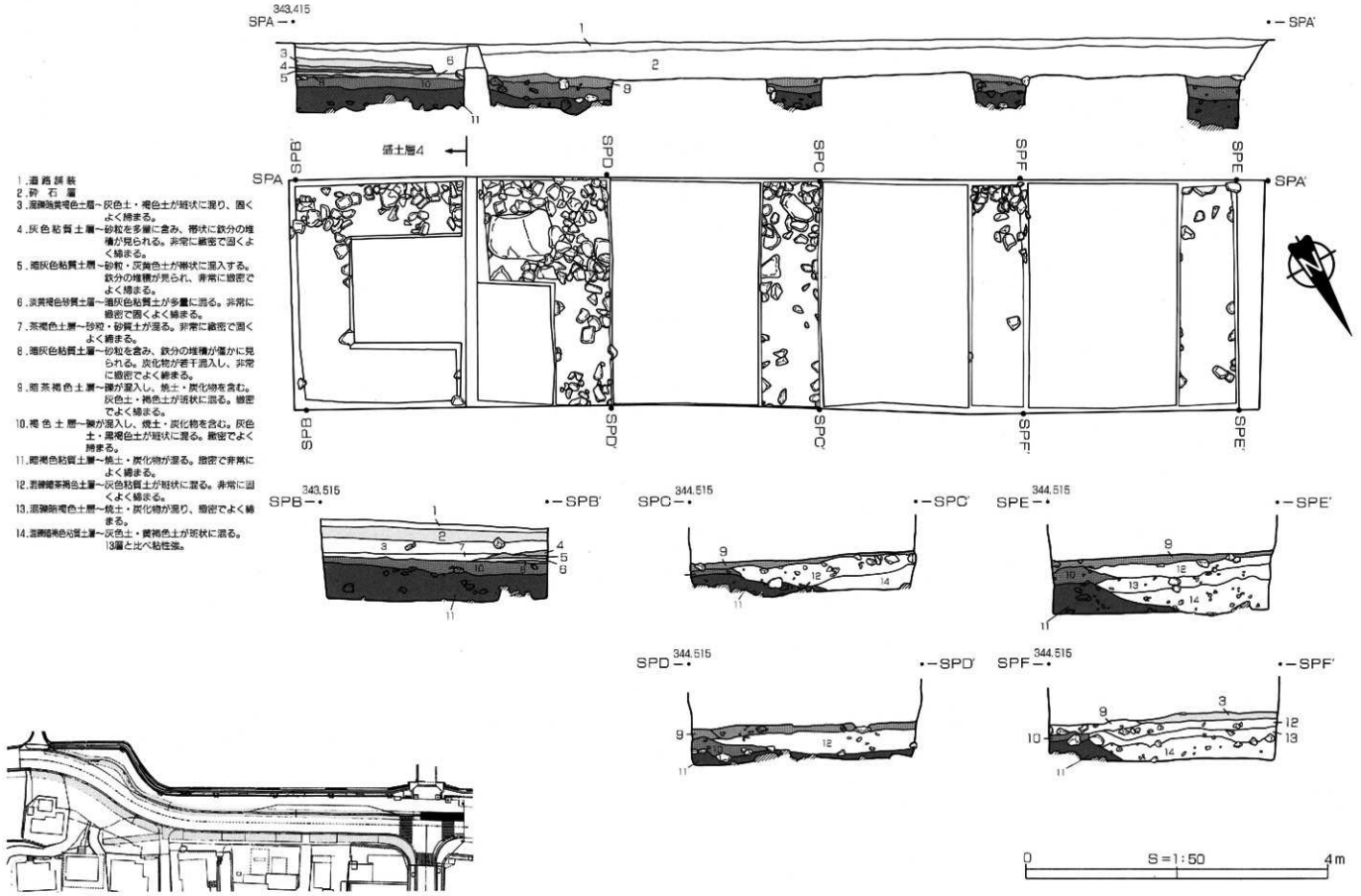


図39　18区全体図（盛土層4）

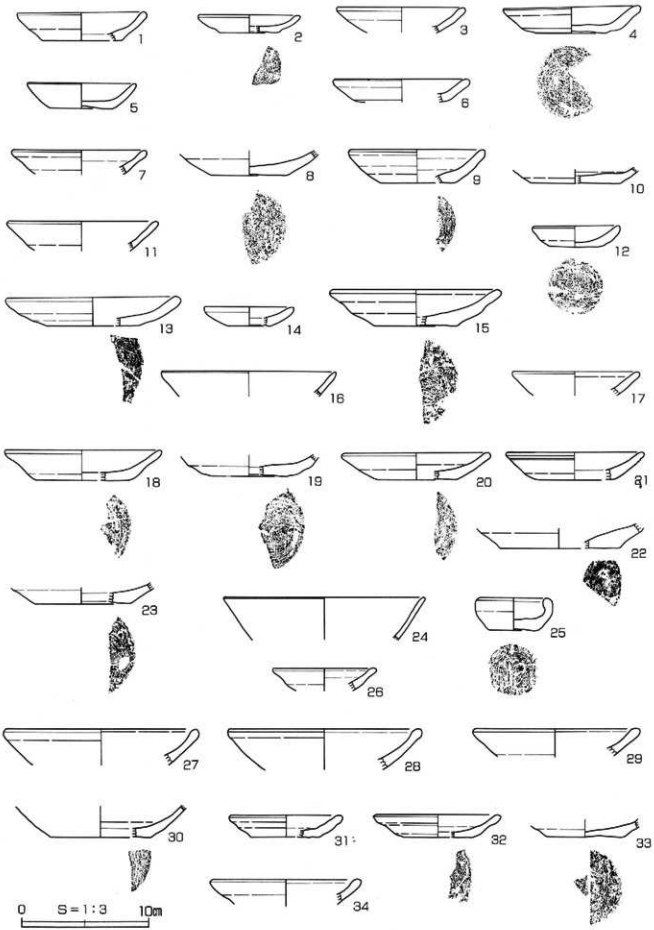


図40 第55次調査出土遺物(1)

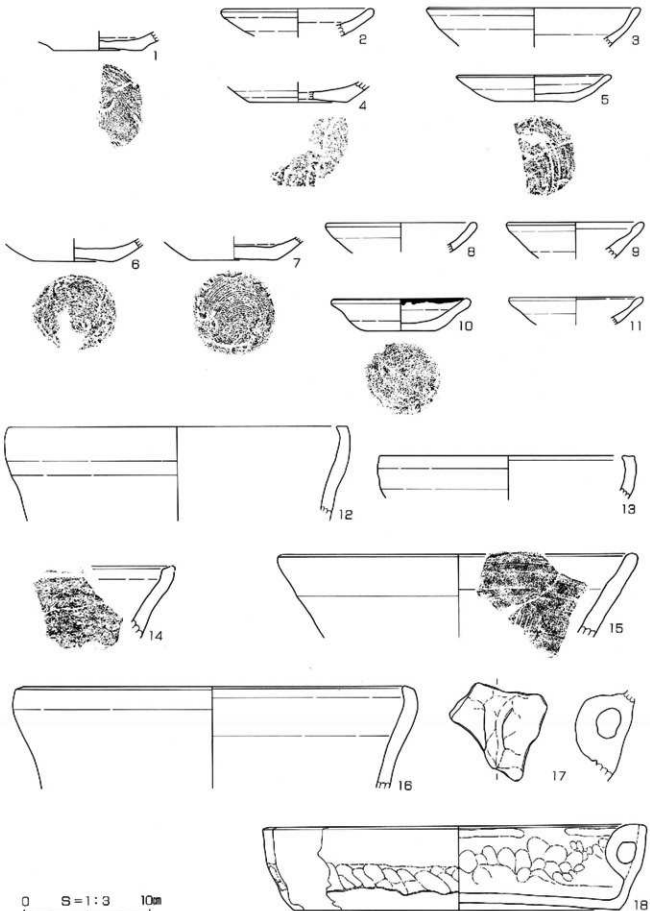


図41 第55次調査出土遺物(2)

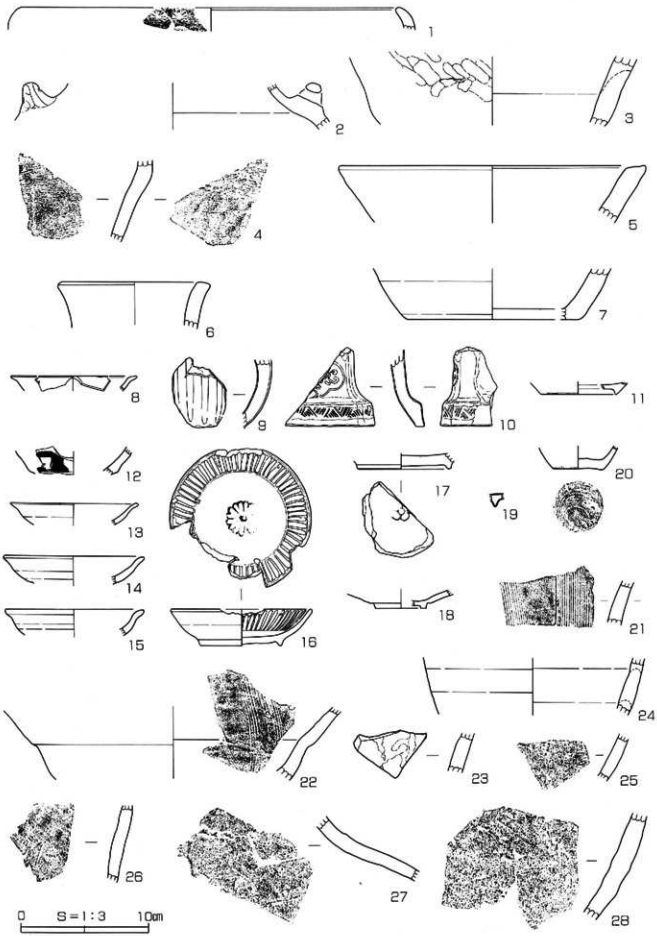


図42 第55次調査出土遺物(3)

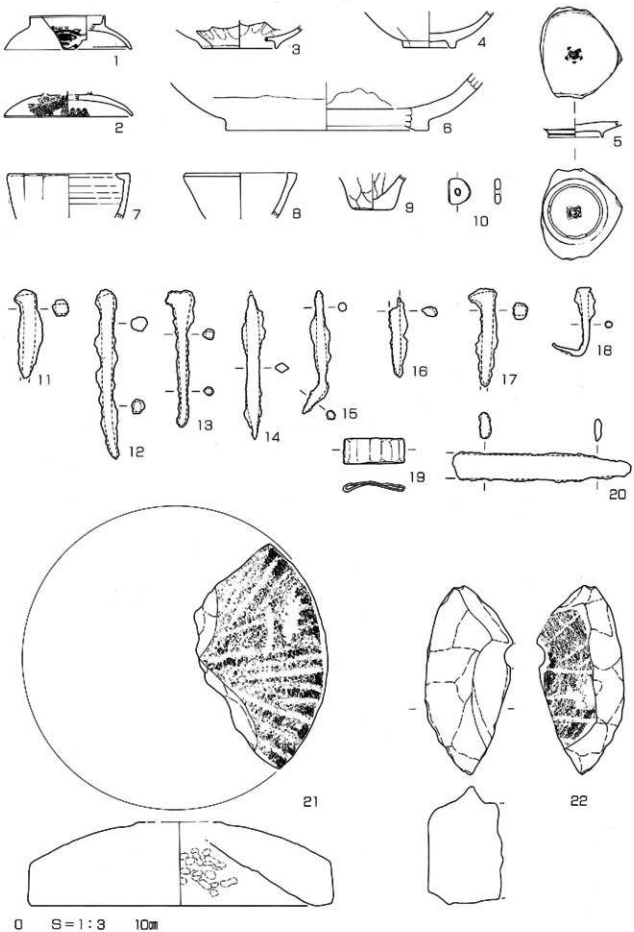


図43 第55次調査出土遺物(4)

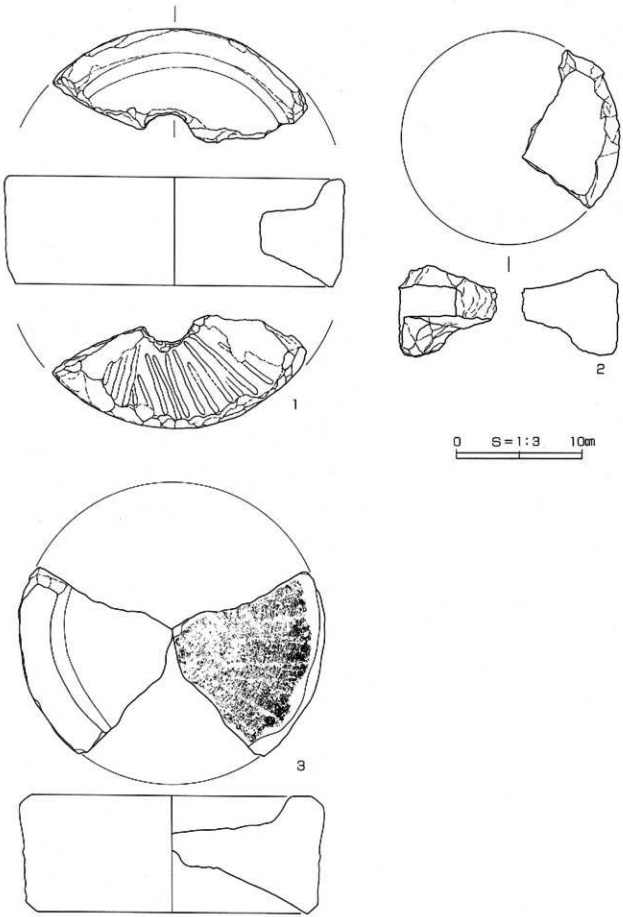


図44 第55次調査出土遺物(5)

表3　〈第55次調査出土遺物一覧〉　（　）は推定値

図	番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整	胎土	焼成	色調 内面・外面	備考
40	1	2区 2号水路	土器	かわらけ	(10.2)・(2.2)・(6.3)	口縁～底部片	内外面 ロクロ成形	やや密 石英・長石 金色雲母	良	鈍い褐	
〃	2	2区 2号水路	土器	かわらけ	(8.1)・(2.0)・(4.6)	口縁～底部片	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 石英・長石・雲母 金色雲母・赤粒	良	橙	
〃	3	2区 2号水路	土器	かわらけ	(10.0)・——・——	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 石英・長石・ 金色雲母・赤粒	良	橙	
〃	4	3区 3号水路	土器	かわらけ	10.7・2.0・5.5	口縁～底部	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 長石・金色雲母 赤粒	良	赤褐	第40図 6番と同一個体？
〃	5	3区 3号水路	土器	かわらけ	8.6・2.0・5.0	口縁～底部	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 長石・金色雲母 赤粒	良	鈍い黄橙	
〃	6	3区 3号水路	土器	かわらけ	(10.7)・——・——	口縁～底部	内外面 ロクロ成形	やや密 長石・石英 金色雲母・赤粒	良	橙	第40図 4番と同一個体？
〃	7	3区 1号土壇	土器	かわらけ	(10.7)・——・——	口縁～底部	内外面 ロクロ成形	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	内面 鈍い黄橙 外面 明赤褐	
〃	8	8区 2号土坑基底部	土器	かわらけ	——・——・(6.0)	体部～底部	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	橙	表面やや摩耗
〃	9	14区 5号土壇基底部	土器	かわらけ	(10.8)・(2.6)・(6.0)	口縁～底部片	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 長石・金色雲母 赤・黒粒	不良	橙	
〃	10	14区 5号土壇基底部	土器	かわらけ	——・——・(7.0)	底部片	内外面 ロクロ成形	やや密 長石・金色雲母 赤・黒粒	良好	橙	
〃	11	14区 5号土壇基底部	土器	かわらけ	(12.0)・——・——	口縁部片	内外面 ロクロ成形	やや密 長石・金色雲母 赤・黒粒	良好	橙	
〃	12	2区 盛土層1	土器	かわらけ	6.6・1.6・4.4	完形	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り？	やや密 長石・金色雲母	良	明褐	
〃	13	2区 盛土層1	土器	かわらけ	(13.3)・(2.2)・(7.2)	口縁～底部片	内外面 ロクロ成形	やや密 石英・長石	良	橙	底部摩耗
〃	14	18区 盛土層4	土器	かわらけ	(7.0)・——・——	口縁～底部片	内外面 ロクロ成形	やや密 石英・長石・雲母 金色雲母・赤粒	良	橙	
〃	15	18区 盛土層4	土器	かわらけ	(12.9)・(2.9)・(6.4)	口縁～底部片	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	橙	
〃	16	1区 Tr-4	土器	かわらけ	(13.8)・——・——	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 石英・長石 雲母・金色雲母	良	鈍い黄橙	
〃	17	2区	土器	かわらけ	(9.6)・——・——	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 石英・長石 金色雲母	良	明赤褐	
〃	18	2区	土器	かわらけ	(12.3)・(2.4)・(7.4)	口縁～底部片	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 石英・長石・金色雲母 赤・黒粒	良	明赤褐	
〃	19	2区	土器	かわらけ	——・——・(7.4)	体部～底部片	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 石英・長石 金色雲母・黒粒	良	橙	
〃	20	3区 Tr-5	土器	かわらけ	(11.2)・(2.1)・(6.4)	口縁～底部片	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	赤褐	
〃	21	3区	土器	かわらけ	(10.4)・(2.2)・(6.0)	口縁～底部片	内外面 ロクロ成形	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	鈍い黄橙に 明赤褐が混ざる	
〃	22	5区	土器	かわらけ	——・——・(9.4)	体部～底部片	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 石英・長石 金色雲母	良	橙	
〃	23	6区	土器	かわらけ	——・——・(7.6)	体部～底部片	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 石英・長石 金色雲母	良	赤褐	
〃	24	7区	土器	かわらけ	(15.8)・——・——	口縁～体部	内外面 ロクロ成形	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	橙	
〃	25	7区	土器	かわらけ	(5.0)・(2.6)・(3.7)	口縁～底部	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	明赤褐	口縁部 ゆがみあり
〃	26	7区 Tr-1	土器	かわらけ	(8.0)・——・——	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 石英・長石・赤粒 金色雲母	良	鈍い褐	
〃	27	9区	土器	かわらけ	(15.0)・——・——	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 金色雲母・砂粒 赤・黒粒	良好	橙	

( )は推定値

図	番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm) 口径・器高・底径	部位	調整	胎土	焼成	色調 内面・外面	備考
40	28	9区	土器	かわらけ	(15.0)・—・—	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 金色雲母・砂粒 赤・黒粒	良好	橙	
〃	29	11区	土器	かわらけ	(13.0)・—・—	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 金色雲母・砂粒 赤・黒粒	良好	橙	
〃	30	11区	土器	かわらけ	—・—・(8.0)	体部～底部片	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 金色雲母	良好	橙	
〃	31	12区	土器	かわらけ	(8.0)・(1.7)・(5.4)	口縁～底部片	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 金色雲母・砂粒 赤・黒粒	良好	橙	
〃	32	13区 Tr-5	土器	かわらけ	(10.0)・(1.8)・(6.0)	口縁～底部片	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 長石・金色雲母 赤・黒粒	良好	内面 黄灰 外面 橙	
〃	33	13区 Tr-4	土器	かわらけ	—・—・(6.0)	底部	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 長石・金色雲母 赤・黒粒	良好	橙	
〃	34	13区 Tr-4	土器	かわらけ	(11.0)・—・—	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 金色雲母 赤・黒粒	良好	橙	
41	1	13区 Tr-4	土器	かわらけ	—・—・(7.0)	底部	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 金色雲母	良好	橙	
〃	2	14区 Tr-7	土器	かわらけ	(12.0)・—・—	口縁部片	内外面 ロクロ成形	やや密 長石・金色雲母	不良	橙	
〃	3	14区 Tr-7	土器	かわらけ	(16.7)・—・—	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 金色雲母 長石・石英・赤粒	良	橙	
〃	4	14区	土器	かわらけ	—・—・(7.9)	底部	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	橙	
〃	5	15区 Tr-16	土器	かわらけ	(11.8)・(2.1)・(6.0)	口縁～底部	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	橙	
〃	6	15区 Tr-16	土器	かわらけ	—・—・6.0	底部	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	鈍い黄褐	
〃	7	15区 Tr-16	土器	かわらけ	—・—・7.0	底部	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り	やや密 長石・金色雲母 赤・黒粒	良好	鈍い褐	
〃	8	15区 Tr-16	土器	かわらけ	(11.0)・—・—	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 長石・金色雲母 赤・黒粒	良好	橙	
〃	9	15区 Tr-16	土器	かわらけ	(11.0)・—・—	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 長石・金色雲母 赤・黒粒	良好	明赤褐	
〃	10	18区 Tr-3	土器	かわらけ	10.4・2.5・5.8	口縁～底部	内外面 ロクロ成形 底部 回転糸切り？	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	橙	タール付着
〃	11	18区 Tr-1	土器	かわらけ	(10.4)・—・—	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 石英・長石・雲母 金色雲母・赤粒	良	橙	
〃	12	2区 2号水路	土器	擂鉢	(17.0)・—・—	口縁～体部	内外面 ナデ整形	やや密 長石・石英・雲母	良	灰黄褐	
〃	13	2区	土器	火鉢	(20.0)・—・—	口縁部	内外面 ナデ整形	やや密 砂粒	不良	内面 黒褐 外面 鈍い黄褐	
〃	14	18区 盛土層4	土器	擂鉢	—・—・—	口縁部	内外面 ナデ整形	やや粗い 石英・長石 金色雲母・赤粒	良	鈍い橙	
〃	15	3区 Tr-5	土器	擂鉢	(27.4)・—・—	口縁～体部		やや密 金雲母 長石・石英・赤粒	良	明赤褐	
〃	16	3区	土器	火鉢	(30.1)・—・—	口縁～体部	内外面 ナデ整形	やや密 金色雲母・雲母 長石・石英・赤粒	良	内面 灰オリーブ 外面 オリーブ黒	
〃	17	6区	土器	内耳	—・—・—	耳部	内外面 ナデ整形	やや密 石英・長石 雲母	良	鈍い橙	
〃	18	7区 Tr-1	土器	焙烙	29.5・6.6・25.8	口縁～底部	内外面 ナデ整形 外面 砂痕・内耳をもつ 外面 スス付着・指頭痕	やや密 長石・石英・雲母	良	黒褐	口縁部 3本のきざみあり
42	1	7区	土器	火鉢	(29.3)・—・—	口縁部片	内外面 ロクロ成形	やや密 金色雲母・雲母 長石・赤粒	良	明赤褐	
〃	2	7区	土器	土釜	—・—・—	肩部	内外面 ナデ整形	やや密 金色雲母・雲母 長石・赤粒	良	橙	耳付 (使用痕あり)

( )は推定値

図	番号	出土位置	種別	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整	胎土	焼成	色調 内面・外面	備考
42	3	13区 Tr-1	土器	擂鉢?	——・——・——	体部	内外面 ハケナデ整形	やや密 長石 赤・黒粒	不良	内面 灰褐 外面 浅黄橙	内面一部、外面全体二次被熱を受けている
〃	4	13区	土器	火鉢?	——・——・——	体部	内外面 ナデ整形	密 長石	良好	内面 暗褐 外面 灰	
〃	5	14区 Tr-9	土器	擂鉢?	(24.0)・——・——	口縁部	内外面 ナデ整形	やや密 長石 赤・黒粒	良好	内面 鈍い黄褐 外面 赤褐	近世?
〃	6	15区 Tr-1	土器	鉢	(12.0)・——・——	口縁部	内外面 ロクロ成形	やや密 金色雲母・長石 赤粒・砂粒	良好	鈍い黄褐	近世?
〃	7	15区	土器	火鉢	——・——・(14.0)	体部 ～底部片	内外面 ナデ整形	やや密 長石・金雲母 赤・黒粒	不良	内面 灰 外面 褐	底部近く二次被熱
〃	8	2区 1号水路	中国磁器 染付	皿	(10.0)・——・——	口縁部		密	良好		内外口縁部 界線 外面胴部 唐草文か
〃	9	3区 3号水路	中国磁器 青磁	酒海壺	——・——・——	胴部		緻密	良好		
〃	10	3区 1号石列際	中国磁器 青磁	不明 (花瓶?)	——・——・——	脚部		緻密	良好		
〃	11	7区	中国磁器 白磁	皿	——・——・(5.8)	底部片		緻密	良好		
〃	12	2区	国産陶器 瀬戸美濃	天目茶碗	——・——・——	体部	鉄釉 体部下半露胎	密	良	内面 暗褐 外面 黒	古瀬戸 後III～IV期
〃	13	18区 Tr-3	国産陶器 瀬戸美濃	端反皿	(10.0)・——・——	口縁部	灰釉	密 石英	良	釉 灰オリーブ	大窯1
〃	14	15区 Tr-1	国産陶器 瀬戸美濃	端反皿	(11.0)・——・——	口縁部	灰釉	密	良好	釉 浅黄	大窯1
〃	15	14区 Tr-10	国産陶器 瀬戸美濃	端反皿	(11.0)・——・——	口縁部	灰釉	密	良好	釉 灰白	大窯1
〃	16	3区 1号石列際	国産陶器 瀬戸美濃	丸皿	11.0・2.9・6.3	口縁 ～底部	内面 丸ノミ状工具によるツギ 灰釉 内面印花文	やや密	良	釉 オリーブ黄	大窯2 輪トチ痕あり
〃	17	14区 5号土塁基底部	国産陶器 瀬戸美濃	皿	——・——・8.0	底部	灰釉 内面印花文	密	良好	釉 鈍い黄	大窯1～2 付高台
〃	18	10区 Tr-3	国産陶器 瀬戸美濃	平碗	——・——・(4.0)	体部 ～底部	鉄釉 (全面施釉)	密	良好	内面 黒 外面 暗褐	大窯1
〃	19	2区 2号水路	国産陶器 瀬戸美濃	皿	——・——・——	底部片	灰釉 (全面施釉)	密	良	釉 オリーブ黄	大窯1～2 付高台
〃	20	8区 2号土塁基底部	国産陶器 瀬戸美濃	茶入	——・——・4.0	底部	底部 回転糸切り	密	良好	釉 黒	
〃	21	6区	国産陶器 瀬戸美濃	擂鉢	——・——・——	体部	錆釉	密	良	暗灰	大窯2～3
〃	22	3区 1号石列際	国産陶器 瀬戸美濃	擂鉢	——・——・——	体部	錆釉	密	良好	褐灰	大窯1～2
〃	23	13区 Tr-5	国産陶器 瀬戸美濃	四耳壺?	——・——・——	胴部	内面 ナデ整形	密	良	釉 灰オリーブ	古瀬戸前期
〃	24	3区 3号水路	国産陶器 瀬戸美濃	瓶子?	——・——・——	胴部	輪積後 ロクロ成形	密 石英	良好	内面 極暗赤褐 外面 オリーブ褐	古瀬戸 中期I～II
〃	25	2区	国産陶器 常滑	甕	——・——・——	胴部	内面 ナデ整形	密	良好	内面 褐灰 外面 黒	自然釉
〃	26	3号土塁	国産陶器 常滑	甕	——・——・——	胴部	内外面 ナデ整形	密 長石	良	内面 灰 外面 灰褐	
〃	27	15区 Tr-3	国産陶器 常滑	甕	——・——・——	肩部	内外面 ナデ整形	密 砂粒	良	内面 黒褐 外面 明赤褐	
〃	28	14区 Tr-7	国産陶器 常滑	甕	——・——・——	胴部	内外面 ナデ整形	密 石英・長石	良	鈍い褐	
43	1	6区 Tr-3	国産磁器 肥前	碗蓋	(6.0)・——・——	蓋	染付 覆付無釉	密	良		広東碗蓋 18C前半

( )は推定値

図	番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm) 口径・器高・底径	部位	調整	胎土	焼成	色調 内面・外面	備考
43	2	5区 攪乱	国産施釉	碗蓋	(10.0)・——・——	蓋	染付 型紙摺	密	良		18C後半
〃	3	6区 Tr-1	国産施釉	皿	——・——・(6.0)	体部～底部片	型打成形 灰釉 蛇目無釉	密	良	釉 明オリーブ灰	蛇目 17C
〃	4	6区	国産陶器 瀬戸・美濃	碗	——・——・4.0	体部～底部	長石釉と鉄釉の掛ケ分け	密	良	釉 柿褐 灰オリーブ	17C中期
〃	5	6区	国産施釉 肥前	皿	——・——・4.4	底部	染付・底裏銘「福」 見込コンニャク判五弁花文	密	良		18C前半 被熱
〃	6	4区 4号水路	国産陶器 瀬戸美濃	鉢	——・——・16.0	体部～底部片	灰釉	密	良	釉 浅黄	17C後半 ～18C前半
〃	7	6区 Tr-1(東)	国産施器	香炉	(9.6)・——・——	口縁～体部	灰釉	密	良	釉 明緑灰	17C
〃	8	6区	国産陶器 瀬戸美濃	小鉢	(8.6)・——・——	口縁～体部	灰釉	密	良	釉 明黄褐	17C後半
〃	9	13区 Tr-13	土器	・・・	・・・・・(3.0)	体部～底部	内外面 ナデ整形	やや密 長石・雲母・黒粒	良好	明赤褐	
〃	10	6区	土製品	——	——・——・——	——		やや密 長石・金色雲母 赤粒	良	橙	孔2㎜
〃	11	1区 Tr-5	金属製品	釘	長さ 幅 厚さ 6.9・1.3・1.2						先端欠損 鉄製
〃	12	5区	金属製品	釘	長さ 幅 厚さ 13.3・1.2・1.1						鉄製
〃	13	5区	金属製品	釘	長さ 幅 厚さ 10.6・0.9・0.7						鉄製
〃	14	5区 攪乱	金属製品	釘?	長さ 幅 厚さ 11.3・1.1・0.8						鉄製
〃	15	5区 攪乱	金属製品	釘	長さ 幅 厚さ 9.3・1.1・1.3						鉄製
〃	16	5区 攪乱	金属製品	釘?	長さ 幅 厚さ 6.3・0.8・0.9						一部欠損 鉄製
〃	17	6区	金属製品	釘	長さ 幅 厚さ 7.7・1.1・1.2						頭部に曲げ 先端欠損 鉄製
〃	18	14区 Tr-3	金属製品	釘	長さ 幅 厚さ 5.4・0.6・0.5						鉄製
〃	19	15区 Tr-15	金属製品		長さ 幅 厚さ 4.8・2.0・0.6						銅製か
〃	20	17区 Tr-1	金属製品	刀子	長さ 幅 厚さ 14.2・1.9・0.9						一部欠損 鉄製
〃	21	5区	石製品	石臼	——・——・(32.0)	下臼					
〃	22	5区	石製品	石臼	・・・・・・・・・	上臼					
44	1	13区	石製品	石臼	——・(11.4)・(36.4)	上臼					軸挿孔直径 約(5.6)cm
〃	2	7区	石製品	石臼	——・——・(23.0)						脚付
〃	3	13区	石製品	石臼	——・——・(32.0)	上臼					

第４章　調査の成果と課題

第１節　地籍図との照合・検討

現在、甲府市役所所蔵の地籍図を検討すると、大正10年以降、その姿を消した西曲輪南虎口前の馬出土塁や県道の直線化に伴って埋め立てられた梅翁曲輪の堀などを、ある程度読み取ることができ、復元が可能である。更に、道・水路は赤・青色により彩色されており、動線・用水系の推定も可能となる。現在、館跡前の堀に沿って東西方向に通る県道部分はバスの乗降場・観光客の駐車場部分をも含めると幅15ｍ、西曲輪の前に至っては幅30ｍを測る広い空間が存在している。こうした空間の復元は現在の状況からはまったく不可能であるが、調査地周辺現況図と地籍図とを照合すると、おぼろげながら館の前方空間が浮かび上がってくる。

今回の報告に際し、周辺現況図と地籍図を照合し、復元・比定作業を試みる。なお、作業に際して用いた現況図は昭和60年測量の「史跡武田氏館跡指定地現況図」(縮尺1/1,000)と甲府市役所が所蔵する地籍図(縮尺1/600)である。両者をそれぞれ縮尺1/1,200に統一して照合した。使用する字梅翁・大手下の地籍図には昭和23年複写と記されているのみで作成時期が不明である。ただ明治36年作成と記される地籍図もあり、明治期に作成されたものを基調とし、以後加筆・修正が行われていると考えられる。作業は現況図と地籍図の水路・道・地割線など、照合可能な部分を基準にして比定した。細部において厳密な精度を保っているか不安ではあるが、全体の様相を検討する上では有効となろう(図45)。

地籍図から読み取れる西曲輪南虎口前の馬出土塁や梅翁曲輪の土塁と堀、更に道・水路を表示し(図46)、検討する。梅翁曲輪の土塁と堀は現在でも西側部分が残っており、地籍図上において既に県道により埋め立てられた部分を復元するには問題はない。また現在、確認できない西曲輪南虎口前の馬出土塁は地籍図により明瞭に確認することができる。

県道を境に東側は字大手下、西側は字梅翁に分かれるが、字梅翁における地割線は街路と軸線を同じくし、方形を基調とする整然とした区画をなしている。一方、字大手下部分には周辺地割と異なる不整形な区画が存在し、更に街路の軸線と異なる地割線ａ・ｂ等が認められる。すでに武田氏時代からの城下町の軸線は、依然として現在の街路に踏襲されていることが明らかになっているため、磁北から約20°東に振れる街路・地割線等は戦国城下町の街路プランを踏襲したものだと判断できる。それとは異なり磁北から東へ約30°振れる地割線ａ・ｂ等は戦国城下町の街路プランとは一致せず、むしろ扇状地の傾斜方向と一致している。第54次調査において検出された磁北から東へ大きく振れる８～10号溝や地割線ａ・ｂなどに見られる自然地形に規制されたものが館造営以前の軸線となり、城下町建設後においても部分的に存在したのかも知れない。更にはそうした自然地形に規制された地割線が存在する間に確認できる区画Ａ・Ｂ等は、発掘調査による成果が蓄積されていない現状では、やや安易ではあるが古絵図等の記載から家臣団屋敷等に推定されよう。その上で依然として、自然地形に規制された地割線が存在していることを考慮すると、町割施行により、整然とした区画が並ぶ様相は推測できず、館を中心としつつ散居的な分布をなしていたのであろう。

次に、地籍図には道が描かれている。発掘調査に関わる範囲においてもほぼＣ～Ｇ地点、さらに西曲輪の虎口前までその動線を確認している。描かれている道には所々でクランク状に屈曲を持っていることが理解でき、調査範囲においてもＤ・Ｆ地点にそうした形状を指摘できる。Ｄ地点には各種古絵図により描かれ方に違いはあるが、土塁と堀を駆使した

図45　現況・地籍図照合図（S＝1：1,200）

図46　武田氏館跡地籍図（字梅翁・大手下）

虎口空間が存在していたと理解でき、E地点も地籍図から梅翁曲輪の土塁として復元した。おそらく虎口空間を形成する土塁として機能していたのであろう。第55次調査において、6号土塁として認識したのは地籍図のC地点に相当する。地籍図ではこの部分に水路と道に挟まれた南北6～9m、東西72mに及ぶ細長い区画が存在する。極めて狭い範囲の確認であったためやや不安を残すが、土塁として復元した。すでに地籍図上で土塁として復元したE地点においても、幅5.20mを測る1号土塁が確認され、土塁裾部分の東西両側には石積による幅約78～86cm、深さ64～74cmを測る2・3号水路を確認した。地籍図上では幅8mとして土塁が復元されたが、この数値は発掘調査により検出した2号水路の東側石積から3号水路の西側石積まで、すなわち土塁とともに水路幅をも含めた長さにほぼ一致することが判明した。

さらにF地点も同様に各種古絵図によれば、土塁が駆使された馬出土塁が描かれている。現在でも、この地点は梅翁曲輪内に通じる通路として機能しており、あるいはこの地点にも虎口空間が想定できるかもしれない。第55次調査では、この部分に2～5号土塁が検出された。2号土塁は折れを持ち、3・5号土塁は喰い違いとなろう。特に地籍図で確認できる動線の屈曲部分は、検出された2号土塁の折れに規制されたような一致した形態をとる。おそらくこの地点は地籍図の動線がそうであるように、一つは梅翁曲輪内から通じる通路が、もう一つは梅翁曲輪の東側堀際を通って侵入する二つの通路が交わる空間となるのではないだろうか。

最後にG地点を見てみる。地籍図からはこの部分に西曲輪南虎口前の馬出土塁が復元でき、動線が屈曲している。おそらくこの土塁の存在に規制されて道が曲がったものであろうが、復元した馬出土塁の東側部分とそれに対応する西側部分の南北距離を地籍図上で測ると、僅かではあるが東側土塁が短くなっている。第55次調査では、この部分に6号水路と5号石列からなるL字状の区画が確認され、全体図からは4号土塁の東側裾部分と5号石列が一致する。あるいはこのL字状の区画を4号土塁として解釈できるかもしれない。

以上、地籍図を基に発掘調査により得られた情報を加味して検討してきた。もとより部分的な調査の上に多くの推量を重ねており、単に状況が一致しただけの可能性もあるため、誤信を冒しているやも知れない。特に今回の復元に際して、多くの部分で動線に依拠して推量を加えてきたが、もとよりこの動線は明治期までしかその存在が確認できないため、中世まで遡らせることに大きな躊躇を感じる。それでもなお地籍図には館跡及び城下町等の様相を今日まで、幾分か伝えていることを知り得る。

第2節　発掘調査の成果

(1) 第54次調査

第54次調査地からは井戸跡・集石墓坑・溝跡・土坑・ピットなど多くの遺構が確認されたが、残念ながら井戸跡・集石墓坑を除き、その他の遺構の性格・用途など具体像を明らかにすることはできなかった。そうした中で町割施行と関わる成果が得られたことは大きかった。検出した溝跡には磁北から約30°東に振れた軸線をもつ2・5号溝とそれにほぼ直行する軸をもつ1・3号溝、その一方で、磁北から東へ約40～60°振れる8・9・10号溝等がある。特に9号溝には2時期の変遷が確認されており、素掘りの溝から側面に石を並べた石組みの溝へと変遷している。出土遺物には小片となったかわらけと底部内面に印花文が押され、大窯1～2期段階に位置づけられる瀬戸美濃灰釉皿の底部片がある。遺物の絶対量が少ない現状ではやや心もとないが、近世期以降の遺物が確認できないこと、灰釉皿が石組溝覆土中からの出土であることなど、館造営以後、16世紀中頃には溝としての機能

を依然として持っていたと考えられる。

先行業績では、館を基軸として南北５本の主要街路が二町間隔に並び、館と城下町の街路プランが一体的に設計されていることから、府中移転の当初からすでに基本的な街路の設計がなされていたとされる(数野1990、94)。検出された磁北から約30°東に振れるものは戦国城下町の街路プランに規制されたものだと推測するが、９号溝など磁北から大きく振れるものについては地形に規制されたものと判断できる。その上で、変遷を遂げつつ16世紀中頃においても街路プランに規制されず機能し続けている点は注意すべきである。

(2) 第55次調査

第55次調査における最大の成果は、水道管敷設により攪乱を受けた部分が存在するものの、依然として遺構が良好な状態で残っていることが確認できたことである。遺構の有無確認を第一義として調査を進めたため、確認した遺構にはその性格、範囲について判然としない部分がある。

そうした中でも、確認した遺構の軸線からは特徴的な傾向が窺えた。遺構軸線は、大きく２つ、東へ約30°振れるものと西へ約60°振れるものとに分けられる(表４・図47)。館の土塁・堀に規制され、直交する軸線となっているのは明らかである。20例中、用水路として機能し、県道拡幅によって埋め立てられたことが明らかな９号石列以外は、戦国期に位置づけられよう。特に、西へ振れる（東西方向にわたる）ものに比べ、東へ振れた（南北方向にわたる）ものに若干バラツキが多く見られる。２号石列と３号土塁は一見して、他と異なる軸線をもつ。調査による確認を経ていないため多くを語れないが、数値上、両者は直交することになる。南北軸に対し、東西軸をもつものに比較的バラツキが少ないのは、館の南辺、東西方向にわたる土塁・堀により強く規制された結果であろう。

表４　検出遺構方位軸

番号	遺構名	方　位	番号	遺構名	方　位
1	１号水路	N－60°－W	11	５号土塁	N－34°－E
2	２号水路	N－30°－E	12	１号石列	N－61°－W
3	３号水路	N－30°－E	13	２号石列	N－70°－W
4	４号水路	N－63°－W	14	３号石列	N－62°－W
5	６号水路	N－59°－W	15	４号石列	N－33°－E
6	７号水路	N－29°－E	16	５号石列	N－32°－E
7	１号土塁	N－30°－E	17	６号石列	N－26°－E
8	２号土塁	N－29°－E	18	７号石列	N－29°－E
9	３号土塁	N－18°－E	19	８号石列	N－29°－E
10	４号土塁	N－22°－E	20	９号石列	N－44°－W

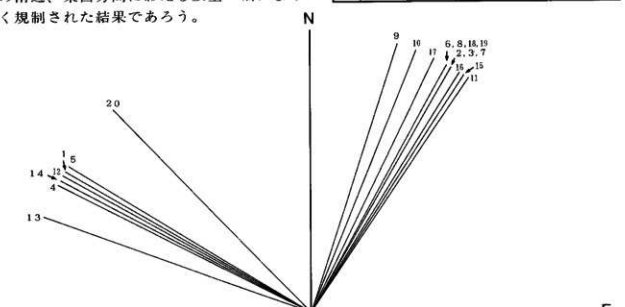


図47　遺　構　軸（番号は表4と対応する）

調査により１～３号水路、１・６号土塁、１号石列等が集中して検出された地点がある。以下、調査から得られた、特徴を拾い出してみる。

①東西方向に走る１号水路は長さ21ｍに渡り南北両側を石積とした水路で、北側３段積みで高さ72㎝、南側は２段積みで高さ47㎝となり北側が高く普請されている。

②また水路南側の根石に比べ北側の根石には大きな礫が据えられている。

③２区、調査区北壁には、土層堆積に粘質土と砂粒との互層になる箇所が確認できる。

④２号水路は大きく段差を生じ、流下する構造となっている。

北側に対する普請に意を注いでいることが理解でき、明らかに一段高い地形を復元することができる。また幅5.20ｍを測る１号土塁を挟んで西側からは、東西方向にわたる１号石列を検出している。調査終了後の工事立ち会いに際して、この石列は更に西側に約２ｍ延長することが確認された。これに対応するように、堀側の15区では黄褐色粘質土による盛土層２・３が確認されている。堀側の15区では相対的に遺構確認面が高くなっていることなどを勘案すれば、１号水路北側の石積及び１号石列を境にそれから主郭の堀側にかけては盛土により高い地形を造り出していると考えられる。

これに対して東側、17区として調査した地点からは６号土塁を確認している。極めて狭い範囲の確認であったが、前述した地籍図からの検討により土塁として認識した。幅６～９ｍに復元でき、１号水路北側に推定した盛土層１とは位置的に若干喰い違いとなる。１号水路・盛土層１及び６号土塁との間を虎口として推定する（図48）。状況証拠からそうした推定を導くに至ったが、単に普請に関わる痕跡のみで、具体的に虎口空間として認識できる遺構、あるいは城門等の作事の痕跡を捉えていないため、依然として多くの課題を内包している。なお、想定図では各遺構の幅・長さ・高さ・深さ等について抽象して作図した。また、１号水路と２号水路との関係及び３号水路と１号石列との関係についても重複する状況は確認できなかったため、同時存在として認識した。

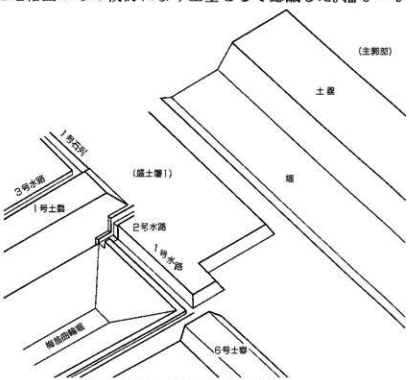


図48　復元想定図(1)

同様に、２～５号土塁、１号堀、２・５号石列、２号集石、６号水路、道路状遺構等が集中し、検出された地点も複雑な様相を示す。各遺構の状況について確認しておく。

①２号土塁は７・８区から南北方向に検出された。幅5.50ｍを測り、石積が確認されるが、ずれを生じるため折れをもつと推定される。（図26）

②３号土塁は９区から南北方向に検出され、幅2.45ｍを測り、東西両側には石積が確認されている。東側に比べ西側石積には大きな礫が使われ、補強のためであろうか、その前面には間層を入れずに、更にもう一列石積を施している。（図27）

③４号土塁は11区から南北方向に検出され、幅2.80ｍ、高さ1.30ｍ程を測る（図28）。地籍図から復元された馬出土塁に相当しよう。

④10区から検出した2号石列は、東西方向に僅か2.60mのみの確認であったが、地籍図の検討から、方向を変え4号土塁がこの部分へ延びていると考えられる。
⑤5号土塁は13区から南北方向に検出された。幅3.50mを測り、東西両側には石積が確認されている。3号土塁同様、東側石積に比べ西側石積には補強のためであろうか、その前面には間層を入れずに、更にもう一列石積を施している。(図33)
⑥3・5号土塁は幅が異なり、1.50m程喰い違うため、個々の土塁として認識できる。調査で確認までに至らないが、更に推定される点が2点程あった。
①5号水路と6号石列からなるL字状の区画も4号土塁として推定できる。
②埋土層2とした5号土塁の西側に広がる礫群には北から南側にかけて傾斜して堆積する様子が確認でき、土層堆積でも北から南への堆積、そして東から西側にかけて傾斜する状況を確認した。この部分、全体図では1号堀の延長ラインに符号している。あるいは1号堀の存在をこの部分まで想定できるかもしれない。

出土遺物によって確実にその時期を明らかにできた遺構はなかったが、僅かに上層堆積など層位的な観察から判断できた点がある。

①3・4号土塁と1号堀は同時存在する(図28)。
②2・3号土塁間から確認された多量の埋土の堆積によって、2・3号土塁を同時存在として認めることができる。おそらく2号土塁をも含めて3・4号土塁と1号堀は同時に存在していたと考えられる(図26・27)。
③更に、堀め立て後に新たな文化面が形成された様相は確認できないため、2～4号土塁と1号堀をこの地点における最後の普請の痕跡として位置づけられる。
④5号土塁及びその東側に広がる2号集石も検出した状況からは一連の工程として認識できる(図33)。

南側から検出された2～4号土塁と1号堀、それに対し北側から検出された5号土塁及び2号集石、それぞれ層位的な観察から同時存在として確認できるが、両者全体での時間的位置づけは判然としなかった。3号土塁と5号土塁にはそれぞれ西側石積によく似た様相が見てとれ、また位置的にも喰い違いが生じ、密接な関係となっている。同様な石積構築手法がとられる3号土塁と5号土塁をも、同時存在として認めることができるかも知れない。大きく推量を加えてきたが2～5号土塁・1号堀等、この地点で検出された遺構は同時存在したものと推定される。概念化したものを作図した(図49)。

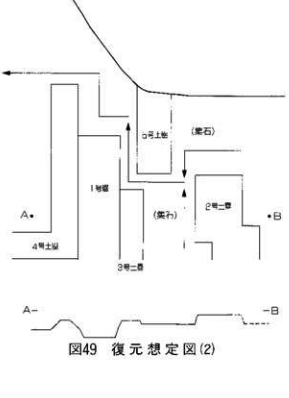


図49 復元想定図(2)

最後にこれら遺構の年代である。検出した4号土塁は地籍図で確認できる西曲輪南虎口前の馬出土塁に推定できるため、西曲輪の存在を前提とした遺構となる。それ故、その年代を天文20年(1551)の西曲輪増築まで遡らせることができる。一方、2・3・5号土塁等を複雑に配置して形成した虎口空間は梅翁曲輪からの動線を意識した構造となっている。すでに前述したように梅翁曲輪の増設は、恵林寺所蔵『甲州古城勝頼以前図』に記される「平岩七之介築候添曲輪」の注記から、天正10年(1582)の武田氏滅亡

以後に甲斐国を領有した徳川家康によって増築されたことが判明している。そのため、土塁を複雑に駆使した虎口空間の創設を武田氏滅亡後の徳川家康による梅翁曲輪増設以降とすることができる。4号土塁に先行する土塁及びその西側に確認した堀状の落ち込み等の存在から、個々の遺構の構築年代としては天文20年まで遡り得るが、今回の調査により確認された複雑な配置構成をとる遺構群としての年代は武田氏滅亡後の天正10年以降に位置づけられよう。武田氏滅亡後の館整備について、現在、知り得る史料では前述した徳川家康による梅翁曲輪増設と加藤光泰による館内への石垣構築などがある。また、過去の発掘調査成果からも、梅翁曲輪の増設以後に修築の手が加わっていることが確認されている。天正18年(1590)徳川家康の関東移封後、甲斐を領有した羽柴秀勝・加藤光泰、更には浅野長政に至るまで、そのつど館整備が続けられ、そうした結果が今回検出された遺構として捉らえることができる。

折れが多用される複雑な構造となったが、城門等の作事の痕跡は捉えていない。図中の矢印を動線として推定するが、調査によって確認されたのは5号水路北側部分のみであり、他は推測の域を出ない。なお、4号土塁に先行する土塁と堀状の落ち込み、あるいは調査区各所で確認された盛土層や埋土層など何時期かの遺構変遷が確認でき、過去の周辺地域での調査成果を追証することができた。そうした点からは大きな成果が得られたが、その具体像は依然、不明瞭であり、今後に更なる課題を残すこととなった。

参考文献

1．飯沼賢司「戦国期の都市〝甲府〟」『甲府市史研究』第2号 1985
2．磯貝正義「武田氏と甲府―信虎開府前―」『甲府市史研究』第5号 1988
3．上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 1982
4．小野正敏「越前一乗谷の町割と若干の問題」『日本海地域史研究』第3輯 1981
5．小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982
6．数野雅彦「中世城下町甲府の立地と都市プラン」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第3号 1990
7．数野雅彦「甲斐における守護所の変遷」「守護所から戦国城下へ」日本考古学協会1993年度新潟大会 1994
8．木戸雅寿「道・虎口・門とその空間構造について―安土城の場合―」『織豊城郭』第6号 1999
9．『甲府市史 史料編第1巻』甲府市市史編さん委員会 1989
10．『小牧城下町発掘調査報告書―新町遺跡―』小牧市教育委員会 1998
11．『史跡武田氏館跡Ⅰ』甲府市教育委員会 1985
12．『史跡武田氏館跡Ⅲ』甲府市教育委員会 1998
13．『史跡武田氏館跡Ⅳ』甲府市教育委員会 1999
14．『瀬戸市史 陶磁史篇四』瀬戸市史編纂委員会 1993
15．高田徹「虎口に関する一考察―普請と作事の関係を中心として―」『城郭研究室年報』vol.8 1998
16．高田徹「虎口の機能・評価に関する問題について」『織豊城郭』第6号 1999
17．中井均「虎口「空間」について」『織豊城郭』第6号 1999
18．なかざわ・しんきち「甲斐府中概観―飯沼論文批判―」『甲府市史研究』第3号 1986
19．森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 1982

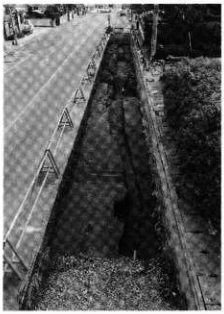


写真1　調査区完掘状況

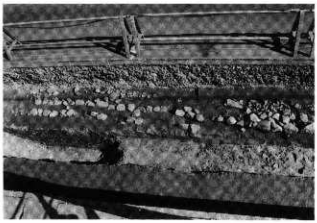


写真2　5号溝

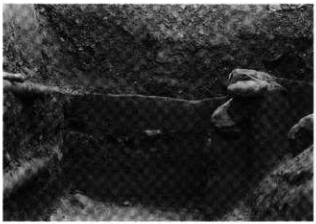


写真3　9号溝土層堆積

写真4　9号溝

写真5　1号土坑礫検出状況

写真6　1号土坑完掘状況

図版1　第54次調査

写真７　集石墓坑検出状況

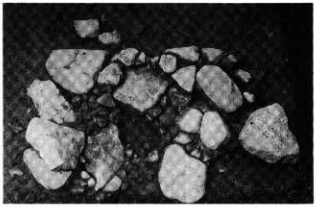


写真８　集石墓坑完掘状況

写真９　井 戸 跡

写真10　調査風景

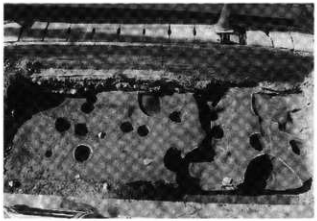


写真11　調査区完掘状況

写真12　調査終了後仮舗装状況

図版２　第 54 次 調 査

写真13　1号水路石積

写真14　1号水路土層堆積

写真15　1号水路

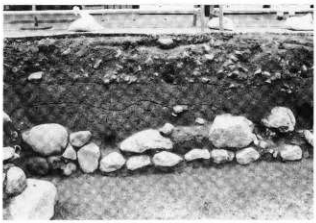


写真16　1号水路石積

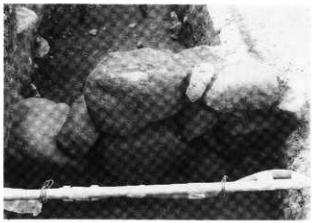


写真17　2号水路西側石積

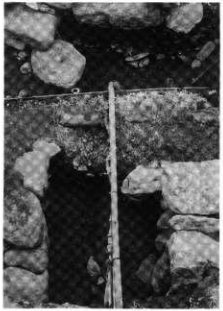


写真18　2号水路

図版3　第55次調査

写真19　調 査 前 風 景

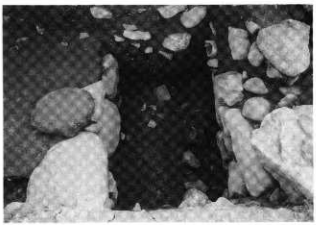


写真20　3 号 水 路

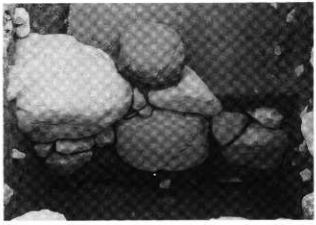


写真21　3号水路東側石積

写真22　3号水路西側石積

写真23　4号水路（4区）

写真24　4号水路（5区）

図版4　第 55 次 調 査

写真25　5号水路遠景

写真26　5号水路、4号石列

写真27　6号水路、5号石列

写真28　7 号 水 路

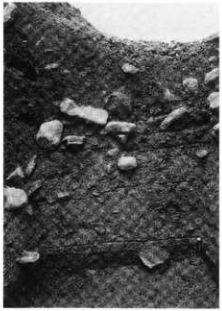


写真29　1号土塁土層堆積

写真30　2号土塁（東より）

図版5　第 55 次 調 査

写真31　2号土塁（西より）

写真32　2号土塁西側石積

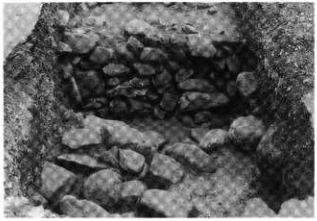


写真33　2号土塁西側石積

写真34　調 査 風 景

写真35　3号土塁西側石積

写真36　遺構保護処置状況

図版6　第 55 次 調 査

写真37　3 号 土 塁

写真38　3 号 土 塁

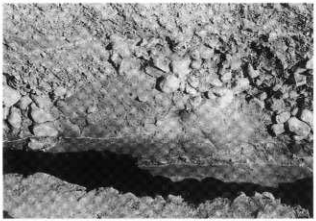


写真39　4号土塁（南より）

写真40　5号土塁、2号集石

写真41　6号土塁(17区東壁土層堆積)

写真42　埋戻し状況

図版 7　第 55 次 調 査

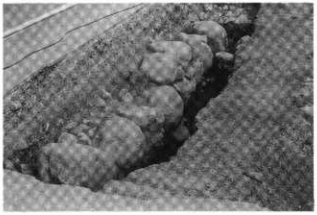


写真43　1 号 石 列

写真45　2号石列（東より）

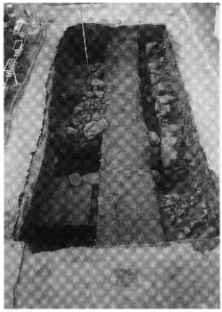


写真44　1号石列、3号水路

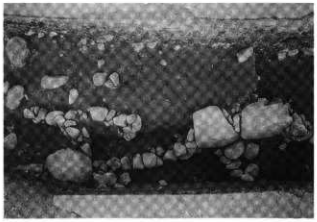


写真46　2 号 石 列

写真47　6 号 石 列

写真48　調 査 風 景

図版8　第 55 次 調 査

写真49　9 号 石 列

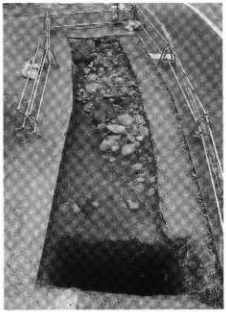


写真51　1号集石

写真50　9号石列、7号水路遠景

写真52　3 号 集 石

写真53　4 号 集 石

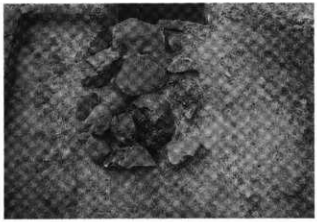


写真54　5 号 集 石

図版9　第 55 次 調 査

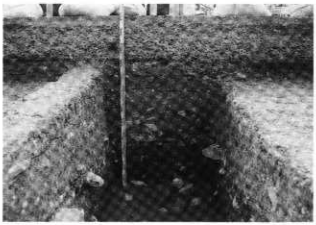


写真55　盛土層2土層堆積

写真56　盛土層2・3土層堆積

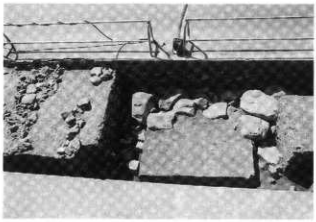


写真57　7・8 号 石 列

写真58　盛土層4土層堆積

写真59　電線等地中埋設工事立会い

写真60　側溝敷設工事立会い

図版10　第 55 次 調 査

写真61　工事立会い風景

写真62　夜間工事立会い風景

写真63　集石墓坑出土かわらけ

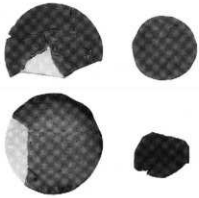


写真64　か わ ら け

写真65　中国産磁器

写真66　瀬戸美濃灰釉丸皿

図版11　工事立会い風景・出土遺物

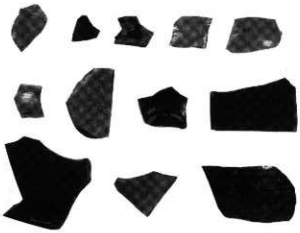


写真67　瀬戸美濃陶器

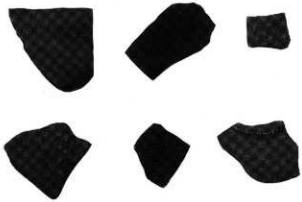


写真68　1号土坑(54次調査)出土須恵器

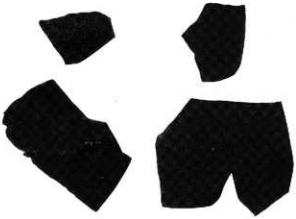


写真69　国 産 陶 器

写真70　銭　　貨

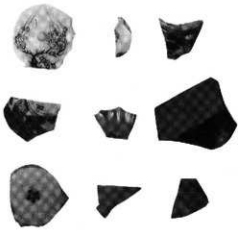


写真71　国産磁器

写真72　金 属 器

図版12　出 土 遺 物

報告書抄録

ふりがな	しせきたけだしやかたあと
書名	史跡武田氏館跡
副書名	県道甲府山梨線整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	V
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	9
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号　電話 055(223)7324
発行年月日	平成12年3月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間 調査面積	調査原因
武田氏館跡	山梨県甲府市 古府中町 屋形三丁目 大手二丁目	19201	01110	35° 40′ 58″	138° 34′ 50″	19971014 ～ 19971224 19980805 ～ 19990322 1,605m²	県道整備事業 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武田氏館跡	城館跡	中世	土塁、堀、石列、水路跡、土坑、集石遺、井戸跡、ピット、溝等	かわらけ、瀬戸・美濃、青磁、白磁、染付、金属器、石製品、銭貨	

甲府市文化財調査報告9

史跡 武田氏館跡 V

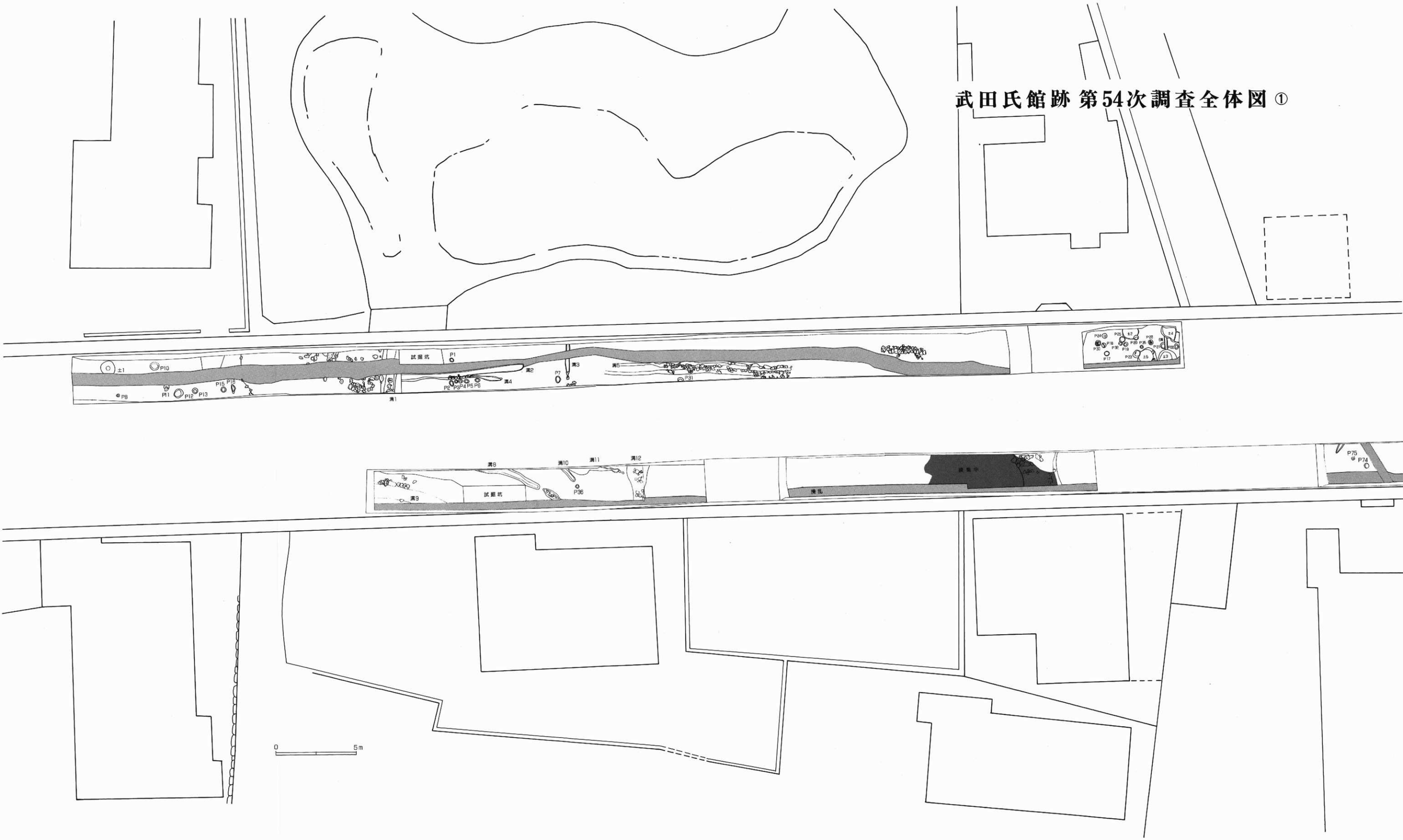
―県道甲府山梨線整備事業に伴う発掘調査報告書―

平成12年3月21日

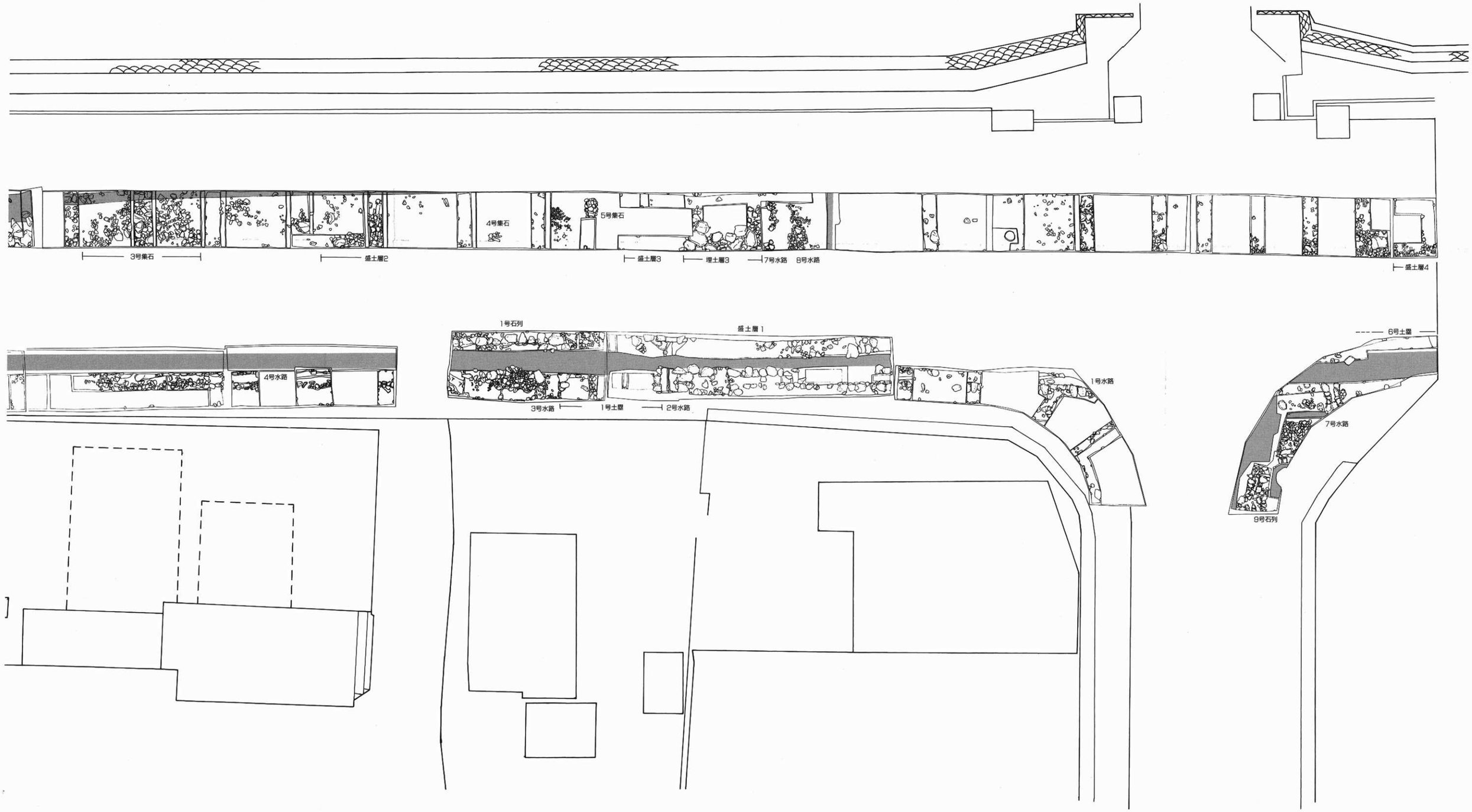
発行　甲府市教育委員会
〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号
TEL 055 (223) 7324
FAX 055 (226) 4889

印刷　㈱内田印刷所
〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18

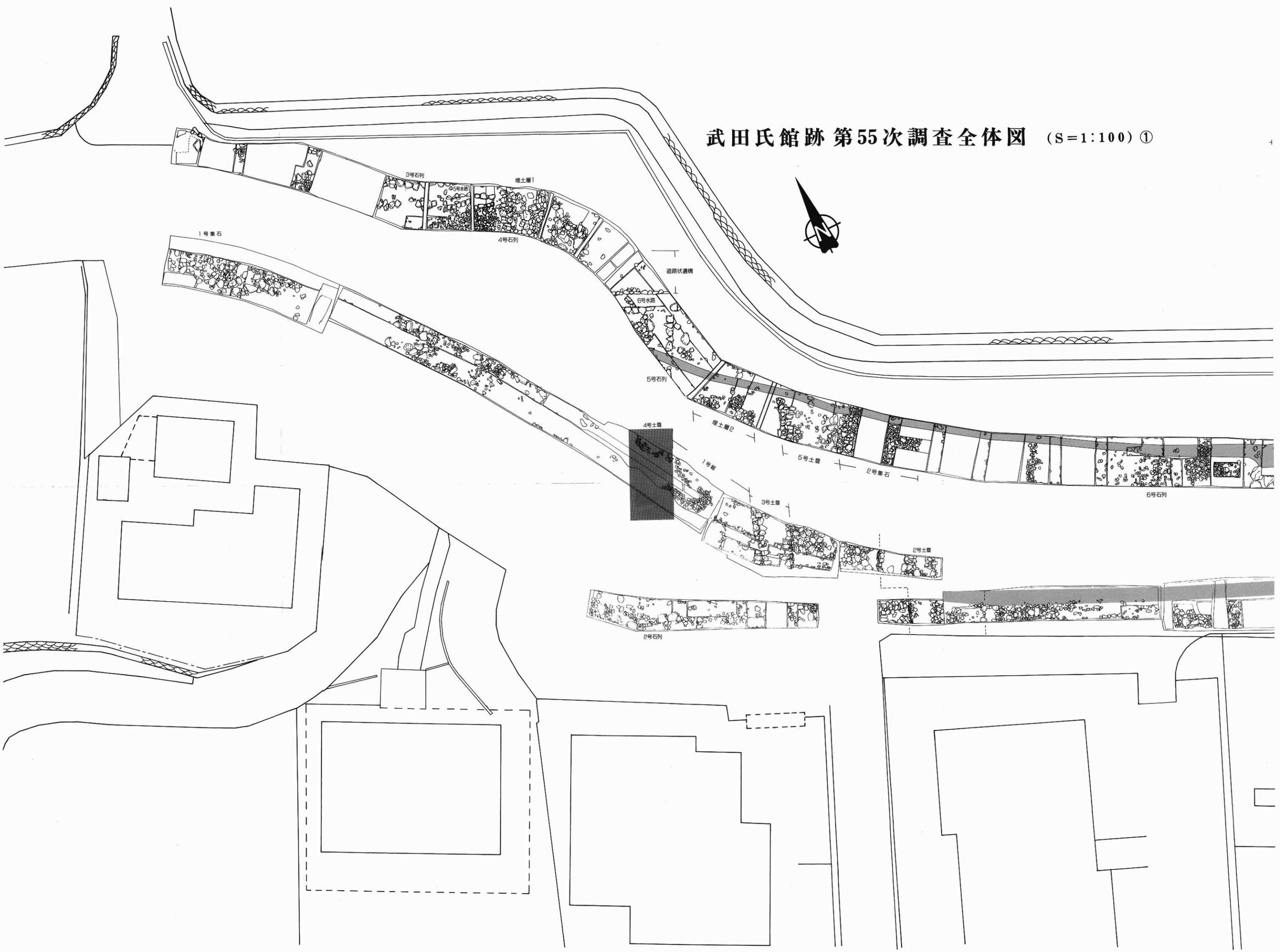
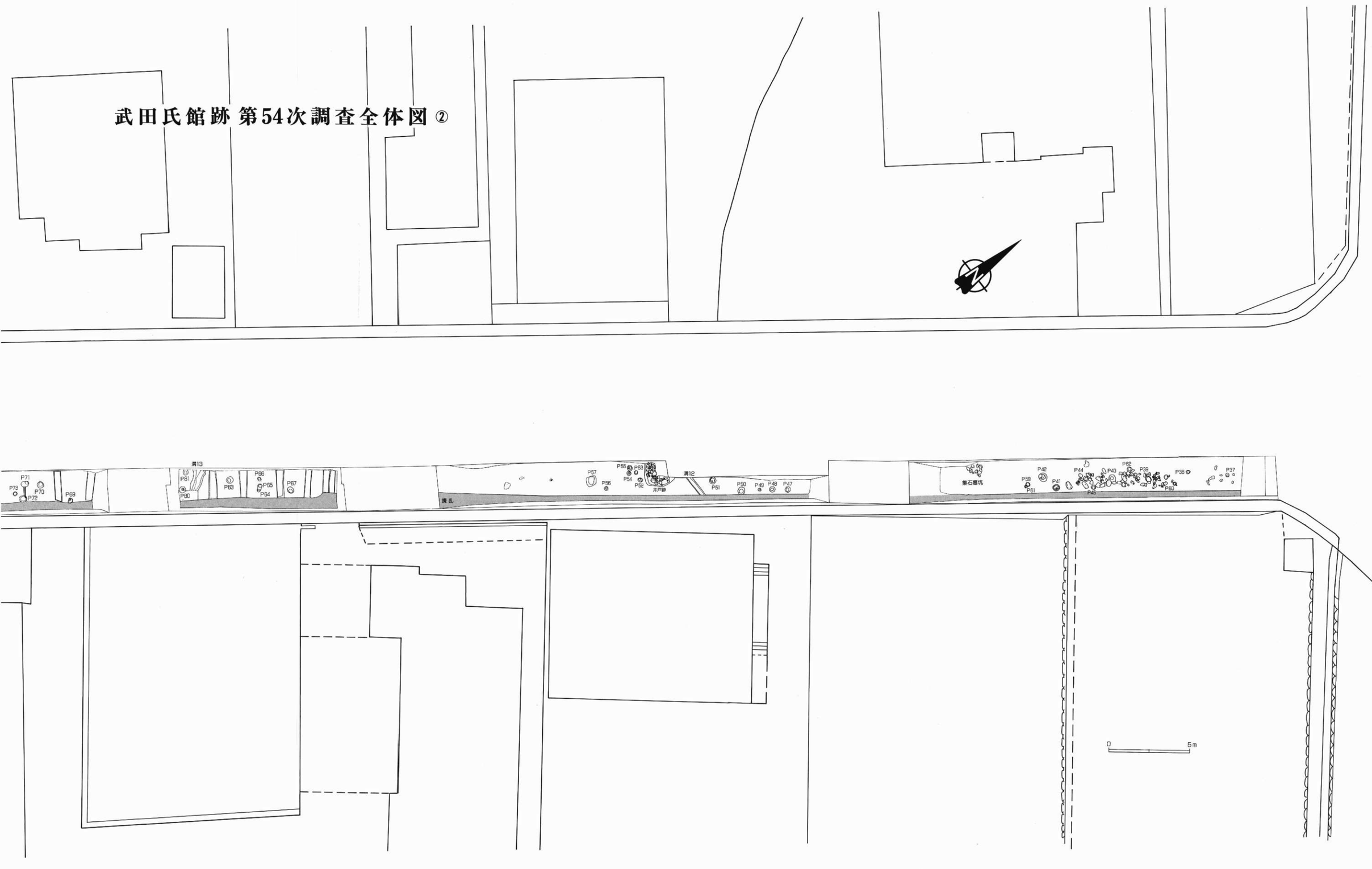
武田氏館跡 第54次調査全体図①



武田氏館跡 第55次調査全体図 (S=1:100) ②



武田氏館跡 第55次調査全体図 (S=1:100) ①



武田氏館跡 第54次調査全体図②